下　原　遺　跡

平成５年８月

宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

序　文

本市は現在約15万世帯、人口43万人を越える北関東最大の都市へと発展してまいりました。しかし郊外に大きな面積を占めていた田畑、山林の開発も近年増加の一途を辿っており、これに伴いまして埋蔵文化財の調査件数も急増いたしております。その内の一件として兵庫塚地内の宅地造成工事中に多数の土器片が認められ、確認調査を行った結果、奈良、古墳時代の集落跡があることがわかりました。

そこで開発側である株式会社ユーエスケーと協議を行った結果、当教育委員会が主体となって発掘調査を行うこととなり、この貴重な古代の人々が生活した跡を記録保存することとなりました。その結果をまとめたものが本報告書であり、各方面におきまして広く御活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本調査にあたりまして御指導いただきました栃木県教育委員会文化課、栃木県立博物館、及び本市文化財行政に深い御理解と御協力いただきました株式会社ユーエスケーに対しまして厚く御礼申し上げます。

平成５年８月

宇都宮市教育委員会教育長
藤　田　昌　平

例　　言

1　本書は宇都宮市兵庫塚町３丁目49番地他において宅地開発行為中に認められた下原遺跡の記録保存のための発掘調査報告書である。

2　調査は宇都宮市教育委員会が主体となり、株式会社ユーエスケーが調査費用（調査員の給与を除く）を負担し、平成４年６月17日から７月10日まで調査を実施した。

3　調査には定岡明義、梁木誠、神野安伸、今平利幸、大塚雅之があたった。

4　遺構、遺物の整理、実測は大森八重子、大野節子、鈴木芳子、福田喜久栄、樋口静子、鈴木道子、賀来孝代、横堀聡、君島朱美、岡田由希子、大沢順子の協力を得た。また遺物写真は横堀聡、賀来孝代があたった。

5　本書の執筆は梁木誠、今平利幸、大沢順子、賀来孝代、横堀聡の協力を得て、第１～３章を大塚雅之　第４章の遺物を梁木誠、遺構を大塚雅之が担当した。

6　本遺跡に関する図面、写真及び遺物は宇都宮市教育委員会が保管している。

7　発掘調査関係者は以下のとおり。

〔指導助言〕宇都宮市文化財保護審議委員　塙　静夫
同　大金宣亮
同　橋本澄朗

〔事務局〕　宇都宮市教育委員会

教育長	藤田昌平		
教育次長	近能忠良		
文化課課長	安達光政		
文化振興係長	北条和久	文化財保護係長	定岡明義
文化振興係	湯沢孝夫	文化財保護係	手塚英男
同	臼井成志	同	梁木　誠
同	高栖良子	同	小松俊雄
博物館建設推進班	渡辺　卓	同	大塚雅之
同	白井義雄	同	神野安伸
同	片山　繁	同	今平利幸
同	阿部邦男		
同	青木　徹		

〔調査補助員〕

五味淵志郎、阿久津フミ、宇梶トヨ、黒川テル子、増淵フミ、室井キン、入江キイ、入江ツヤ子、入江タカ子、入江通子

8　発掘調査及び報告書作成に関しては次の諸機関、諸氏のご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、順不同）

栃木県教育委員会、栃木県埋蔵文化財センター、株式会社ユーエスケー、株式会社興和産業、黒木組、大川清、石部正志、清水豊

凡　例

1　遺構の縮尺は１／60である。

2　遺物の実測図は１／３である。

3　遺物実測番号と図版の遺物番号とは一致する。

4　断面基準線は標高であり、平面図の方位は磁北〔建設省国土地理院（地磁気要素1980.0年値偏角W 6° 37'0〕を用いている。

5　文中及び図版中の略号は、SIは住居跡、SKは土坑、SEは井戸を意味する。

6　遺構実測図の土層説明においては、次の略号を用いた。

炭化物・・・・・・・・・・C

関東ロームブロック・・・ロームＢ（LB）

関東ローム粒子　　・・・ローム粒（LP）

示標テフラ　男体七本桜(Nt-S)　通称　七本桜軽石・・・SP

男体今市（Nt-I）　通称　今市軽石　・・・IP

赤城鹿沼　(Ag-K)　通称　鹿沼軽石　・・・KP

7　土器実測図のうち、断面が黒色に塗られているものは須恵器である。

8　土器観察表内の（Ｈ）は土師器、（Ｓ）は須恵器を示す。

目　次

序　文

例　言

凡　例

Ⅰ　調査の経過と方法

1　調査に至るまでの経過……1

2　調査の方法……1

3　調査の経過……2

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境……4

2　歴史的環境……5

Ⅲ　遺構と遺物

1　竪穴住居跡と出土遺物……8

2　土坑……33

3　井戸……33

Ⅳ　まとめ

1　遺物について……35

2　遺構について……39

挿　図　目　次

第１図　遺構配置図……３
第２図　周辺遺跡分布図……７
第３図　SI-01 平・断面図……８
第４図　SI-01 出土遺物実測図……９
第５図　SI-02 平・断面図……１０
第６図　SI-02 カマド平・断面図……１０
第７図　SI-02 出土遺物実測図……１１
第８図　SI-03 平・断面図……１２
第９図　SI-03 カマド平・断面図……１２
第10図　SI-03 出土遺物実測図……１３
第11図　SI-04 遺物出土状態図……１４
第12図　SI-04 平・断面図……１５
第13図　SI-04 カマド平・断面図……１６
第14図　SI-04 出土遺物実測図(1) ……１７
第15図　SI-04 出土遺物実測図(2) ……１８
第16図　SI-05 遺物出土状態図……２０
第17図　SI-05 平・断面図……２１
第18図　SI-05 カマド平・断面図……２１
第19図　SI-05 出土遺物実測図……２２
第20図　SI-06 平・断面図……２３
第21図　SI-06 カマド平・断面図……２３
第22図　SI-06 出土遺物実測図……２４
第23図　SI-07 平・断面図……２５
第24図　SI-07 カマド平・断面図……２５
第25図　SI-07 出土遺物実測図……２５
第26図　SI-08 遺物出土状態図……２６
第27図　SI-08 カマド平・断面図……２７
第28図　SI-08 出土遺物実測図……２８
第29図　SI-09 平・断面図……２９
第30図　SI-09 カマド平・断面図……３０
第31図　SI-09 遺物出土状態図……３０
第32図　SI-09 出土遺物実測図……３０
第33図　SI-10 平・断面図……３１
第34図　SI-10 出土遺物実測図……３２
第35図　土坑・井戸平・断面図……３３
第36図　炭窯平・断面図……３４
第37図下原遺跡出土土師器の器種と器形３６
第38図下原遺跡出土須恵器の器種と器形３７
第39図　前田遺跡出土土器の消長……３８
第40図　遺構配置模式図……３９
第41図　竪穴住居跡縦横比一覧……４０
第42図　住居跡主軸方位分布一覧……４１
第43図　前田遺跡との住居比較……４２

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表(1) ……５
第２表　周辺遺跡一覧表(2) ……６
第３表　SI-01 土器観察表……９
第４表　SI-02 土器観察表……１１
第５表　SI-03 土器観察表(1) ……１３
第６表　SI-03 土器観察表(2) ……１４
第７表　SI-04 土器観察表(1) ……１６
第８表　SI-04 土器観察表(2) ……１８
第９表　SI-04 土器観察表(3) ……１９
第10表　SI-05 土器観察表……２２
第11表　SI-06 土器観察表……２４
第12表　SI-07 土器観察表……２４
第13表　SI-08 土器観察表……２８
第14表　SI-09 土器観察表……３１
第15表　SI-10 土器観察表……３２
第16表　住居跡比較一覧……４１

図 版 目 次

PL 1　①確認調査風景（東より）
　　②確認調査風景（東より）
PL 2　①SI-01 作業風景（東より）
　　②SI-01 完掘状態（南より）
PL 3　①SI-02 生活面（西より）
　　②SI-02 カマド完掘状態（西より）
PL 4　①SI-02 完掘状態（西より）
　　②SI-03 遺物出土状況（南より）
PL 5　①SI-03 遺物出土状況（南西より）
　　②SI-03 カマド（南より）
PL 6　①SI-04 住居跡断面（南より）
　　②SI-04 カマド断面（東より）
PL 7　①SI-04 遺物出土状況（南より）
　　②SI-04 遺物出土状況（南東より）
PL 8　①SI-05 遺物出土状況（南より）
　　②SI-06 遺物出土状況（南より）
PL 9　①SI-05 完掘状態（南より）
　　②SI-06 完掘状態（南より）
PL10　①SI-06 カマド断面（北西より）
　　②SI-06 遺物出土状況（東より）
PL11　①SI-07 完掘状態（南より）
　　②SI-07 カマド完掘状態（南東より）
PL12　①SI-08 生活面（南より）
　　②SI-08 カマド断面（南西より）
PL13　①SI-08 完掘状態（南より）
　　②SI-08 カマド完掘状態（南東より）
PL14　①SI-09 遺物出土状況（南より）
　　②SI-09 カマド断面（南より）
PL15　①SI-09 カマド完掘状態（南より）
　　②SI-09 完掘状態（南より）
PL16　①SI-10 完掘状態（南より）
　　②SI-10 遺物出土状況（南より）
PL17　①SK-01 完掘状態（南西より）
　　②SK-02 完掘状態（南東より）
PL18　①SK-03 完掘状態（南より）
　　②SE-01 半裁状態（南より）
PL19　①炭窯断面（西より）
　　②炭窯完掘状態（西より）
PL20　①SI-01 出土遺物
　　②SI-02 出土遺物
　　③SI-03 出土遺物
PL21　①SI-03 出土遺物
　　②SI-04 出土遺物
PL22　①SI-04 出土遺物
PL23　①SI-05 出土遺物
PL24　①SI-06 出土遺物
　　②SI-07 出土遺物
　　③SI-08 出土遺物
PL25　①SI-08 出土遺物
　　②SI-09 出土遺物
　　③SI-10 出土遺物

Ⅰ　調査の経過と方法

1　調査に至るまでの経過

下原遺跡（宇都宮市兵庫塚字下原）は宇都宮市埋蔵文化財報告第10集『宇都宮の遺跡』：（昭和58年　宇都宮市教育委員会）には未記載であり周知の遺跡ではなかった。これは以前までコナラ、エゴノキ等の平地林であり、表採遺物が認められなかったことにより、分布調査による確認ができなかったことによる。その後樹木は伐採され、数年畑地として利用されていたが、平成４年５月下旬造成工事が開始された。　同年６月９日、造成工事地区内より土器の破片が認められるという市民からの通報があり、当課職員が現地を視察しこれを確認した。翌日開発者である株式会社ユーエスケーに連絡し、早急に現地に於いて協議したいとの旨を報告、後日、現地及び当課において担当者を協議を行った。その結果、登録遺跡ではないが、面積が約20,000㎡と広いうえ、土器片が認められる事から確認調査を実施し、その結果を踏まえて再度協議をもつこととなった。

同年６月16、17日、雨天の為造成工事が休止している際に確認調査を実施した。確認調査にあたっては、施工業者の重機（パワーショベル）３台によって当課職員立会いのもとにローム漸移層直上まで表土を剥削した。その結果、竪穴住居跡９軒、土坑７基、炭窯跡１基の他、土師器、須恵器破片が認められた。

翌日、この結果を基に再び担当者と協議を行った結果、遺跡の現状保存を含めた開発計画の変更は不可能であるということから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意が成立した。発掘調査に必要な費用面（調査員給与を除く）は原因者である株式会社ユーエスケーが負担し、調査は宇都宮市教育委員会が担当することになった。

同年６月22日から調査開始。造成工事と平行して実施し、調査が終了次第遺構は埋め戻されていくという緊急調査であった。

2　調査の方法

下原遺跡の調査区はおおまかにＬ字状を呈しており、西側が市道755号に接している。区内には道路や水路等はなく、便宜上の区分を設けていない。調査の手順は、確認調査時に認められた遺構はマーキングをしておき、施工業者の造成計画図面にそれをプロットする作業までを原因者に依頼した。その結果造成に用いる基準杭を利用できたため、基準杭打設、グリット設定、初期の遺構配置図作成の時間を省いて直接遺構の排土作業に取りかかることができ、調査期間短縮につながった。サブグリットは５ｍ四方でそれが25個(25m四方）で１グリットを構成するように設定した。グリットナンバーは西から東へＡ～Ｄ、北から南へ１～５とし、サブグリットは北西角から一列づつ北から南方向に

ａ～ｅ，ｆ～ｋ，ｌ～ｑ，・・・とした。遺構の調査順は造成工事の作業行程から定められており、西側のＳＩ０２から東へ順に行っていった。ただ炭焼き窯については、造成行程が後であるため最後に実施した。

遺構毎の調査手順は以下の通り。

① 壁のほぼ中央に直行するようにセクションベルトを設定し、生活床面まで掘り下げる。その後、断面図を作成し記録写真を撮影する。

② セクションベルトを除去し、遺物出土全景、及び遺物出土近接写真を撮影する。その後、遺物平面図を作成し、遺物を取り上げる。

③ 床面を精査し、柱穴痕、周溝痕、その他生活面に於いて存在し得る遺構を半裁し、断面を記録する。同時にカマドにセクションベルトを設定し、その断面を記録してから掘り上げ、遺構平面図を作成する。

④ さらに床面を精査し、貼床が認められる場合は掘り方まで半裁し、断面を記録する。カマドについてもソデ及び床下を半裁し、記録する。その後、残りを掘り上げ最終の遺構平面図を作成する。なお図面は1/20で作成し特に遺物や残存状況の良好なカマドについては1/10で行った。また遺物は３～４㎝以上のものについては番号を付して全て現位置を記録した。

土坑については半裁し、断面を記録した後、掘り上げて1/20の図面で記録した。

なお、ＳＥ０１については、重機で半裁した後、エレベーションを記録した。

3　調査の経過　〔発掘日誌抄〕

6月23日　休憩所等設営。遺構面精査、ジョレンかけ。SI02、SI01排土開始。

24日　雨の為、作業中止。

25日　SI03排土開始。雨の影響で緩んだロームが粘り、作業能率が上がらない。

26日　工事の都合上、本日で３軒分の調査を終了。非常に慌ただしい。

29日　遺構面精査、ジョレンかけ。SI04排土開始。作業員３名増員、能率向上する。

30日　SI05排土開始。雨の為、午後から作業中止。

7月１日　SI06の脇の土坑は削平の進んだ住居と判明しSI10とする。

２日　SI06、SI10排土開始。雨の為、午後から作業中止。

３日　遺構面精査、ジョレンかけ。SI07、SK01、SK02排土開始。

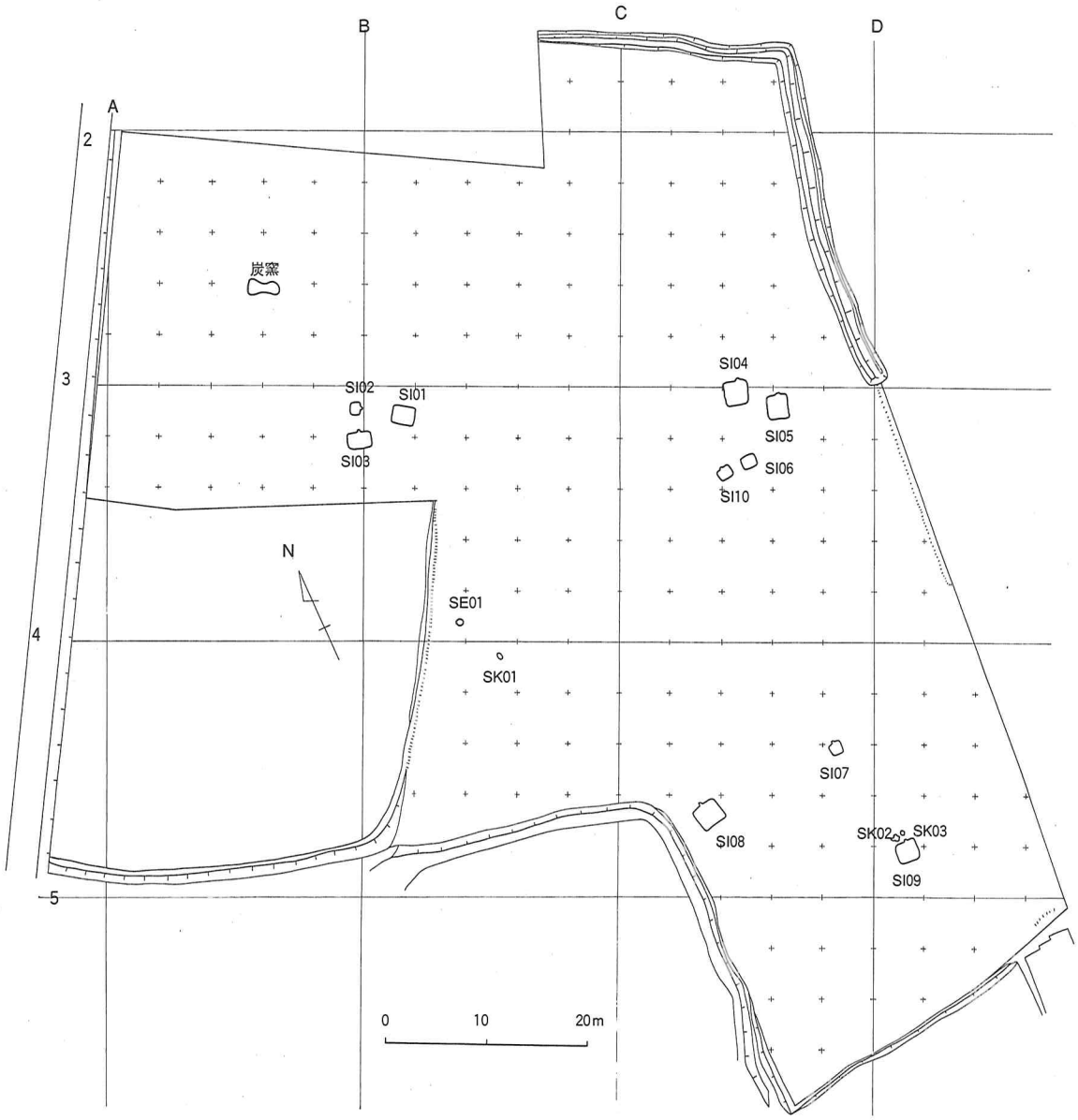
６日　SI08排土開始。規模の割りに掘り込みが浅く、排土は迅速に終了する。

７日　SI09排土開始。

８日　SE01重機にて裁断。エレベーションを得る。

９日　炭窯排土開始。炭窯遺構平面図開始。円礫を多用しており図化作業手間取る。

10日　炭窯遺構平面図終了。撤収。調査終了。


A
B
C
D
2
3
4
5
炭窯
SI02
SI01
SI03
SI04
SI05
SI06
SI10
N
SE01
SK01
SI07
SI08
SK02
SK03
SI09
0
10
20m

第１図　遺構配置図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境

宇都宮市付近の平地は、大きくふたつに分類することができる。ひとつは鬼怒川や田川の河川堆積物で形成された沖積低地と、もうひとつはそれらの河川によって浸食されなかった第四紀台地である。一般に台地というと平地より一段高い丘状の地形を連想するが、ここでは地理的にいう形成過程からみた段丘を指している。下原遺跡がのる宝木台地は宇都宮市の西方に南北に細長く形成されており、東の田川と西の姿川に挟まれている。北部は上小池町の今市扇状地扇端付近（徳次郎北の日光宇都宮道路と国道119号の最も接近する付近）から宝木、鶴田、陽南、雀宮と続き、小金井、小山へと伸び、結城台地へと連続する。宝木ローム以降をのせたこの利根川、鬼怒川、思川にかこまれた台地（宝木台地）*1の分水界は東に偏在しており、*2宇都宮市街地から南では田川右岸300～400m付近にある。すなわち台地は東端から緩やかにＳＷ方向に傾斜しているため田川に流入する自然河川は存在せず、小河川による浸食谷はすべてＳ～ＳＳＷ方向へ指向している。鶴田西方の一の沢、二の沢、三の沢等の地名はこの台地を開析する比高の小さな小河川（鶴田川）の支流のことで、大谷街道に直行するように連続している。これらの小河川は、宝木台地を南北方向に細かく開析した後、すべて姿川へ合流する。

下原遺跡は宇都宮市街南南西約７㎞の宝木台地上にあり、この台地を開析し南流する西川田川と兵庫川に挟まれた小台地上の標高約88ｍに位置する。これらの二河川の源流は江曽島付近に端を発するが、現在は完全に市街地化されており確認は困難である。これらの二河川は、遺跡より2,500m下流の石橋町上古山付近にて合流、さらに1,500m下流の石橋町下古山付近にて姿川に合流する。遺跡の東方を流れる兵庫川は約1,000m下流で新川に合流するが、この新川の上流は宝木用水（1859年完成）であり、江曽島地区を流下するこの新川とは本来別のものである。明治10年代に本地域の渇水対策のため宇都宮市西が岡以南を掘削し連接したもので、江曽島地区で呼称される新川の源流は宇都宮市滝谷町の滝権現（宇都宮七水の一つ）である。本書ではこの河川を仮に「旧新川」と呼称するが、この上流域には雷電山古墳、雷電山遺跡等が所在する。

この付近で小台地の幅は最大となっており、約900mである。水利はあまり良好ではなく、以前はほとんどが平地林であり、畑地を中心とした土地利用がなされている。水田も若干認められるがこれは地下水をポンプで揚水して行われているのが普通である。戦後、総合運動公園や環状線の建設に伴い開発が進み、最近では住宅地の進出が著しい。

＊１　阿久津　純「宇都宮付近の関東ローム（火山灰）層『地球科学』第33号　1957

＊２　経済企画庁「地形・表層地質・土じょう調査　宇都宮」『土地分類基本調査』 1960

2　歴史的環境

下原遺跡の所在する宇都宮市の兵庫塚から雀宮地区は、多くの遺跡が分布する地域として古くから知られている。中でも雀宮地区は宇都宮市内としては弥生時代の遺跡が多く分布する地域でもあり、二軒屋式土器の標式地である二軒屋遺跡が所在している。

これらの弥生時代の遺跡の分布状況を見ると、台地を開析する表生谷に沿っていることが特徴的である。これは初期稲作栽培に適した湿地や池沼地が多くあったことによると思われる。現在では住宅地化してしまった旧新川や兵庫川流域は、最近まで「ヤジッタ」と言われる冬季でも排水できず、腰まで埋没してしまう様な湿田であった。

これに続く古墳時代では、この兵庫川上流にあたる舌状台地に塚山古墳群が造営される。この古墳群は現在目視できる古墳３基の他、多数の古墳群を形成し、柄鏡形前方後円墳の存在も伝えられている*1。また旧新川の上流域の舌状台地にも雷電山古墳が造営されており、前述した湿地を南部から見渡せる位置にある。この付近の河川低地から台地上までの比高は約２～４ｍでさほど高くないが、古墳造営には適地と思われる。西川田川、兵庫川、旧新川および田川に挟まれたこの地域は古墳の一大密集地域であったであろうが、市街化が進んだ現在では削平、滅失したものも多く、その全体像を捕らえるのは不可能である。

このような当時の経済地域である稲作地帯の近くに、その後大規模な古墳群が造営されたことはおそらく全く関連が無かったとは言えないであろう。

このように弥生時代から古墳時代、さらには奈良、平安時代へと続く遺跡の多い地域であり、社会状況の推移を見る上で重要な地域であるが、現在においても住宅地を中心に開発が著しい地域であり、遺跡の滅失防止が最大の懸念事項である。

No	遺　跡　名	所　在　地	種別	時　期	備　考
197	旭ヶ丘団地北遺跡	兵庫塚309－3	集落	縄文	
198	旭ヶ丘団地遺跡	兵庫塚164－28	集落	縄文	
202	北若松原遺跡	雀宮町1665－14	集落	古墳・奈良	平成３年調査
203	若松原遺跡	雀宮町1118－1	集落	縄文～古墳	
204	一向寺別院付近遺跡	雀宮町1665－3	集落	古墳	
205	二軒屋遺跡	雀宮町1117－5	集落	弥生・古墳	※１
206	西原北遺跡	雀宮町1115－2	集落	縄文～古墳	
215	上坪遺跡	針ヶ谷町1257	集落	弥生～奈良	昭和23年試掘※２
216	上坪新田遺跡	針ヶ谷町520	集落	縄文～奈良	

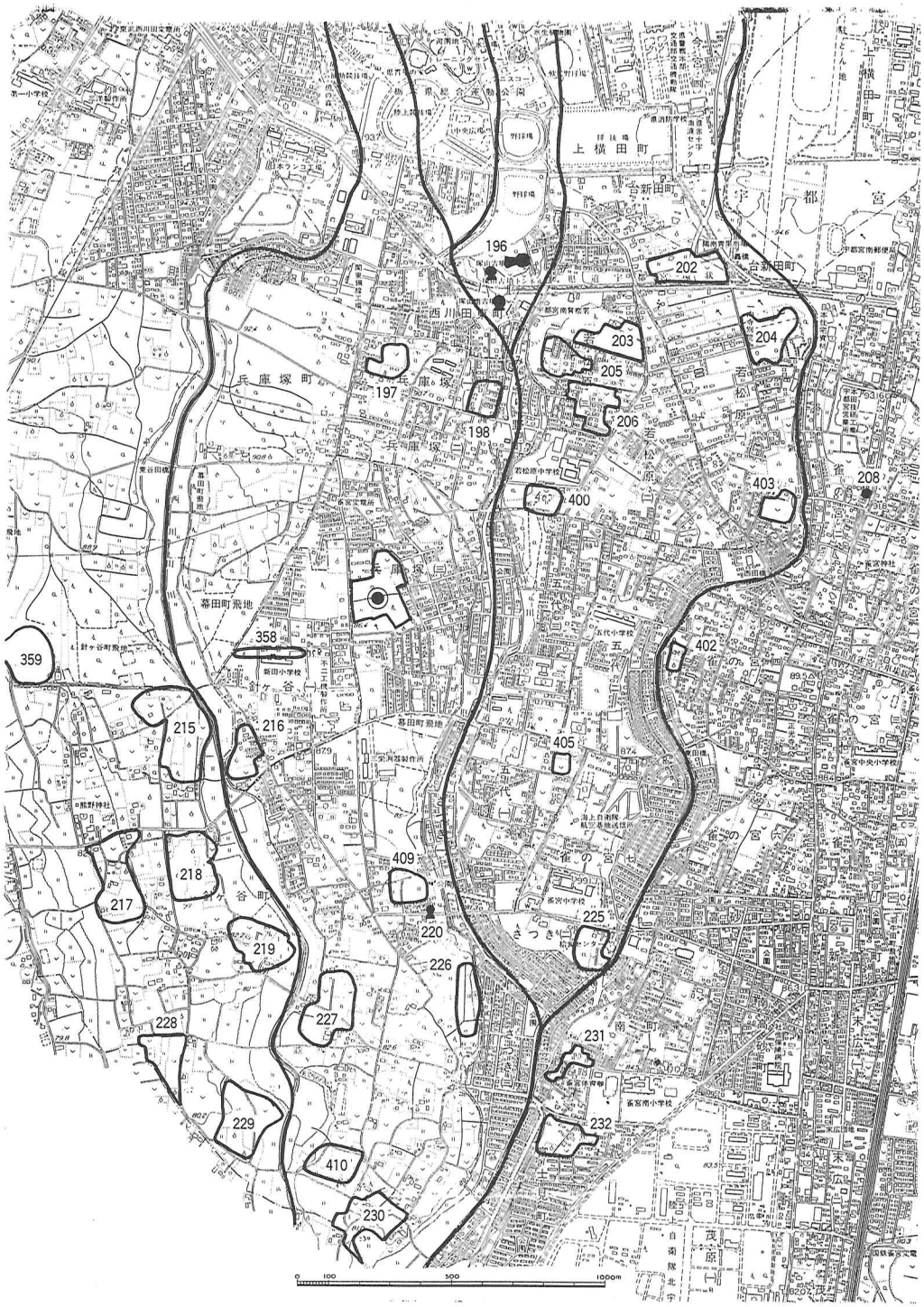
第１表　周辺遺跡一覧表（１）

*1　宇都宮市教育委員会「塚山古墳」『宇都宮市文化財年報第７号』1991

No	遺　跡　名	所　在　地	種別	時　期	備　考
217	熊野神社南遺跡	針ヶ谷町1052	集落	奈良	
218	立海道遺跡	針ヶ谷町958	集落	古墳・奈良	
219	見明遺跡	針ヶ谷町911－2	集落	縄文・古墳・奈良	
225	天狗原遺跡	雀宮町1010－1	集落	縄文～古墳	※3
226	島の前遺跡	針ヶ谷町350	集落	縄文・古墳・奈良	
227	赤岩遺跡	針ヶ谷町371－2	集落	縄文・古墳	
228	並木遺跡	針ヶ谷町844	集落	縄文・古墳・奈良	
229	三ツ矢遺跡	針ヶ谷町807	集落	縄文・奈良	
230	石川坪遺跡	針ヶ谷町227	集落	縄文・奈良・中世	※4
231	赤土山遺跡	南町10－21	集落	縄文・奈良	
232	富士見団地北遺跡	富士見町580－3	集落	縄文・古墳	
400	若松原南遺跡	雀宮町1109－1	集落	古墳	
402	若松原南遺跡	雀宮町1190－1	集落	古墳	
403	留西南遺跡	雀宮町1072－1	集落	古墳・奈良	
405	大谷田遺跡	雀宮町986－60	集落	奈良・平安	
409	二子塚北遺跡	針ヶ谷町410－3	集落	奈良	
410	鳴神遺跡	針ヶ谷町227	集落	縄文・奈良	
196	塚山古墳群	兵庫塚309－3	古墳	古墳	県指定
208	十里木古墳	雀宮町1665－14	古墳	古墳	切石石室
220	二子塚古墳	雀宮町1118－1	古墳	古墳	前方後円墳,H元調査
358	針ヶ谷新田古墳群	兵庫塚164－28	古墳	古墳	円墳4基、S58調査
359	幕田古墳群	雀宮町1665－3	古墳	古墳	円墳10基

第2表　周辺遺跡一覧表（2）

※1　・「下野中原遺跡調査概報」『考古学』第10巻第10号　昭和14年
　　・「北関東に於ける後期弥生式文化に就いて」『考古学』第10巻第10号　昭和14年
※2　・「有史以前の針ヶ谷」『下野史談』第16巻第22号　昭和13年
　　・「針ヶ谷上坪弥生式土器」『下野史談』第26巻第2号
※3　・「下野中原遺跡調査概報」『考古学』第10巻第10号　昭和14年
　　・平成3年　宇都宮市教育委員会調査
※4　・『考古学』明治37年
　　・「奥羽文化南漸資料」『考古学』第1巻第1号　昭和5年
　　・「有史以前の針ヶ谷」『下野史談』第16巻第22号　昭和13年


196
202
203
204
205
206
197
198
400
403
208
402
405
409
220
225
226
227
228
229
230
231
232
410
215
216
217
218
219
358
359
上横田町
台新田町
西川田町
兵庫塚町
若松原
幕田町飛地
針ヶ谷町
五代
雀の宮
南一町
宇都宮
0
100
500
1000m

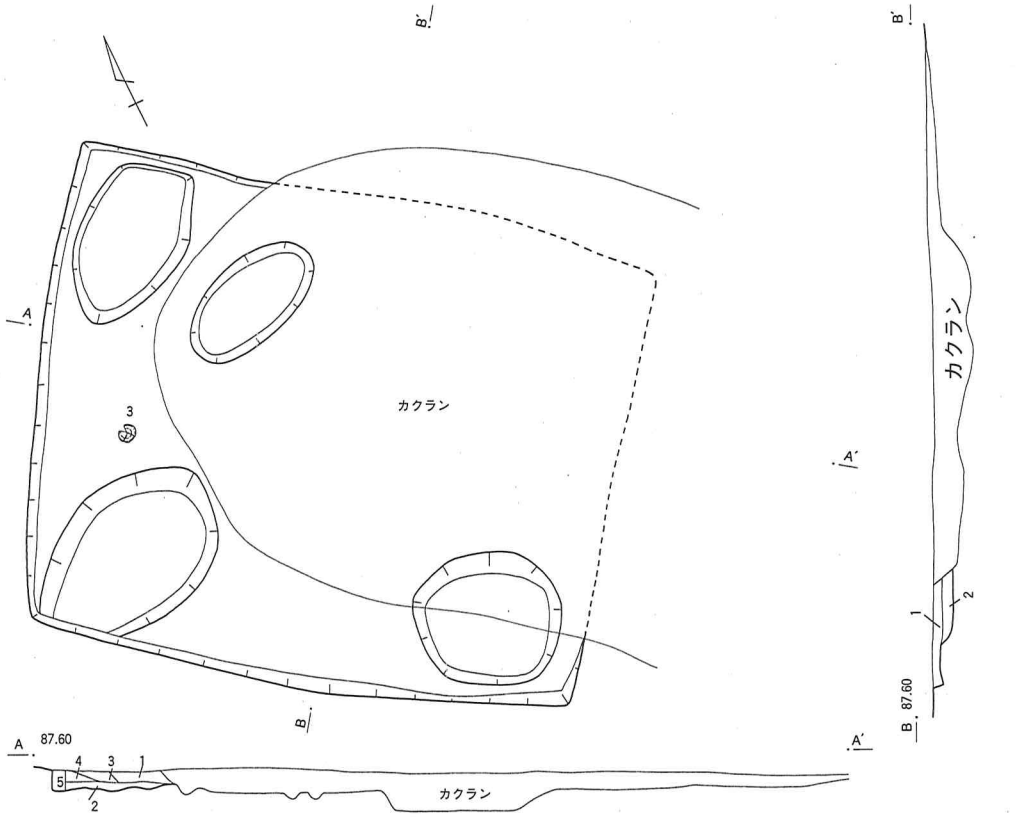
第２図　周辺遺跡分布図

Ⅲ　遺構と遺物

1　住居跡と出土遺物

ＳＩ０１（第３図：図版２）

位置　調査区の西側（Ｃ－３－ａグリッド）に所在、住居分布グルーピングⅣ１。**平面形**　3.9 × 4.5mの横長長方形を呈する。北東付近の約１／４が攪乱により破壊されている。**主軸**　N36°Ｅ　**壁**　堀り込みは約８㎝と浅く、立ち上がりは約75°である。東壁のほとんどと北壁の一部は攪乱により破壊されている。**床面**　一部に貼床が認められるが、固くしまった面は確認できない。四隅に床下堀り込みが認められ、埋土は人為埋没土である。ただし北東コーナー部の床下堀り込みは攪乱により確認できない。コーナー部以外の床下堀り込みが２ヶ所に認められる。**住居埋土の状況**　埋土は極めて浅

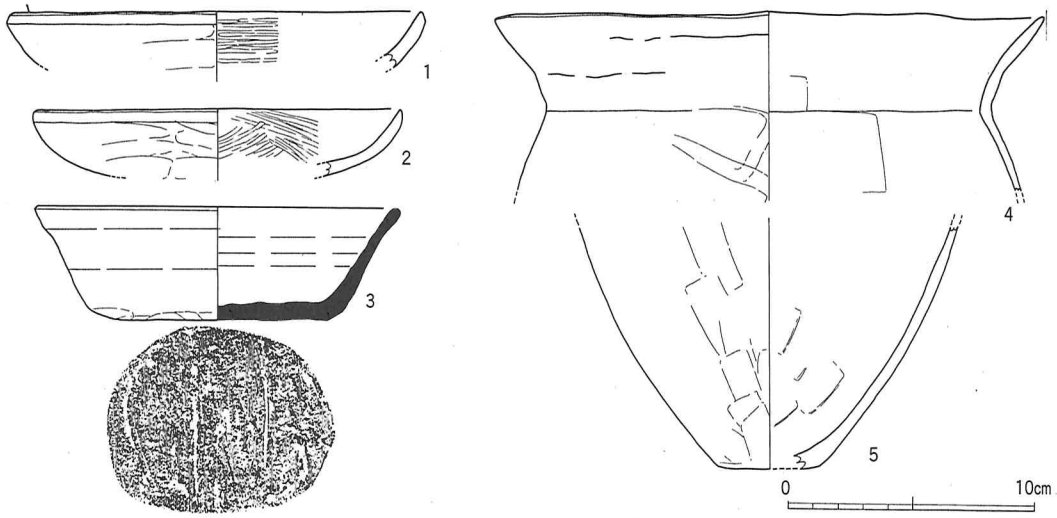


1．褐色土（ローム粒、ロームＢ少）
2．暗黄褐色土（ローム粒やや多、ロームＢ少）
3．黒褐色土（ローム粒少）
4．暗褐色土（ローム粒主体、ローム小Ｂ少）
5．褐色土（ローム粒多、しまりなし）

第３図　ＳＩ０１　平・断面図

く、また攪乱が大きく入っているため、詳細は不明であるが、自然堆積と思われる。**柱穴**　無し。**周溝**　認められない。**カマド**　不明。**遺物**　土師器　坏1、甕3

須恵器　坏1



第4図　ＳＩ０１　遺物実測図

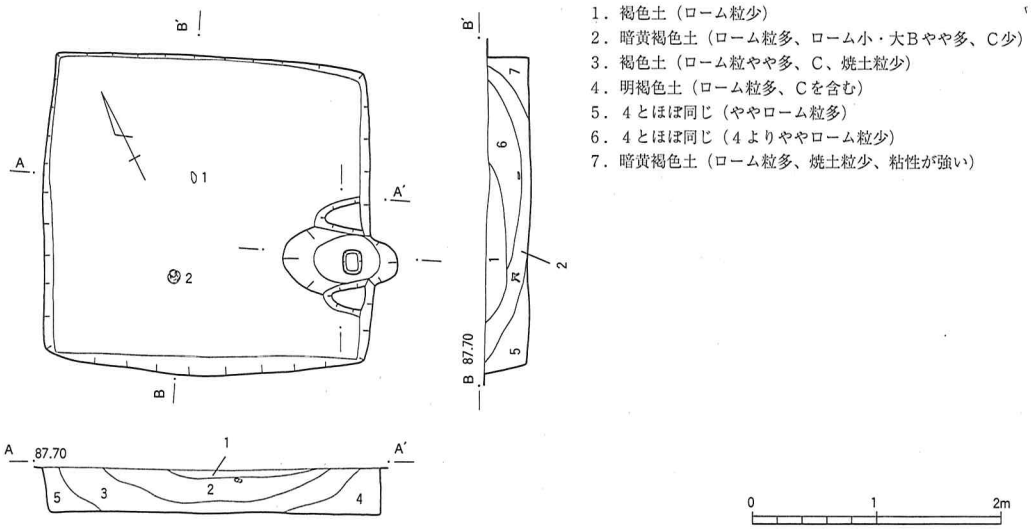
	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
1	坏(H)	口径 16.4	砂粒少 焼成良好	橙褐色	口縁部外面に稜を持つ	内面は横方向磨き、口唇部ヨコナデ、外面稜以下はヘラケズリ	10%	カマド付近	
2	坏(H)	口径 15.0	緻密 焼成良好	橙褐色	内湾気味に浅く開く	内面は横方向磨き、外面ヘラケズリ後、口唇部ヨコナデ	15%	覆土中	
3	坏(S)	口径 14.7 器高 4.7 底径 8.8	白色砂粒やや多 焼成良好	灰褐色	直線的に開きつつ立ち上がり、口縁部から1/3付近でさらに開く	底部ヘラ切り後手持ちヘラケズリケズリ、底部下端を面取り状にヘラケズリ、ろくろ右まわり	70%	覆土中	底部外面に「‖」のヘラ記号
4	甕(H)	口径 22.2	微細砂粒混 焼成良好	赤褐色	頸部はくの字形 器壁は薄く固い	胴部ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、一部さらにヘラケズリ	10%	覆土中	No5と同一個体
5	甕(H)	底径 4.2	微細砂粒混 焼成良好	暗褐色	器壁は薄く固い	内面丁寧なヘラナデ、外面縦方向ヘラケズリ底部外面ヘラケズリ	5%	覆土中	No4と同一個体

第3表　ＳＩ０１出土　土器観察表

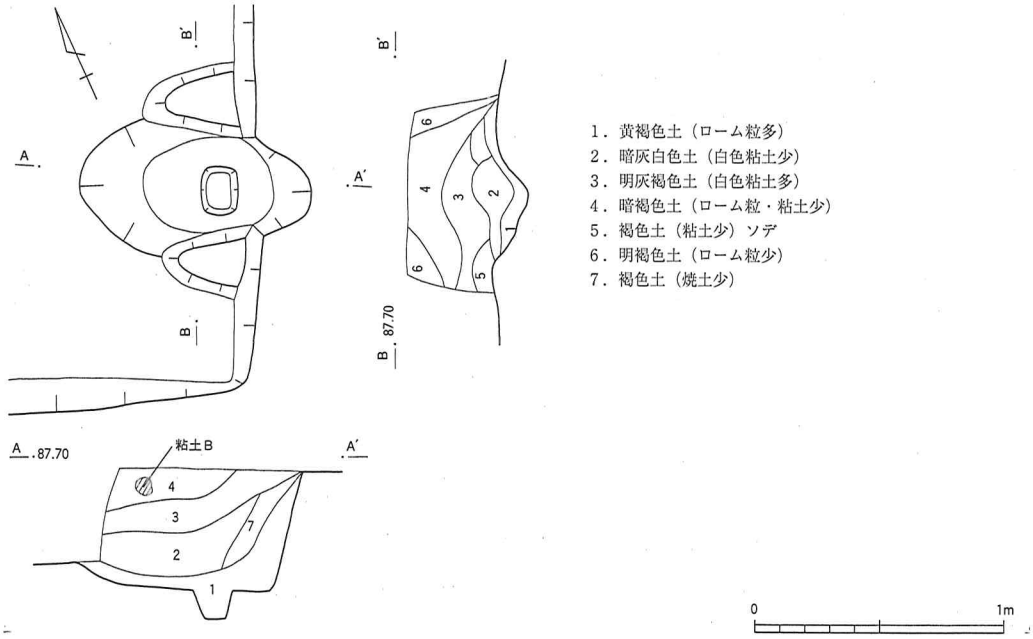
ＳＩ０２（第5，6図：図版3，4）

位置　調査区の西側（Ｂ－３－ｅグリッド）に所在、住居分布グルーピングNo.1。**平面形**　2.5×2.5mのほぼ正方形を呈し、小型である。**主軸**　N26°Ｅ　**壁**　堀り込みは約35cmと住居の規模の割りには深く、立ち上がりは約77～85°でしっかりとしている。**床面**　ローム地山床で貼床は認められない。固くしまった面はなく、床下堀り込みも認められない。**住居埋土の状況**　自然堆積。**柱穴**　無し。**周溝**　認められない。**カマド**　北壁に付属し、煙道の壁外への堀り込みは小さい。煙道の掘り方は幅広Ｕ字形。カマド主体部は住居内に突出するタイプ。主体部は床面より約13cmほど窪んでおり、焼土は少量認めるのみである。主体部中央の床面にはさらに長方形のピットがあるが、支脚用にしては規

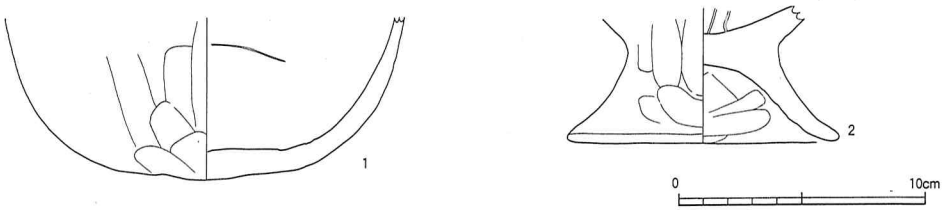
模がやや大きすぎる感がある。燃焼部床面には焼土を含まない層を貼った様な形跡があり、カマド底部を掻き出した後、補修を行った可能性がある。カマド本体を白色粘土で構築しているが、熱の影響をあまり受けた様子がない。**遺物**　土師器　台付甕１、甕１　いずれの破片も床から浮いた状態であり、自然堆積する過程で混入したものと思われる。



第５図　ＳＩ０２　平・断面図



第６図　ＳＩ０２　カマド平・断面図



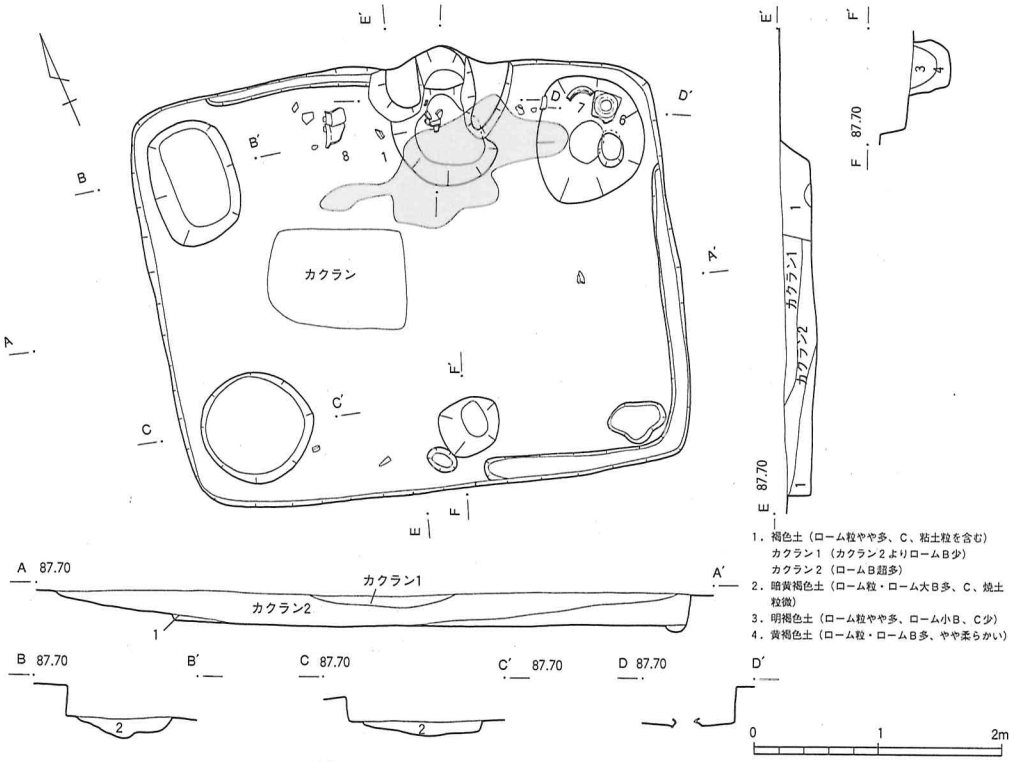
第７図　ＳＩ０２　遺物実測図

	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
1	甕(H)	底径　－	砂粒少 焼成良	暗褐色	丸底	内面は横方向ヘラナデ、外面縦方向ヘラケズリ	５％	覆土中	２次焼成 内面剥落 外面煤付着
2	台付甕(H)	底径　11.0	白色砂粒 焼成良	明褐色	脚はハの字に開く	胴部内面はヘラナデ、脚部外面は縦方向ヘラケズリ、脚部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ	15%	覆土中	２次焼成 器面剥落部分多

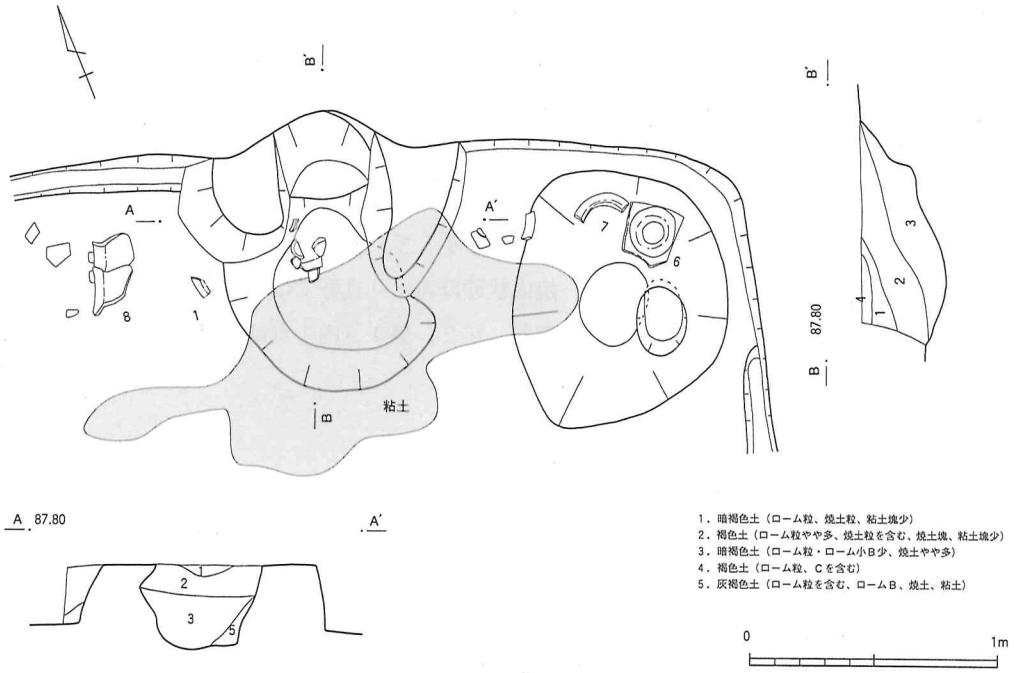
第４表　ＳＩ０２　土器観察表

ＳＩ０３（第８，９図：図版４，５）

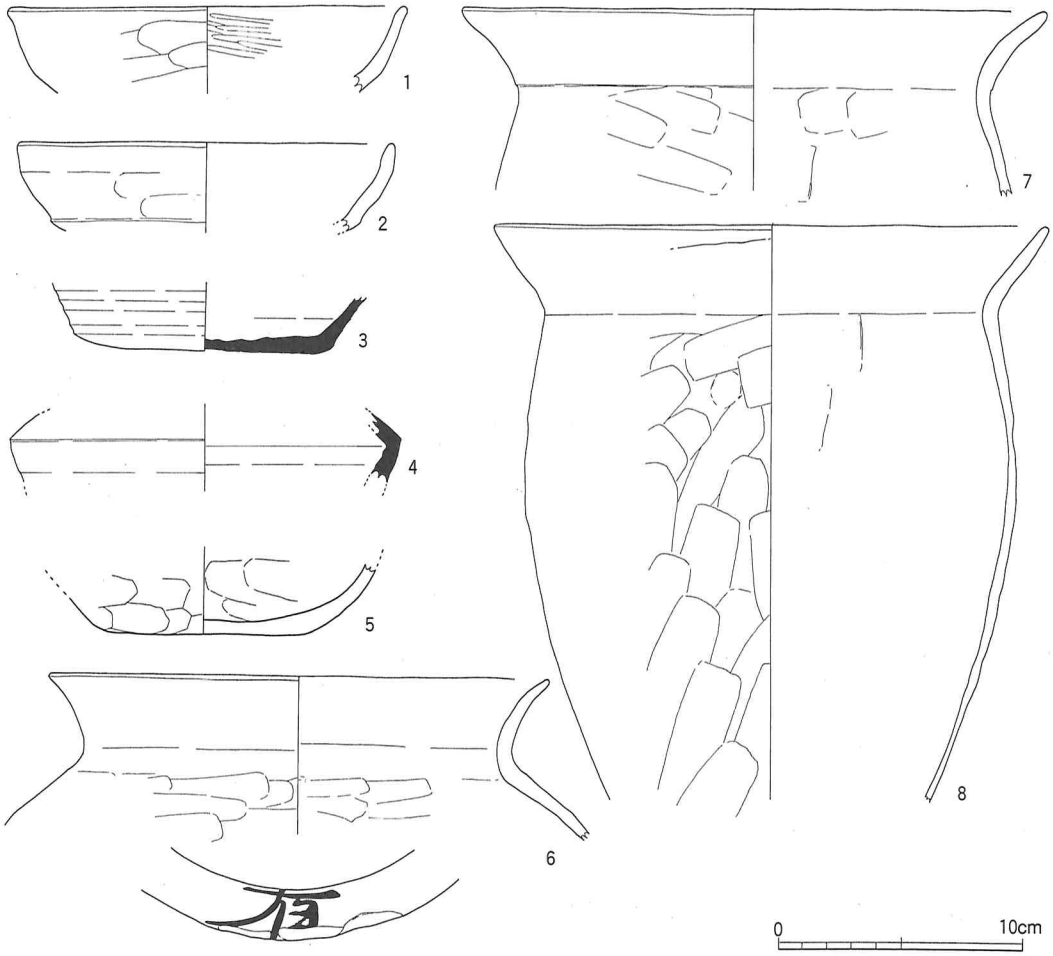
位置　調査区の西側（Ｃ－３－ｆグリッド）に所在、住居分布グルーピングNo.１。平面形　3.4 × 4.1mの横長長方形を呈する。主軸　N18°Ｅ　**壁**　堀り込みは約25cm。立ち上がりは約80～83°でしっかりとしている。**床面**　中央部はローム地山床で、硬くしまった箇所はない。四隅に床下堀り込みが認められる。床下堀り込みの埋土はＬＢ混入の人為埋没土である。なおカマド両脇の床下堀り込みの埋土には、炭化物が微量混入する。南東の床下堀り込みのみは他と比較して極めて小規模である。**住居埋土の状況**　かなり近年の攪乱（パワーショベルのバケット痕）が著しいが、残存する埋土は自然堆積を示している。**柱穴**　無し。**周溝**　東壁と南壁の東側、北壁の一部に認められる。**カマド**　北壁に付属し、煙道の壁外への堀り込みは小さい。煙道の掘り方は幅広く開いたＵ字形。カマド主体部は住居内に突出するタイプ。周溝とカマド堀り込みがソデ下に入り込むタイプ。カマド堀り込みは床面から約８cmほどであまり深くはないが、焚口下部まで広がっている。粘土と炭化物が焚口付近に広く分布し、煙道から住居内に向けて圧壊した様相を示している。煙道立ち上がり下部には支脚と思われる粘土を焼成したものが認められたが、焼成状態はあまり良好ではない。カマド底部を掻き出した後、補修を行った可能性がある。**遺物**　土師器　坏２、甕４（内１点は口縁部内側に『有』？の墨書あり）須恵器　坏１、壺１



第8図　ＳＩ０３　平・断面図



第９図　ＳＩ０３　カマド平・断面図



第10図　ＳＩ０３　遺物実測図

	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　考
1	坏(H)	口径 16.0	砂粒少 焼成良 柔らかい	淡褐色		内面は横方向ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後、外面ヘラケズリ	10%	覆土中	外面口縁部・内面漆仕上げ
2	坏(H)	口径 15.0	緻密 焼成良	淡褐色	口縁は下端に段をもって内湾気味に立ち上がる	口縁部外面ヨコナデ後ヘラナデ	10%	カマド	内面漆仕上げか
3	坏(S)	底径 10.4	緻密砂粒少 焼成良好	明灰褐色		底部ヘラ切り	30%	覆土中	
4	壺(S)		緻密 焼成良好	灰褐色	肩に稜をもつ		破片	覆土中	肩に自然釉
5	甕(H)	底径 10.4	緻密砂粒少 焼成良好	明灰褐色		内面横方向ナデ、外面全面ヘラケズリ	25%	カマド	

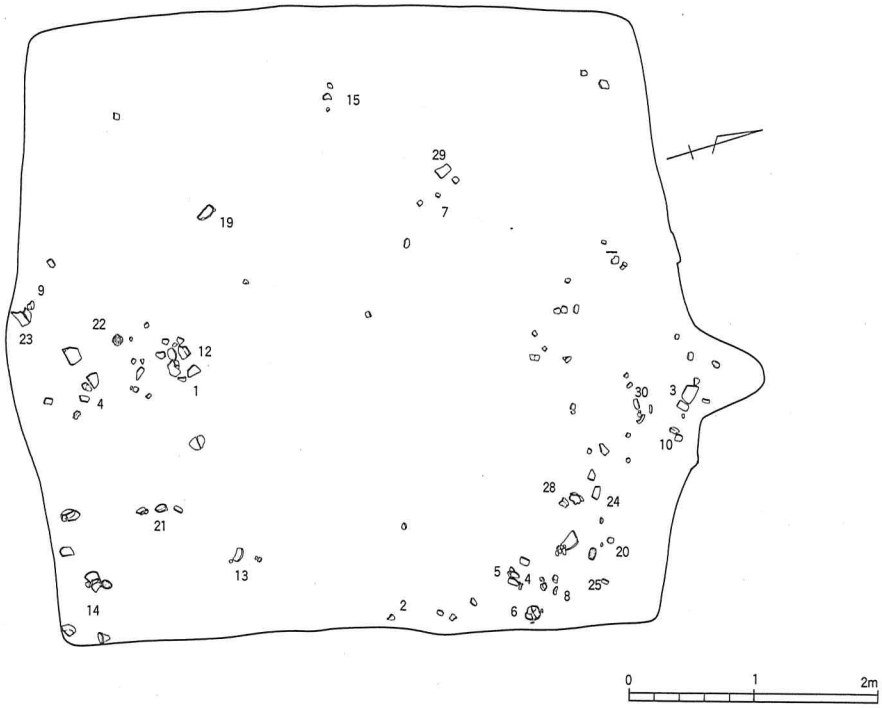
第５表　　ＳＩ０３　土器観察表（1）

	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
6	甕(H)	口径 20.1	微細砂粒混 焼成良好	褐色	器壁は薄く固い 頸部くの字 胴は強く張る	内面ヘラナデ、胴部外面横方向ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ	115%	覆土中	口縁部内面「有」墨書
7	甕(H)	口径 23.8	微細砂粒混 焼成良好	赤褐色	器壁は薄く固い 頸部くの字	内面ヘラナデ、口縁部ヘラナデ後、外面横方向ヘラケズリ	10%	覆土中	
8	甕(H)	口径 23.8	微細砂粒混 焼成良好	赤褐色	器壁は薄く固い 頸部くの字	内面ヘラナデ、胴部外面ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ	30%	覆土中	

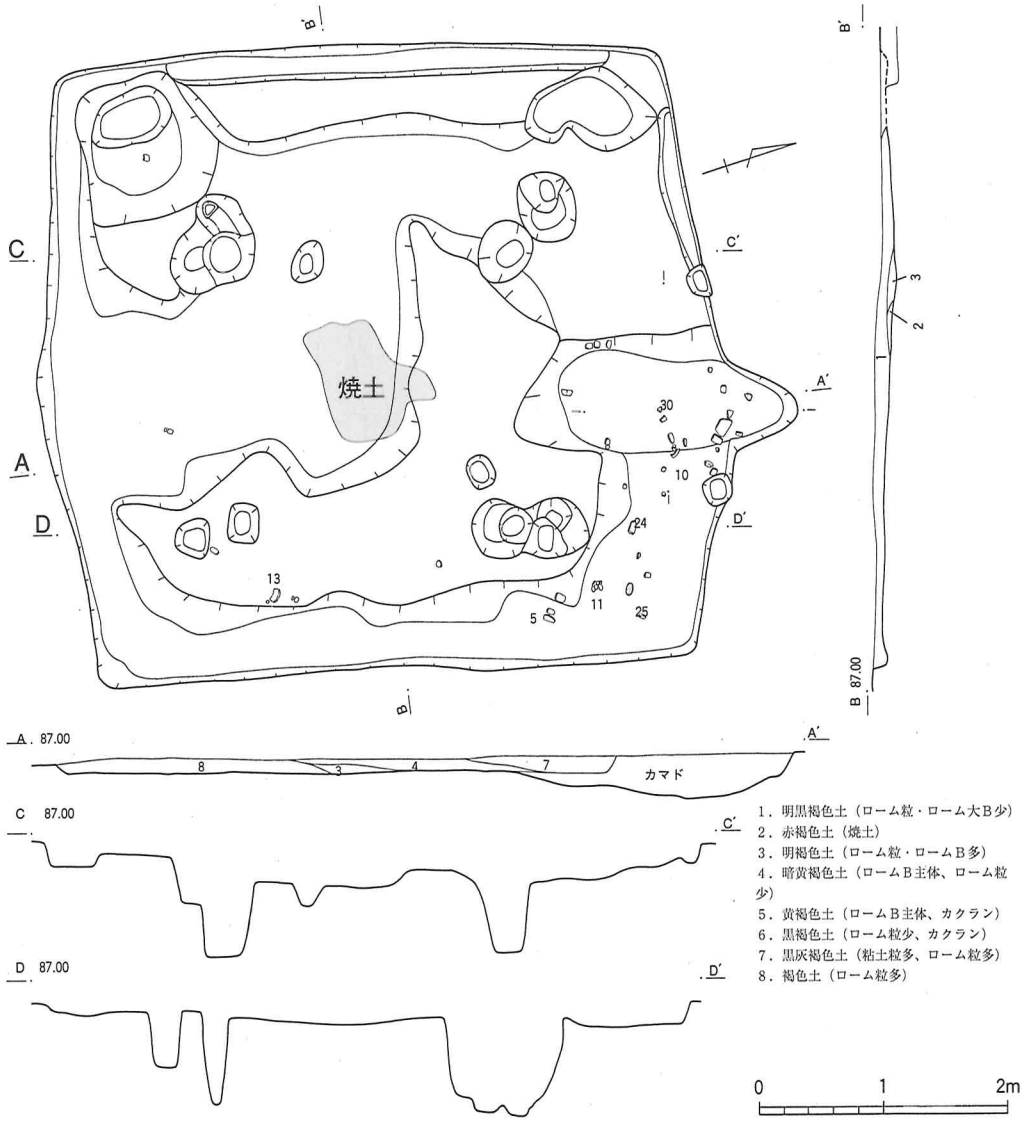
第６表　３号住居跡土器観察表（2）

ＳＩ０４（第11，12，13図：図版６，７）

位置　調査区の東側（Ｄ－３－ｃグリッド）に所在、住居分布グルーピングNo.２。**平面形**　5.3 × 5.0mのやや縦長の長方形を呈する。**主軸**　Ｎ16°Ｅ　**壁**　堀り込みは浅く約10cm。立ち上がりは約78°でやや緩やかで床から壁へ立ち上がる傾斜変換点付近にあたるため。**床面**　中央部は貼床であるが、西側及び東側にローム地山の硬く踏み固められた面がある。床下堀り込みは北西と南西コーナー部が独立した土坑状で、北東と南東コーナー部が拡張して掘られた周溝に連続してしまうタイプ。いずれの埋土もＬＢ混入の人為埋没土である。なお中央の貼床上には焼土が認められる。住居埋土の状況　一部に近年の攪乱があり埋土も薄いため、確認はできないが、埋土に大きなＬＢを含んだり、レンズ状の堆積をしていないことから、人為埋没の可能性がある。**柱穴**　２本ずつスクエアに配される

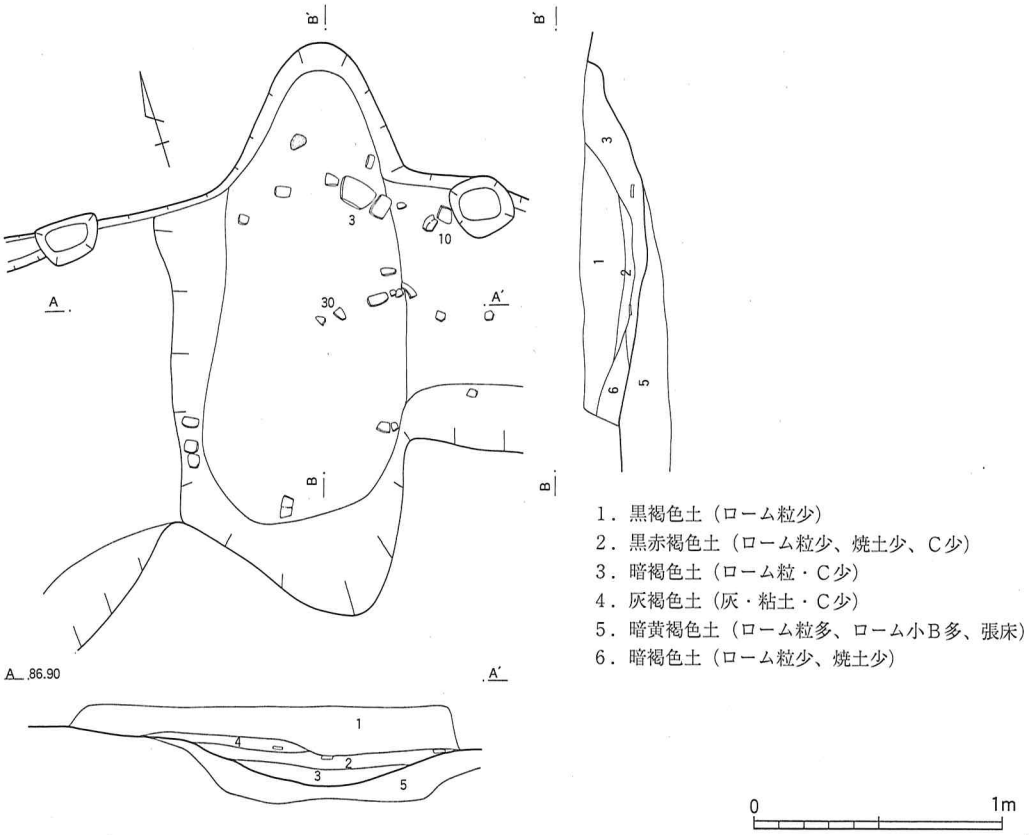


第11図　ＳＩ０４　遺物平面図



第12図　ＳＩ０４　平・断面図

ため、合計８本。最低１回の上屋の立替えが行われている。**周溝**　北壁の西側、西壁に認められる。北壁の東側と東壁、南壁は幅が広く、床下堀り込みになっている。**カマド**　北壁に付属し、煙道の壁外への堀り込みは大きい。煙道の掘り方は先細りのＵ字形。カマド主体部は住居内に突出するタイプ。ソデは確認できなかった。カマド堀り込みは大きく広がり周溝状の床下堀り込みに接続してしまう。カマド堀り込みは床面から約15cmほどである。カマド両脇の住居壁に１対の柱穴が認められる。**遺物**　カマド付近をふくめて住居内に多くの破片が分布する。土師器　坏７、甕６　須恵器　坏５、高台付坏４、蓋４、甕２、壺１　古代瓦１

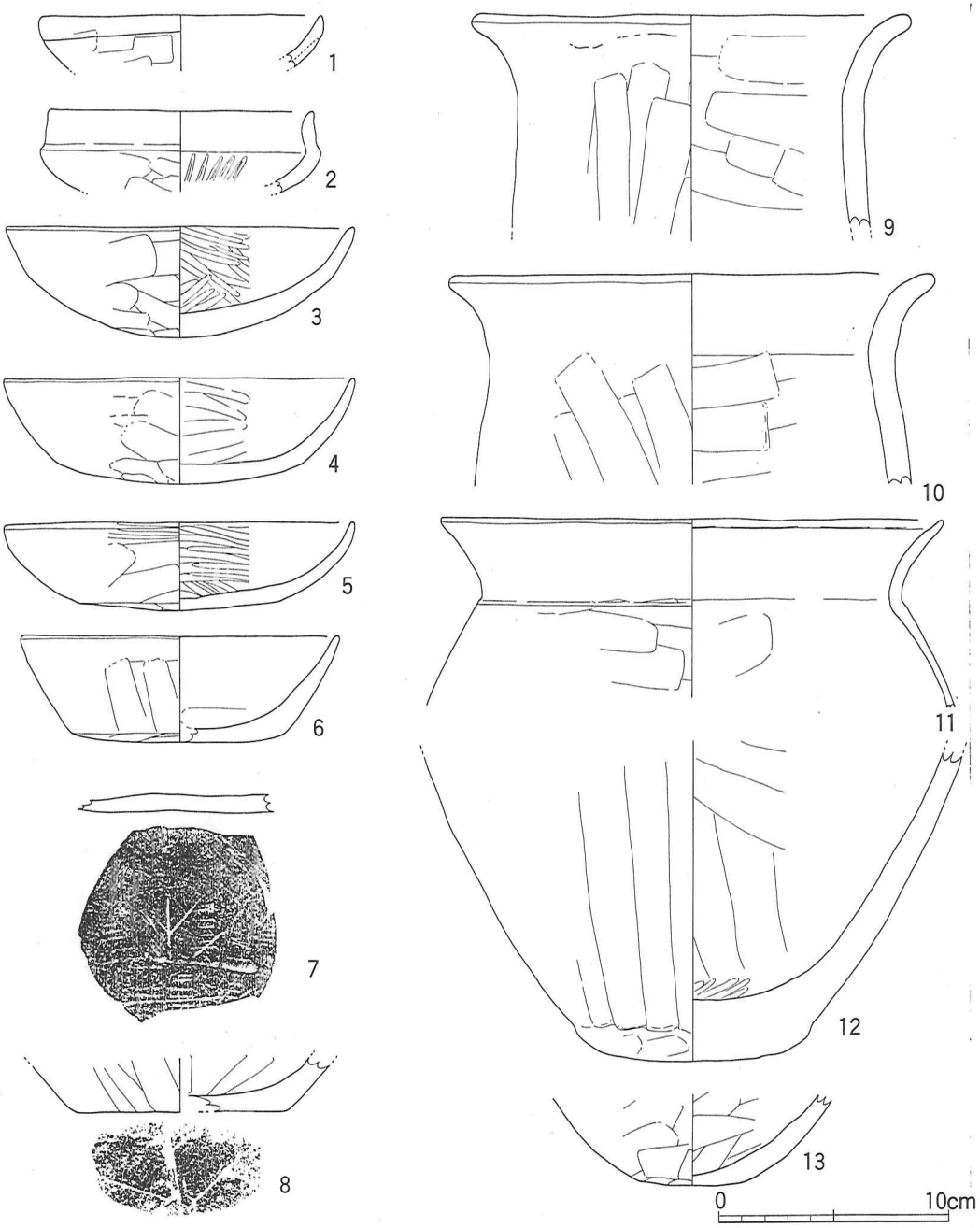


1．黒褐色土（ローム粒少）
2．黒赤褐色土（ローム粒少、焼土少、C少）
3．暗褐色土（ローム粒・C少）
4．灰褐色土（灰・粘土・C少）
5．暗黄褐色土（ローム粒多、ローム小B多、張床）
6．暗褐色土（ローム粒少、焼土少）

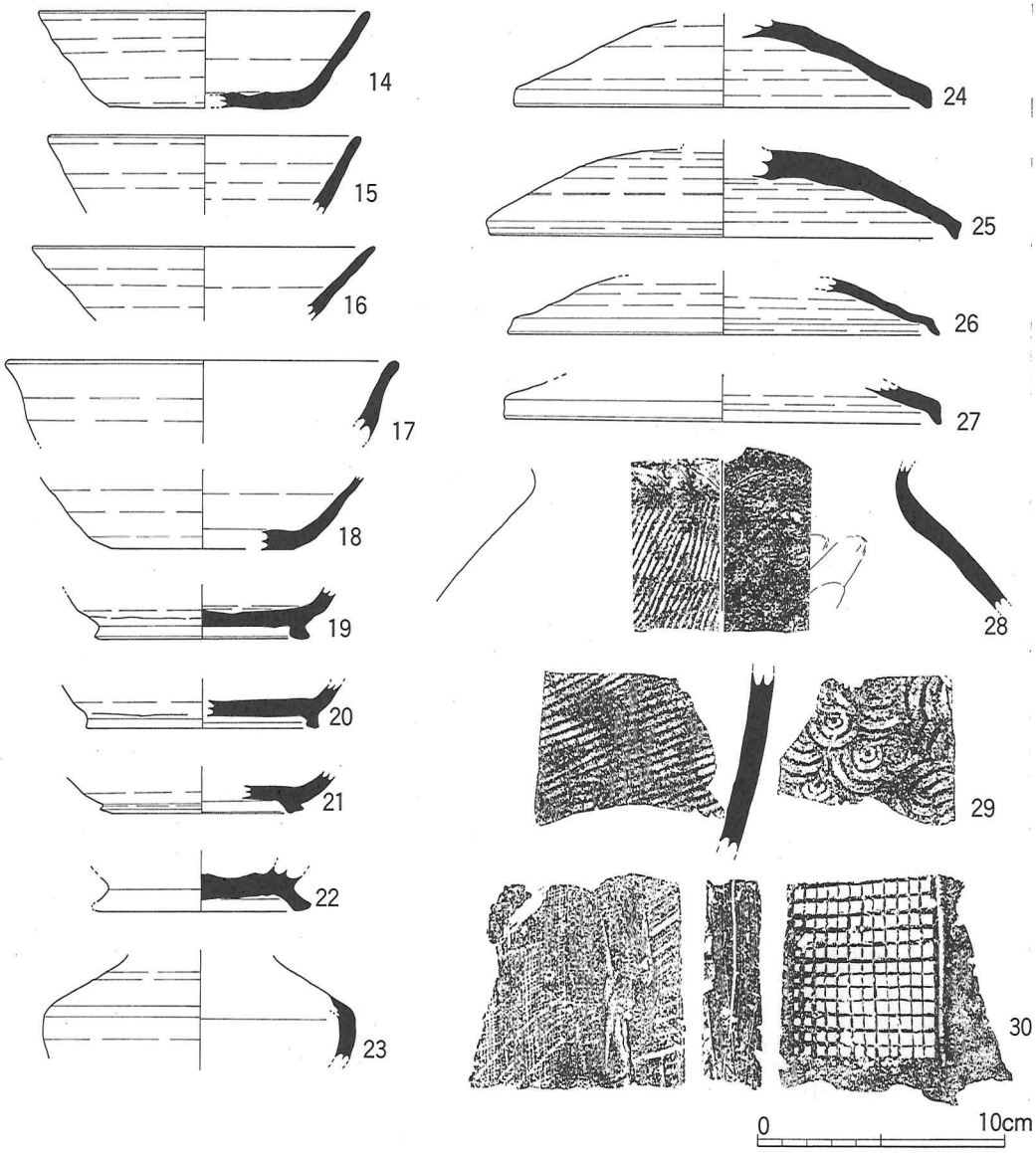
第13図　S I 0 4　カマド平・断面図

No	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
1	坏(H)	口径 12.2	赤色スコリア 緻密 焼成良好	淡褐色	内湾気味に浅く開く	内面ナデ、外面口縁部ヨコナデ後ヘラケズリ	10%	覆土中	
2	坏(H)	口径 11.4	砂粒やや多 焼成良	淡褐色	口縁は下端に段をもって僅かに内傾する	内面ヨコナデ後ヘラミガキ 外面ヘラケズリ	10%	覆土中	口縁部内外面漆仕上げ
3	坏(H)	口径 15.0 器高 4.7	砂粒やや多 石英 雲母 焼成良好	橙褐色	丸底、半球形	内面は横方向ヘラミガキ、外面全面ヘラケズリ	40%	覆土中	
4	坏(H)	口径 15.0 器高 4.5	赤色スコリア 焼成良好	橙褐色	平底気味	内面ヘラナデ、外面ナデ、底面ヘラケズリ	40%	覆土中	
5	坏(H)	口径 15.0 器高 3.8	赤色スコリア やや多 焼成良好	橙褐色	平底気味	内面は横方向ヘラミガキ、外面全面ヘラケズリ	25%	覆土中	内外面口縁部漆仕上げ
6	坏(H)	口径 13.8 器高 4.6 底径 9.2	微細砂粒混 雲母 焼成良好	淡褐色		内外面ナデ、底部外面ヘラケズリ	60%	覆土中	
7	坏(H)	－	緻密　雲母	褐色		内面ミガキ、外面木葉底を円を描くようにヘラケズリ	30%	覆土中	

第7表　S I 0 4　土器観察表（1）



第14図　ＳＩ０４　遺物実測図（1）



第15図　ＳＩ０４　遺物実測図（２）

No	器種	法量（cm）	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
8	甕(H)	底径 9.4	白色砂粒多 焼成良	褐色		内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ、木葉底	破片	覆土中	
9	甕(H)	口径 19.0	砂粒やや多 赤色スコリア 焼成良	褐色	ほぼ真っ直ぐに立ち上がってきた胴部から口縁が外反	内面ヘラナデ、外面口縁部ヨコナデ後縦方向ヘラケズリ	破片	覆土中	
10	甕(H)	口径 21.0	砂粒やや多 赤色スコリア 焼成良	褐色	ほぼ真っ直ぐに立ち上がってきた胴部から口縁が外反	内面は横方向ヘラナデ、外面口縁部ヨコナデ後ヘラケズリ	10%	覆土中	

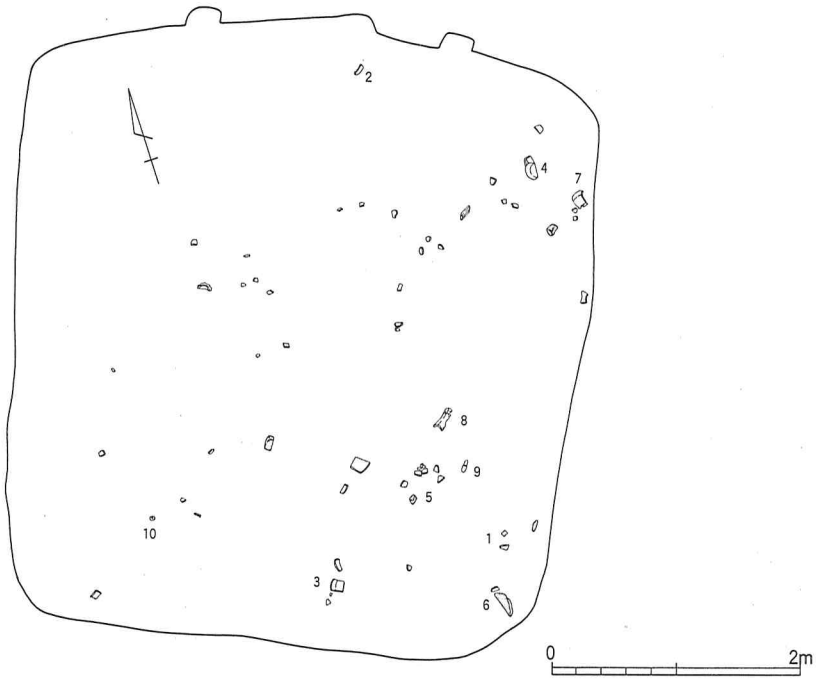
第８表　　ＳＩ０４　土器観察表（2）

No	器種	法量 (cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
11	甕(H)	口径 21.7	微細砂粒混 焼成良好	赤褐色	口縁部はくの字に外反	内面ヘラナデ、外面胴部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後口唇部さらにヨコナデ	破片	覆土中	外面に粘土付着
12	甕(H)	底径 10.2	砂粒多 焼成良	褐色	底部は丸底気味の平底	内面はヘラナデ、外面底部ヘラケズリ後、胴部縦方向ヘラケズリ	10%	覆土中	２次焼成 外面煤付着
13	甕(H)	底径 4.2	微細砂粒混 焼成良好	褐色	底部がごく小さい 器壁が薄く固い	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	10%	覆土中	外面粘土付着
14	坏(S)	口径 13.3 器高 4.0 底径 7.8	砂粒少 焼成良	淡灰褐色	口縁部は直線的	ろくろ右まわり、底部ヘラ切り	40%	覆土中	内面黒色付着物
15	坏(S)	口径 12.6	砂粒やや多 焼成良	淡灰褐色	口縁部は直線的		破片	覆土中	
16	坏(S)	口径 13.8	砂粒やや多 焼成良	灰褐色	口縁部は直線的		破片	覆土中	
17	坏(S)	口径 13.8	砂粒やや多 焼成良	灰褐色	口縁部は僅かに外反		破片	覆土中	
18	坏(S)	底径 7.4	白色粒混 焼成良	灰褐色		底面回転ヘラケズリ	10%	覆土中	
19	高台付坏(S)	底径 8.6	白色粒混 焼成良好	淡灰褐色		底面回転ヘラケズリ後、高台貼りつけ	15%	覆土中	
20	高台付坏(S)	底径 9.4	白色粒混 焼成良好	淡灰褐色		底面回転ヘラケズリ後、高台貼りつけ	15%	覆土中	
21	高台付坏(S)	底径 9.4	緻密 白色粒混 焼成良好	灰色	高台部は外へ傾く	底面回転ヘラケズリ後、高台貼りつけ	10%	覆土中	
22	壺(S)	底径 8.8	白色砂粒多 焼成良好	暗灰色	高台部は外へ傾く	底面回転ヘラケズリ後、高台貼りつけ	10%	覆土中	
23	壺(S)	―	白色粒混 焼成普通	灰褐色	肩に稜を持つ		破片	覆土中	
24	蓋(S)	口径 17.0	白色粒混 焼成良	灰色	口縁部は殆どつまんでない	成形後、天井部外面中央から1/2を回転ヘラケズリ	15%	覆土中	
25	蓋(S)	口径 19.4	白色粒混 焼成良	淡灰色		成形後、天井部外面中央から1/2を回転ヘラケズリ	25%	覆土中	
26	蓋(S)	口径 17.6	白色粒微 焼成良好	灰褐色	口縁部は外へ開くようにつまみだす		10%	カマド	
27	蓋(S)	口径 17.8	砂粒多 焼成良好	淡灰色		内面指押さえ指ナデ、外面平行タタキ	5%	カマド	
28	甕(S)	―	白色粒混 焼成良好	灰色		内面同心円タタキ、外面平行タタキ	破片	覆土中	
29	甕(S)	―	白色粒混 焼成良好	暗灰色		凹面布目一部ヘラケズリ、凸面格子目スタンプ	破片	覆土中	
30	瓦			褐色					

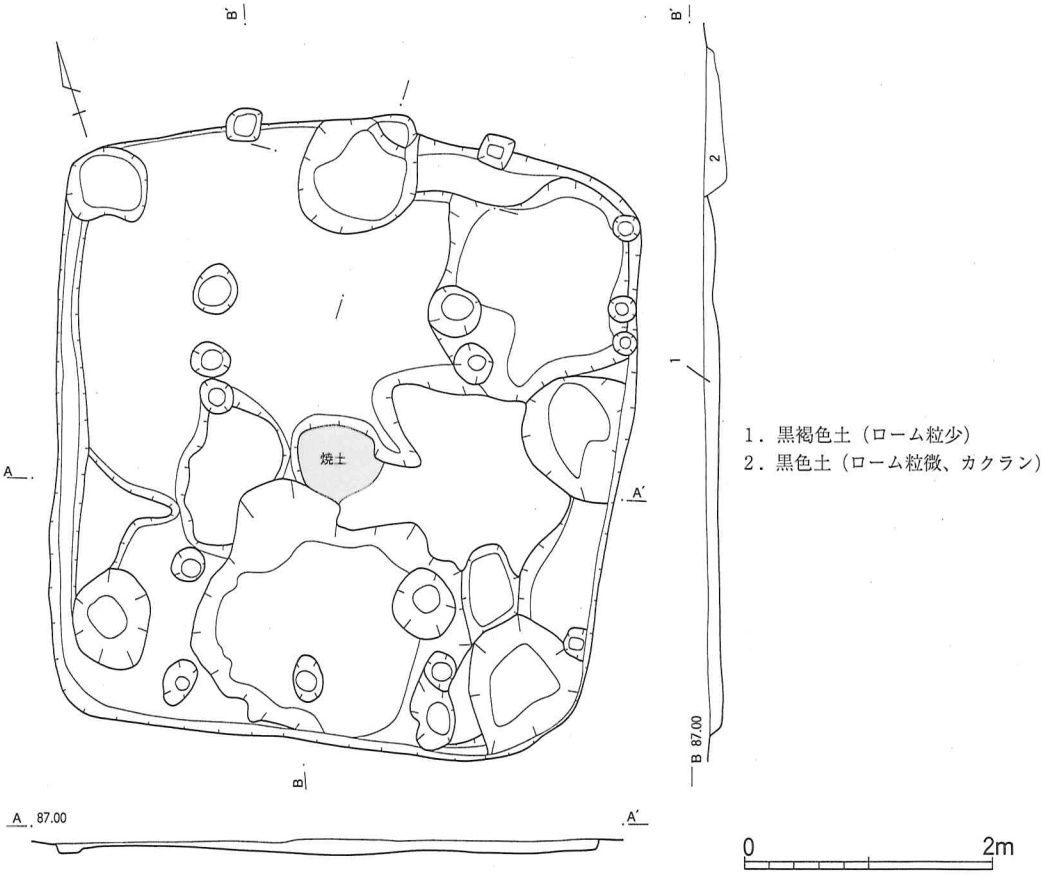
第９表　ＳＩ０４　土器観察表（3）

ＳＩ０５（第16，17，18図：図版８，９　）

位置　調査区の東側（Ｄ－３－ｄグリッド）に所在、住居分布グルーピングNo.２。**平面形**　4.6 × 5.0mのやや縦長の長方形を呈する。主軸　N21°Ｅ　**壁**　堀り込みは浅く約10cm。壁角度は床から壁へ立ち上がる傾斜変換点付近にあたるため計測不能。**床面**　ほぼ全面貼床であるが、一部にローム地山の硬く踏み固められた面がある。住居掘り方は複雑になされているが、基本的には四隅に床下堀り込みが存在する。北西と南西コーナー部は小規模な独立土坑状を呈するが、北東と南東コーナー部は拡張して掘られた周溝に連続してしまうタイプ。いずれの埋土もＬＢ混入の人為埋没土である。なお中央のローム地山の硬面上に焼土が認められる。なお３ヶ所にかなり近年の攪乱（パワーショベルのバケット痕）がみられる。**住居埋土の状況**　一部に近年の攪乱があり埋土も薄いが、均一の淘汰された土質であるため、自然埋没であるとみられる。**柱穴**　４本スクエアに配されているが、それぞれ南北軸の柱穴を通るように、北壁から南壁にかけて柱穴列が認められる。**周溝**　西壁に認められる。北壁の東側と東壁は幅が広く、床下堀り込みになっている。**カマド**　北壁に付属し、煙道の壁外への堀り込みは極めて小さい。煙道の掘り方は小さいＵ字形で階段状に段を有する。カマド主体部はほとんど住居内に突出する。ソデは確認できなかった。カマド堀り込みは住居の規模に対して小さく周溝状の床下堀り込みに接続してしまう。**遺物**　全て破片であるが埋土が薄いため床直上である。土師器甕２、台付甕１、須恵器　坏５、10は紡錘車である。

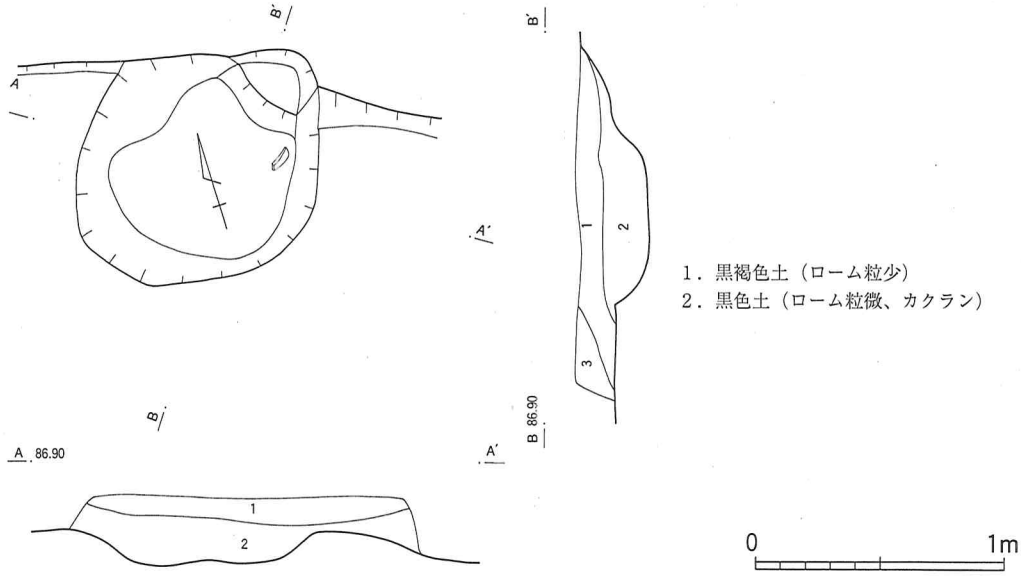


第16図　ＳＩ０５　遺物平面図



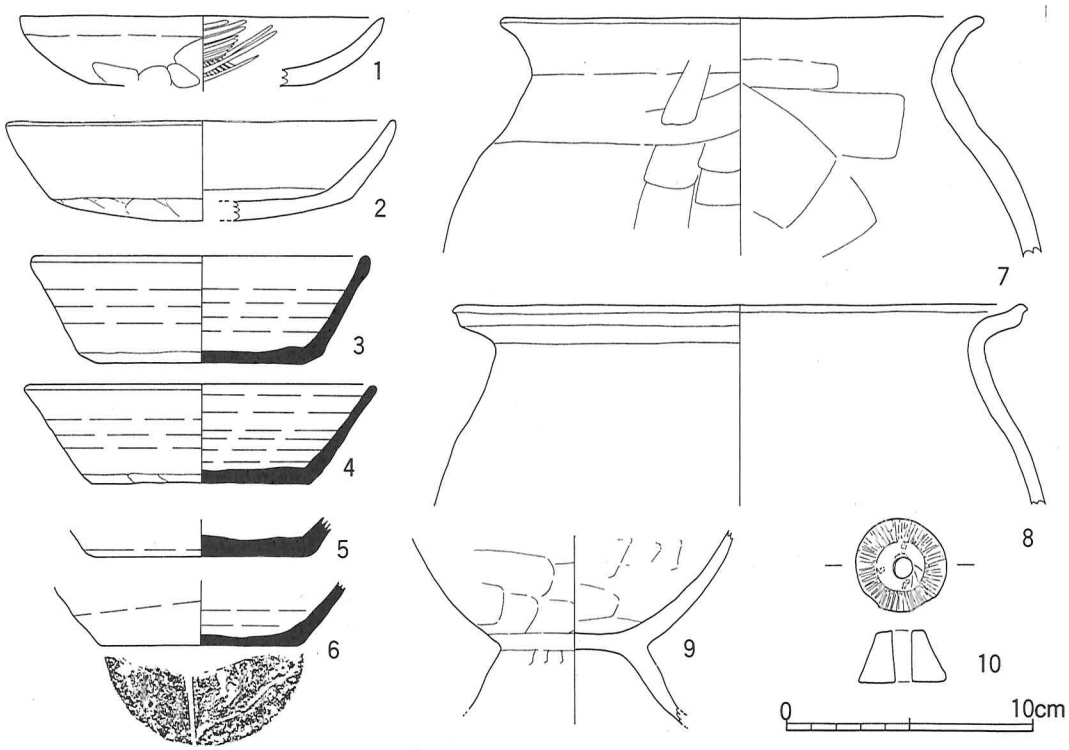
1．黒褐色土（ローム粒少）
2．黒色土（ローム粒微、カクラン）

第17図　ＳＩ０５　平・断面図



1．黒褐色土（ローム粒少）
2．黒色土（ローム粒微、カクラン）

第18図　ＳＩ０５　カマド平・断面図



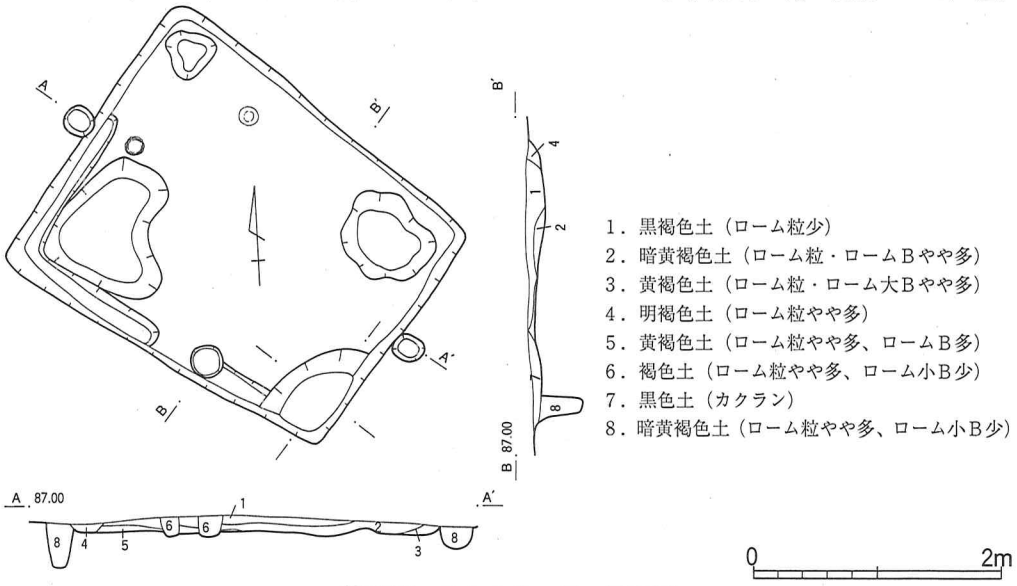
第19図　ＳＩ０５　遺物実測図

No	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　考
1	坏(H)	口径 13.3	砂粒少 焼成良好	明褐色	口縁部は下端に稜をもつ	内面ヘラミガキ、外面ヨコナデ後、稜以下をヘラケズリ	15%	覆土中	
2	坏(H)	口径 15.6	砂粒混 焼成良	灰褐色	体部外面に稜をもち、口縁部は内湾気味に立ち上がる	内面、口縁部外面ヨコナデ稜以下ヘラケズリ	40%	覆土中	
3	坏(S)	器高 13.6 口径 4.2 器高 8.2	白色粒 雲母 焼成良好	明灰褐色	口縁部は外側が肥厚	底部回転ヘラケズリ、底部下端は面取り状に回転ヘラケズリ、ろくろ右まわり	50%	覆土中	
4	坏(S)	底径 13.7 口径 4.0 器高 8.3	砂粒やや多 白色粒 焼成良好	暗灰褐色	頸部くの字	底部手持ちヘラケズリ、体部下端7mm程度ヘラケズリ、ろくろ右まわり	95%	覆土中	
5	坏(S)	底径 8.8	白色粒混 焼成良好	淡灰色	頸部は強くくびれ口唇部はつまみだされる	底部、底部下端ヘラナデ	20%	覆土中	
6	坏(S)	底径 9.0	白色粒混 焼成不良	灰褐色		底部手持ちヘラケズリ	25%	覆土中	底部ヘラ描き
7	甕(H)	底径 8.0	砂粒、石英 焼成良好	褐色		内面横方向ヘラナデ、外面縦方向ヘラケズリ	10%	覆土中	2次焼成
8	甕(H)	口径 19.6 口径 23.1	微細砂粒やや多、雲母 焼成良好	赤褐色 赤褐色		内面横方向ヘラナデ、外面ヘラナデ	10%	覆土中	
9	台坏甕(H)	―	微細砂粒やや多 焼成良好			内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ、台部接着部ヨコナデ台部ヨコナデ	10%	覆土中	

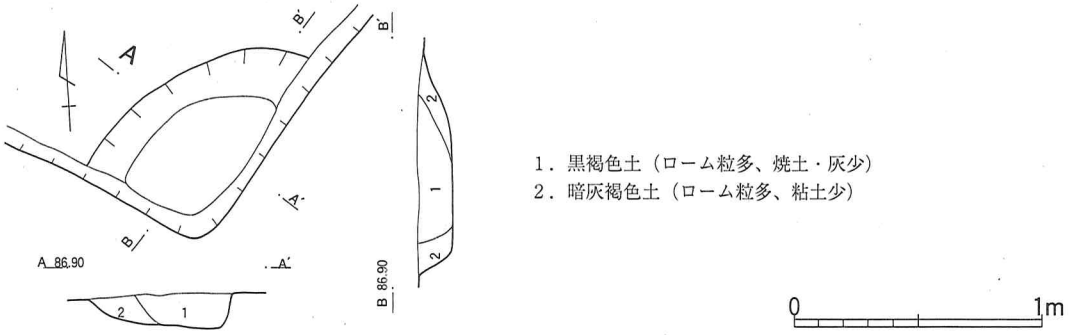
第10表　ＳＩ０５　土器観察表

ＳＩ０６（第20，21図：図版９，10）

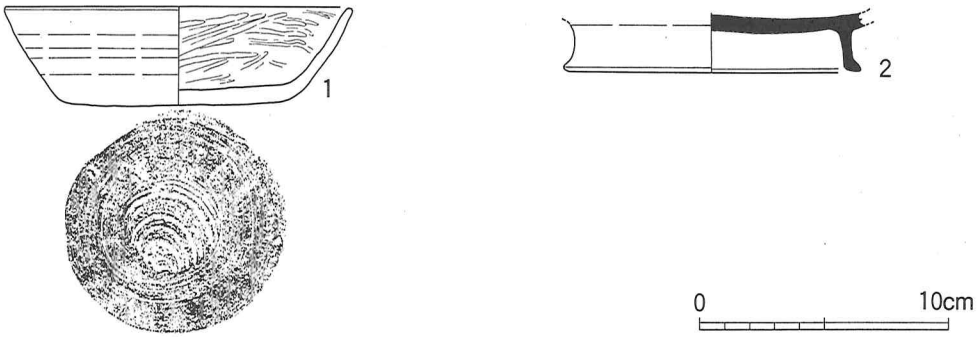
位置　調査区の東側（Ｄ－３－ｈグリッド）に所在、住居分布グルーピングNo.２。平面形　2.4 × 3.0mの横長の長方形を呈する（壁柱穴を含まず）。**主軸**　N36°Ｅ　**壁**　堀り込みは浅く約６～８㎝。壁角度は床から壁へ立ち上がる傾斜変換点付近にあたるため計測不能。**床面**　四隅の床下堀り込みは南東コーナー部以外の３ヶ所にみられる。基本的にはローム地山床であるが、床面は平坦ではない。**住居埋土の状況**　埋土が極めて浅いが、自然埋没であるとみられる。**柱穴**　住居内には無く、東西壁中央に１対認められる。おそらく壁柱穴による棟持柱構造と思われる。南壁中央床面に出入口施設の柱穴と思われるものが１本認められる。**周溝**　西壁に南側から南壁の中央にかけての南西コーナー付近と、南壁中央部の柱穴から南東コーナー部カマドにかけてのみ認められる。**カマド**　南東コーナー部に付属し、煙道の壁外への堀り方は住居コーナーと共有するような構造で特に認められない。規模は住居に相応するように小さなもので、カマド堀り込み南壁の周溝に接続する。**遺物**　土師器　坏１、須恵器　坏１（転用硯）いずれも床直上で正位置で出土している。転用硯は硯の機能での正位置。



第20図　ＳＩ０６　平・断面図



第21図　ＳＩ０６　カマド平・断面図



第22図　ＳＩ０６　遺物実測図

No	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
1	坏(H)	口径 14.0	砂粒少 焼成良好	赤褐色		ろくろ土師器、内面ヘラミガキ、底部回転糸切り後、中央を残し回転ヘラケズリ ろくろ右まわり	完形	覆土中	
2	高台付坏(S)	底径 12.0	砂粒混 焼成良好	灰色	台は高い		25%	覆土中	転用硯 坏部は打ち欠く

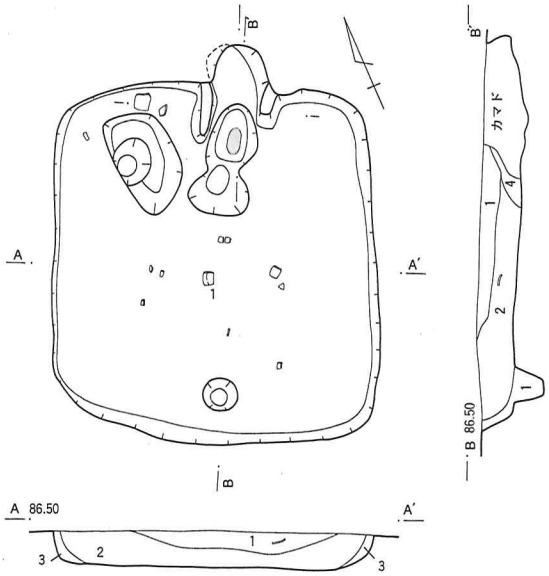
第11表　ＳＩ０６　土器観察表

ＳＩ０７（第23，24，25図：図版11）

位置　調査区の南東側（Ｄ－４－ｊグリッド）に所在、住居分布グルーピングNo.３。**平面形**　2.8×2.5mのやや縦長の長方形を呈する。**主軸**　N23°Ｅ　**壁**　堀り込みは規模の割りに深く、28cm、壁角度は73～75°でしっかりとしている。**床面**　ローム地山床で硬い面は無い。北東コーナー部に床下堀り込みがみられる。**柱穴**　主柱穴無し。南壁中央床面に出入口施設の柱穴と思われるものが１本認められる。**周溝**　認められない。**カマド**　北壁に付属し、煙道の壁外への堀り込みは規模の割りには極めて大きい。煙道の掘り方は幅広Ｕ字形で煙道西側はオーバーハングする。主体部はほとんど住居内に突出し、ソデにはローム地山掘り残しで工作されている。カマド堀り込みは瓠形でほとんどが主体部から住居内へ出る。燃焼部中央と思われる瓠形北側の床面は被熱による影響で赤化、硬化がみられる。瓠形南側は多少の炭化物、灰が混入するも、貼床状の埋土であり、おそらく灰を掻き出した後、床面を補修したものと思われる。**遺物**　全て破片であり、ほとんどが自然埋土に混入したものと思われる。土師器　坏１、鉢１

No	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
1	坏(H)	口径 11.6	砂粒少 焼成良好	淡褐色	口縁は下端に段をもち、内湾気味に立ち上がる	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	30%	覆土中	内面、外面一部漆仕上げ
2	鉢(H)	口径 21.4 器高　8.5	砂粒やや多 焼成良好	赤褐色	丸底、内湾気味に立ち上がる	内面横方向ナデ、外面横方向ヘラケズリ	35%	覆土中	

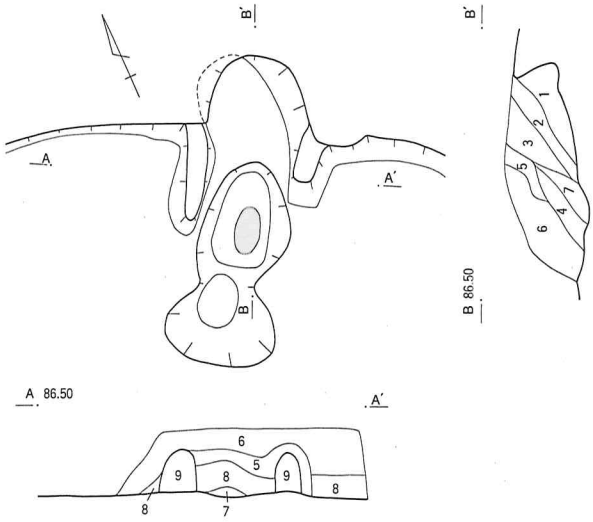
第12表　ＳＩ０７　土器観察表



1．明褐色土（ローム粒やや多）
2．褐色土（ローム粒少）
3．暗黄褐色土（ローム粒・ローム小Ｂやや多）
4．灰褐色土（灰・粘土やや多、ローム粒少）
アミカケは焼土

0　2m

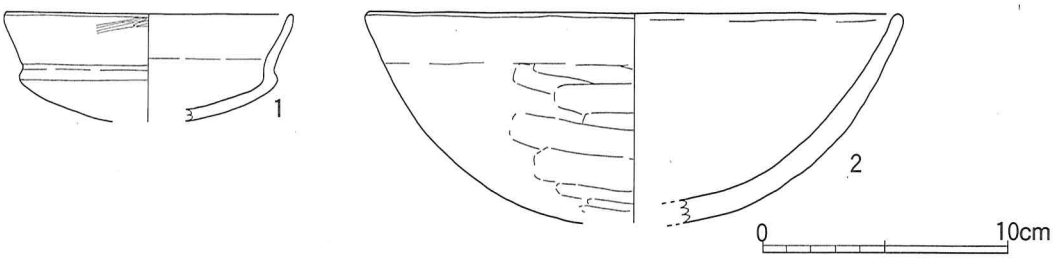
第23図　ＳＩ０７　平・断面図



1．黄褐色土（ローム粒多・ロームＢ多）
2．明褐色土（ローム粒多）
3．黒褐色土（ローム粒少）
4．褐色土（ローム粒・焼土・焼粘土少）
5．黒色土（黒色粘土主体）
6．灰褐色土（粘土混入、ローム粒少、粘土粒少）
7．褐色土（粘土多）
8．黄褐色土（ローム粒・ロームＢ多）
9．粘土によるソデ
アミカケは焼土

0　1m

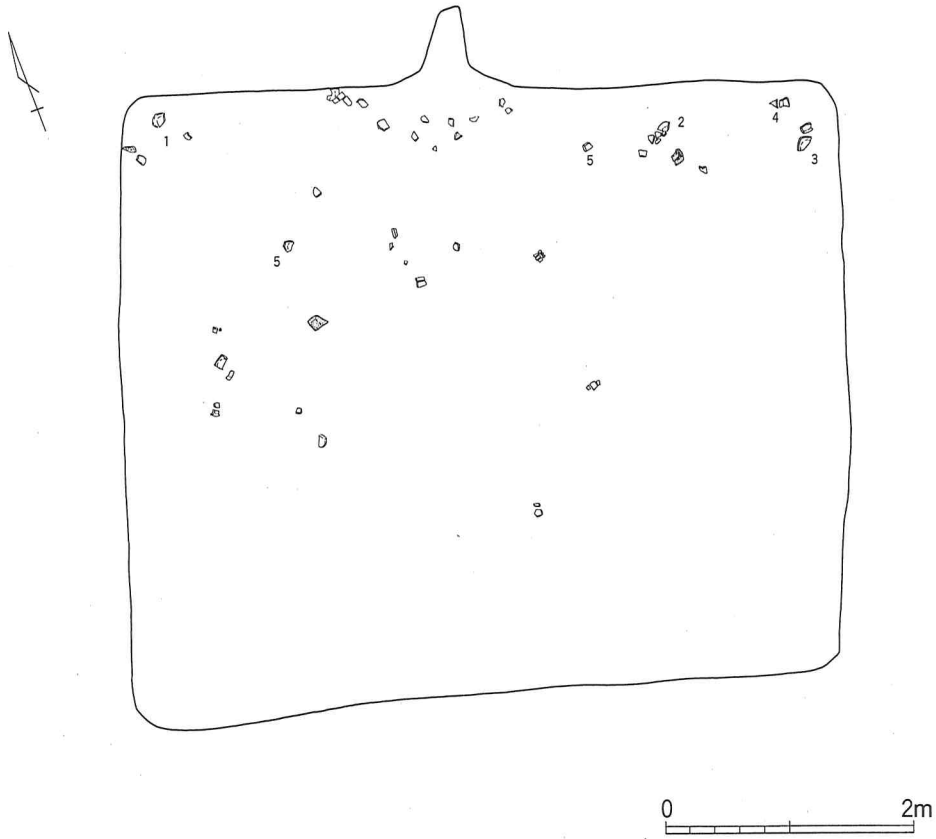
第24図　ＳＩ０７　カマド平・断面図



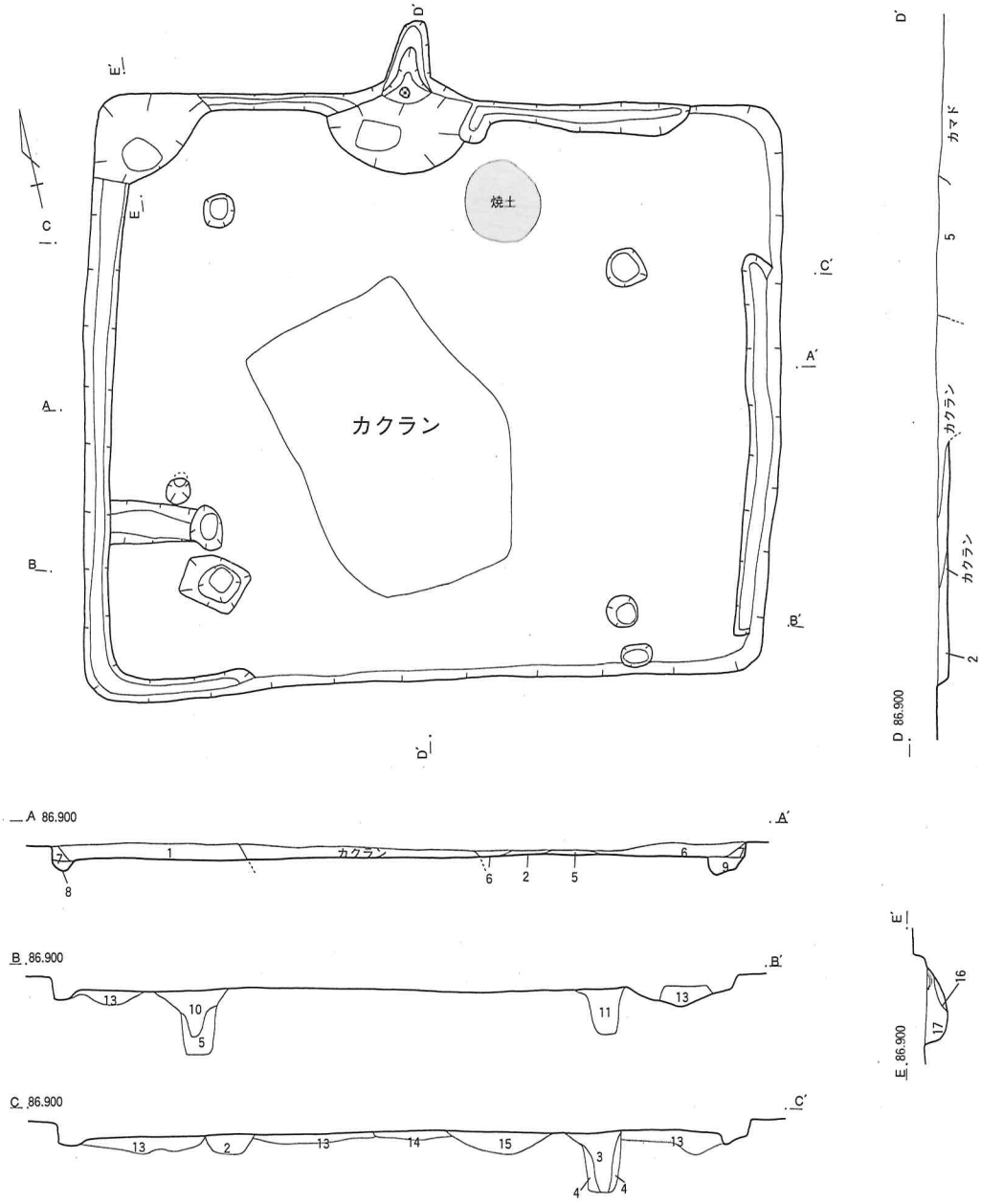
第25図　ＳＩ０７　遺物実測図

ＳＩ０８（第26，27，28図：図版11，12，13）

位置　調査区の南側（Ｄ－４－ｑグリッド）に所在、住居分布グルーピングNo.３。**平面形**　4.9 × 5.8mの横長の長方形を呈する。**主軸**　N17°Ｅ　**壁**　堀り込みは浅く約８～13cm。壁角度は浅く計測不能。**床面**　ローム地山床で硬い面は無い。北西と南西コーナー部に床下堀り込みがみられる。東壁は約１ｍ幅で溝状の床下堀り込みがみられる。カマド前に焼土が分布する。なお床中央部に大きな近年の攪乱（パワーショベルのバケット痕）がある。**柱穴**　主柱穴４本。南西柱穴は２本認められることから、柱の建て替えが行われた可能性がある。なおこの柱穴と西側周溝との間に間仕切り状の溝が認められた。**周溝**　南壁は攪乱の影響で、確認できないが、カマドを除いて全周する。なお周溝は四隅の床下堀り込みが埋設されてから、その上に構築されている。**カマド**　北壁に付属し、煙道の壁外への堀り込みは細長く大きく突出する。煙道の掘り方は細長い長方形で階段状に２段になっている。主体部のほとんどは住居内に突出し、ソデはみとめられない。しかしカマド堀り込み内に左側と思われる粘土ソデが埋没していたことから、カマドの作り替えが行われたと推測できる。**遺物**　全て破片である。土師器　坏１、甕１

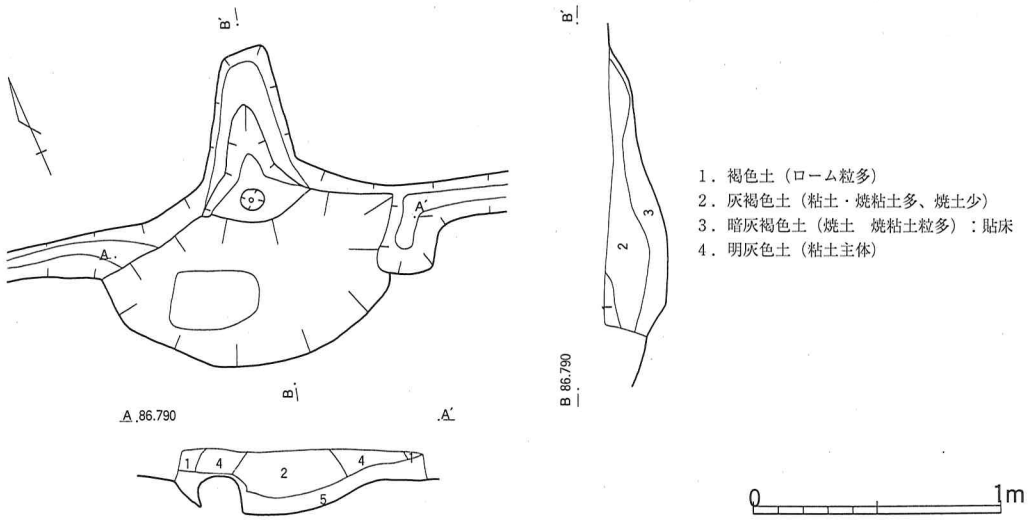


第26図　ＳＩ０８　出土遺物平面図

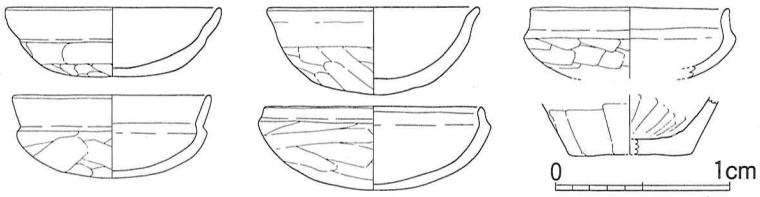


1．明褐色土（ローム粒少）
2．褐色土（ローム粒少）
3．２とほぼ同じ
4．２とほぼ同じ
5．黄褐色土（ローム粒・ロームＢ多）
6．５よりロームＢが少ない
7．明褐色土（ローム粒やや多、ローム小Ｂ多）
8．黄褐色土（ローム粒・ロームＢ多）
9．灰褐色土（粘土粒、Ｃ、焼土やや含む）
10．黒褐色土（粘土粒少、やわらかい）
11．褐色土（ローム粒やや多）
12．暗黄褐色土（ローム粒・ローム小Ｂ多）
13．灰褐色土（粘土粒、焼土粒、ローム粒含む）
14．黄褐色土（ロームＢ主体）：貼床
15．明黄褐色土（ロームＢ主体）：カクラン
16．黒色土（ローム粒少）：カクラン
17．黒褐色土（ローム粒・Ｂ多）：貼床

第27図　ＳＩ０８　平・断面図



第28図　ＳＩ０８　カマド平・断面図



第29図　ＳＩ０８遺物実測図

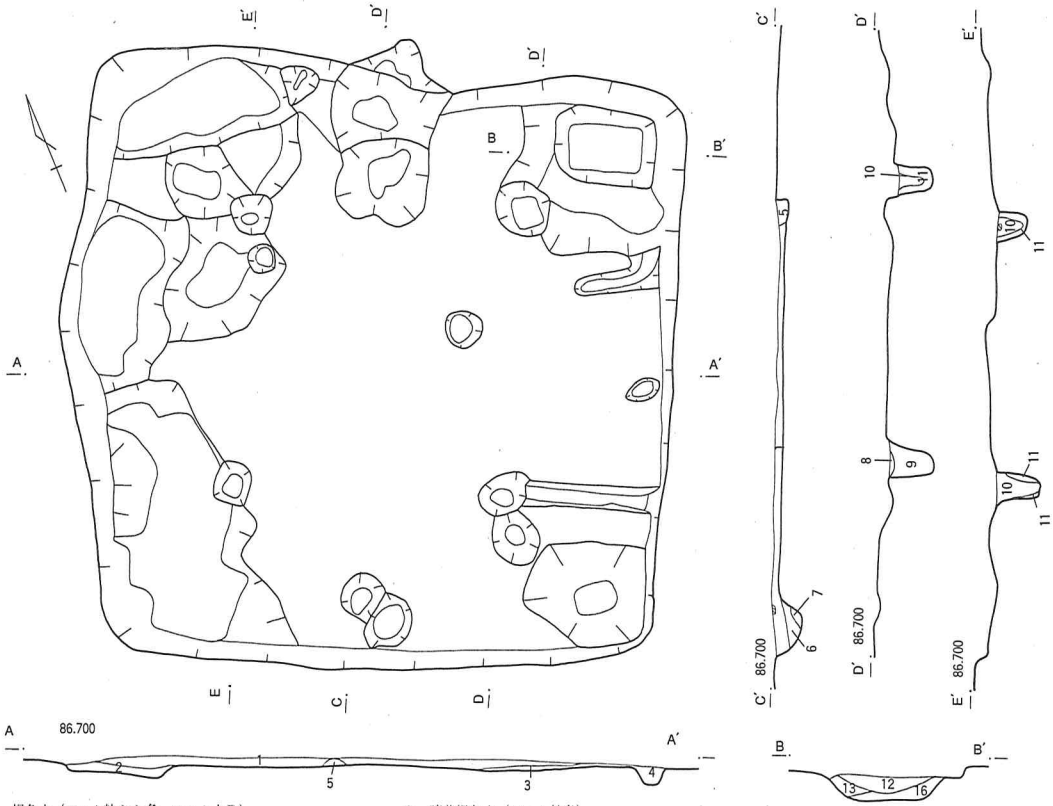
No	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
1	坏(H)	口径 12.4 器高　3.9	砂粒少 焼成良好	暗褐色	口縁部は下端に段をもち内湾気味に立ち上がる	内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後体部上方をヘラケズリ	50%	覆土中	
2	坏(H)	口径 12.2 器高　5.0	砂粒やや多 焼成良好	暗褐色	丸底で内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する	内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	45%	覆土中	
3	坏(H)	口径 12.4 器高　4.8	砂粒やや多 焼成良好	褐色	口縁部は下端に段をもち短く内傾する	内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	95%	覆土中	口縁部・内面漆仕上げ 外面剥落
4	坏(H)	口径　－	やや密 焼成良好	淡褐色	口縁部は下端に段をもち内湾気味に立ち上がる	内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ	40%	覆土中	口縁部・内面漆仕上げ
5	坏(H)	口径　－ 器高　－	砂粒少 焼成良好	褐色	口縁部は下端に段をもちほぼ直立する	内面ヘラナデ、口縁部ヨコナデ外面ヘラケズリ	15%	覆土中	口縁部・内面漆仕上げ
6	甕(H)	底径　7.0	砂粒やや多 雲母 焼成良好	赤褐色		内面ヘラナデで、ヘラが斜めに食い込む跡が連続して残る、外面ヘラケズリ	破片	覆土中	

第13表　ＳＩ０８　土器観察表

SI０９（第29，30，31図：図版14，15）

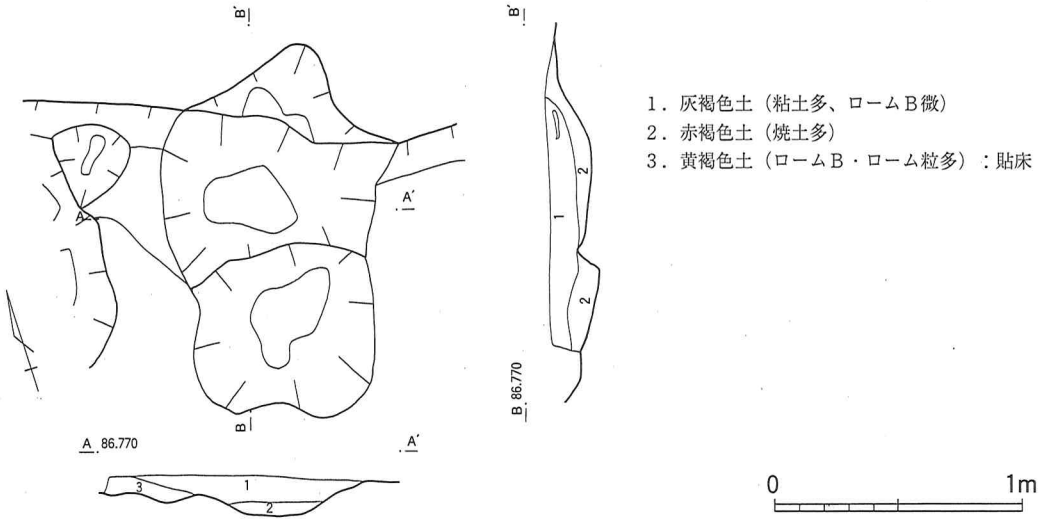
位置　調査区の南東隅（Ｅ－４－ｕグリッド）に所在、住居分布グルーピングNo.３。**平面形**　4.5×4.5mのほぼ正方形を呈する。**主軸**　N28°Ｅ　**壁**　掘り込みは約10cmと浅く、立ち上がりは約50°と緩やかである。これは床の立ち上がりから壁への傾斜変換点付近にあたるためと思われる。**床面**

硬くしまった箇所はない。四隅に床下堀り込みが認められる。床下堀り込みの埋土はＬＢ混入の人為埋没土である。**住居埋土の状況**　埋土は極めて浅く、詳細は不明であるが、自然堆積と思われる。**柱穴**　４本。南東柱穴から東壁に向けて間仕切りと思われる溝が認められる。南壁中央床面に出入口施設のものと思われるピットが２本認められる。**周溝**　認められない。**カマド**　北壁に付属し、煙道の壁外への堀り込みは小さい。カマド主体部は大きく住居内に突出するタイプ。燃焼部付近は床面より約20cmほど窪んでおり、焼土が多く認められた。カマド焚口前部分には浅い（床面より８cm）堀り込みがあるが、この埋土には焼土は少量しか含まれず、貼床を呈している。カマド付近の床面にのみ貼床が認められる。**遺物**　遺構の残存状況からほとんど床面直上の出土形態である。しかし完形の個体はない。土師器　坏１、甕１

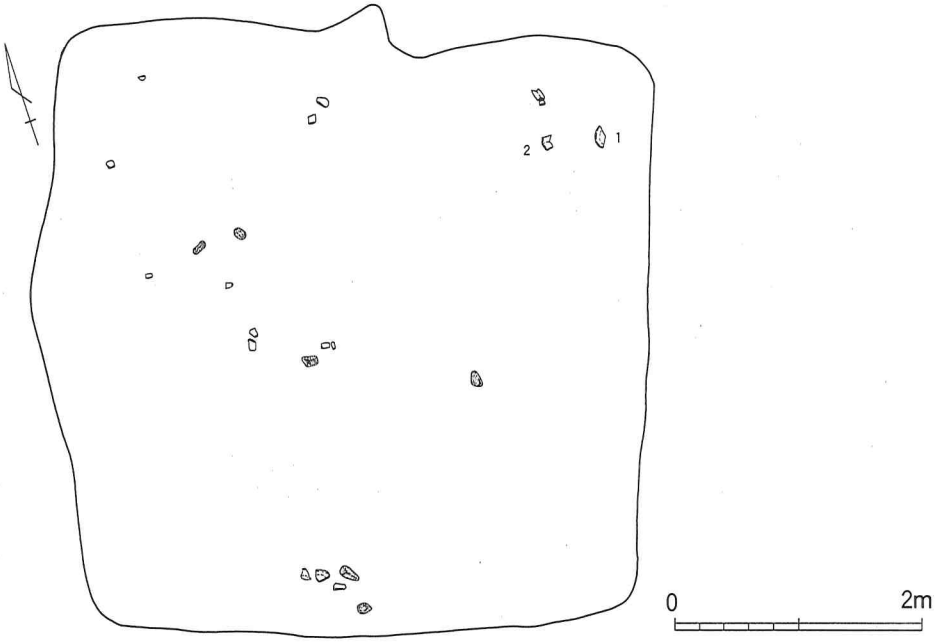


1．褐色土（ローム粒やや多、ローム小Ｂ）
2．黒褐色土（粘土粒、ローム大Ｂ少）
3．明褐色土（ローム粒多）
4．褐色土（ローム粒少）
5．灰褐色土（灰、粘土、焼土粒）
6．明褐色土（ローム粒やや多、ローム小Ｂ少）
7．黄色土（ローム地山）
8．褐色土（ローム粒少、ロームＢ）
9．暗黄褐色土（ローム粒多）
10．褐色土（ローム粒やや多、ローム小Ｂ少）
11．暗黄褐色土（ローム小Ｂ・ローム粒多）
12．暗褐色土（ローム粒少・粘土粒微）
13．褐色土（ローム粒やや多、Ｃ、ローム大Ｂ少）
14．明褐色土（ローム粒、13より多い）

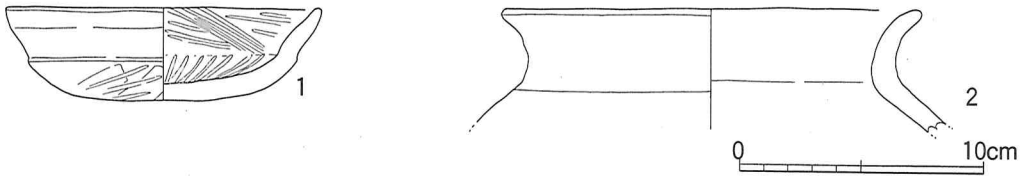
第29図　ＳＩ０９　平・断面図



第30図　ＳＩ０９　カマド平・断面図



第31図　ＳＩ０９　出土遺物平面図



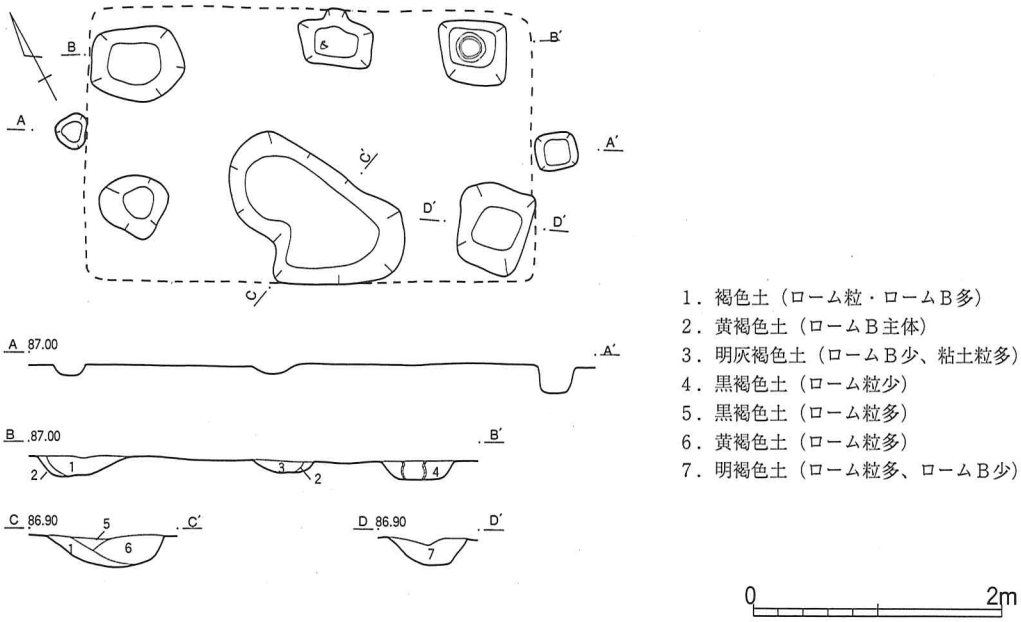
第32図　ＳＩ０９　遺物実測図

No	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
1	坏(H)	口径 12.7 器高 3.8	砂粒少 焼成良好	暗褐色	口縁部は下端に段をもち内湾気味に立ち上がる	内面ヘラナデ後放射状にヘラミガキ、口縁部ヨコナデ外面ヘラケズリ後体部上方をヘラナデ	80%	覆土中	口縁部、内面漆仕上げ
2	甕(H)	口径 17.0	砂粒やや多 焼成良好	明褐色			破片	覆土中	

第14表　ＳＩ０９　土器観察表

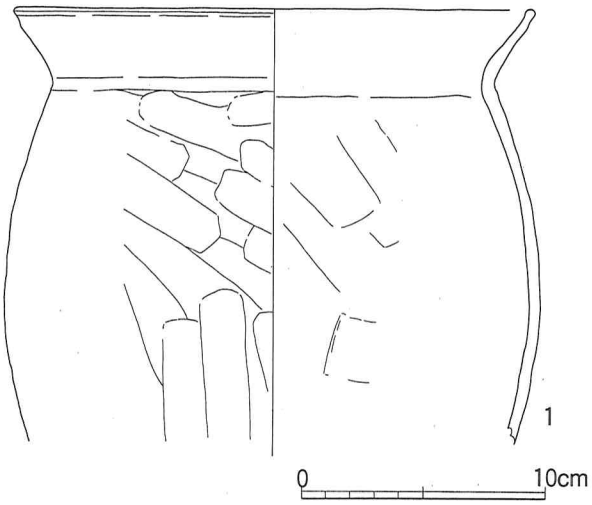
ＳＩ１０（第33図：図版16）

位置　調査区の東側（Ｄ－３－ｈグリッド）に所在、住居分布グルーピング№２。**平面形**　推定2.1 ×3.6mの横長の長方形を呈する（壁柱穴を含まず）。**主軸**　N27° E　**壁**　完全に削平してしまい確認不能。**床面**　四隅の床下堀り込みが存在する。中央部にも床下堀り込み状の土坑が存在するが住居に伴うか、否かは不明である。一部に貼床は存在するが基本的にはローム地山床である。ただし硬い床面が残存していたかは不明。**住居埋土の状況**　不明。**柱穴**　住居内には無く、東西壁中央に１対認められる。おそらく壁柱穴による棟持柱構造と思われる。**周溝**　無し。**カマド**　北壁に付属し、煙道の壁外への堀り込みは小さくＵ字形である。カマド堀り込みは床面から約10cmほど窪んでおり、粘土が認められた。**備考**　当初の遺構確認状態では土坑の集合した地区とみられていたが、すぐ脇に存在するＳＩ０６と床下堀り込みや壁柱穴の配置、それから推定される住居の規模が同様であるため、ロームに堀り込みの浅い住居跡であると断定した。**遺物**　土師器　甕１、北東コーナー部の床下堀り込みに正位置、直立して確認されたが、口縁部は削平により、欠損している。



1．褐色土（ローム粒・ロームＢ多）
2．黄褐色土（ロームＢ主体）
3．明灰褐色土（ロームＢ少、粘土粒多）
4．黒褐色土（ローム粒少）
5．黒褐色土（ローム粒多）
6．黄褐色土（ローム粒多）
7．明褐色土（ローム粒多、ロームＢ少）

第33図　ＳＩ10　平・断面図



第34図　ＳＩ10　遺物実測図

No	器種	法量(cm)	胎土・焼成	色　調	器形の特徴	整　　形	残存率	出土状態	備　　考
1	甕(H)	口径 21.0	微細砂粒多 焼成良好	赤褐色	頸部はくの字状で口縁部を僅かに内湾する	内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ	50%	土坑内	外面粘土付着

第15表　ＳＩ10　土器観察表

2　土　坑

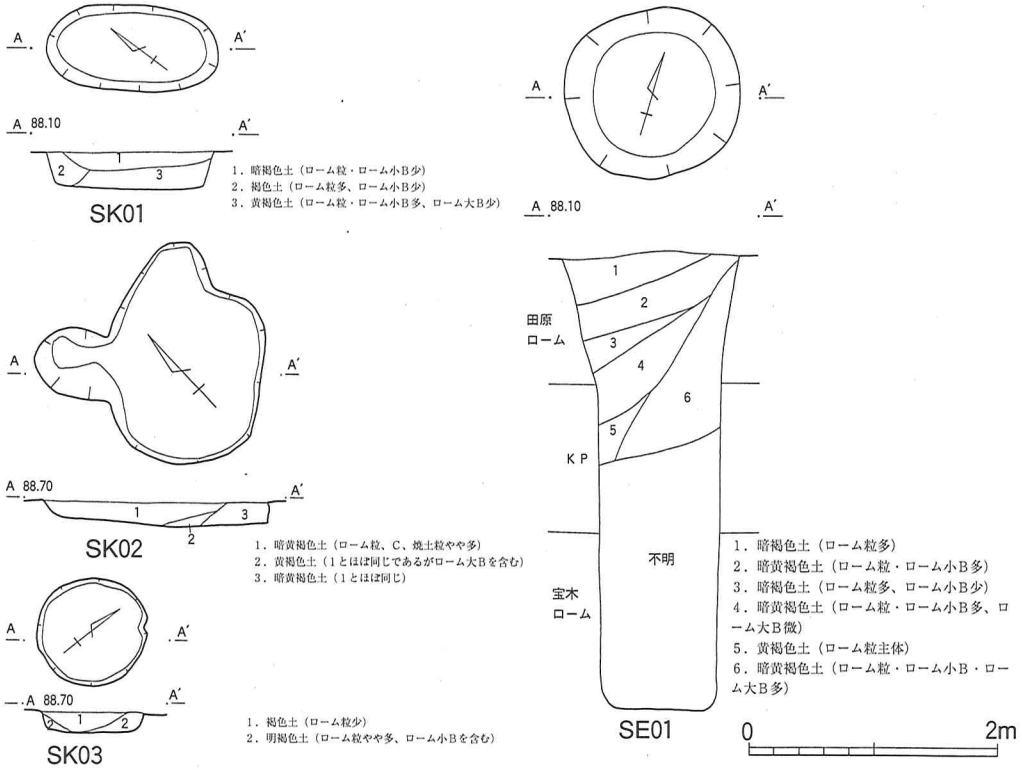
ＳＫ０１　位置　調査区の中央（Ｂ－４－ｆグリッド）　楕円形で出土遺物なし。時期不明。

ＳＫ０２　位置　調査区の南東側（Ｄ－４－ｄグリッド）　不定型（平面的には円形土坑の重複切り合いに見えるが断面では同一）時期、性格共に不明。

ＳＫ０３　位置　調査区の南東側（Ｄ－４－ｄグリッド）　円形で出土遺物なし。時期不明。

3　井　戸

ＳＥ０１　位置　調査区の南東側（Ｂ－３－ｊグリッド）　円形。堀方断面は深さ約 1.5mまでは、直径を約30％絞るテーパー状を呈しており、そこから下へ２ｍ程はほぼ垂直となる。地表から底部までは約 3.5mで、ＫＰを堀り貫き宝木ローム中で収束する。地下水位は約３ｍであるが、周囲の水田の灌水の影響でやや高い可能性がある。断面図の精密な測定および底部からの遺物の採集は不可能であった。これは降雨が多く、埋土に多くの水分が含まれており、崩落の危険があると判断したことによる。事実、重機による井戸の半裁を行っていた際、地表より 2.3m付近から下が崩落しており、その部分のセクションが得られていない。

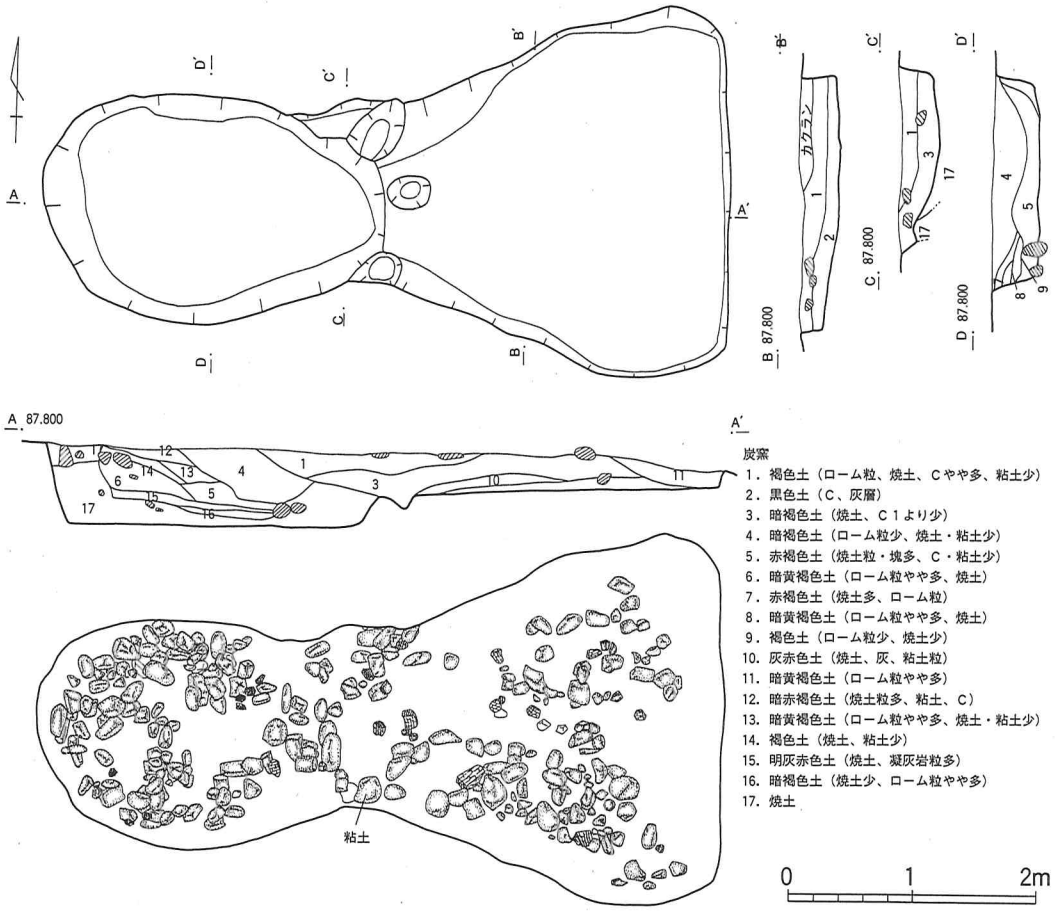


第35図　土坑、井戸　平・断面図

4　炭　窯

位置　調査区の中央（A－2－sグリッド）　前方後円形で出土遺物なし。時期は特定できないが、この地域の方々に伺うと近代～現代の可能性がある。それによると、最近までこの周辺はクヌギやナラの雑木林が繁茂しており原料が豊富にあったうえ、戦後に開拓が入った際にこの付近で炭焼きを行っていた事実があったそうであるが、この場所であるかどうかは不明である。

構造については上部を削平されているうえに、窯体が崩落しており詳細については確認できなかった。遺構は30～40cmの円礫が多数出ており、大部分が火を受けて赤色化しており、炭化物が付着しているものも多く見受けられた。これらの円礫は窯体内部を補強していたものと推測できる。窯体底部には窯が機能している際にすでに置かれていたと思われる円礫が認められたが、一面に敷きつめられている様子ではなく、側壁を補強していた礫が崩落したまま操業していたものと思われる。床面は田原ロームまで堀り下げられており、長期間の被熱により赤色に変色していた。窯体内部からは灰は多く見受けられたが、大きな炭は確認できなかった。



第36図　炭窯　平・断面図

Ⅳ　まとめ

1　遺物について

今回の下原遺跡の発掘調査においては、古墳時代終末期から奈良時代にかけての竪穴住居跡を10軒確認した。ここでは、これら竪穴住居跡の時期及び変遷等を検討するために、出土土器の編年的位置付けを考えてみたい。

宇都宮市域のこの時期の土器編年については、前田遺跡の発掘調査報告書で試みられている。前田遺跡は本遺跡の北方約８㎞に位置した古墳時代終末期から平安時代にかけての集落跡であり、昭和62～63年の発掘調査において竪穴住居跡161軒・掘立柱建物跡99棟が確認されたものである。前田遺跡の土器編年は、この豊富な出土土器の分析をとおして検討されたものであり、時期的にも土器様相的にも本遺跡を包括する内容である。従って、ここでは土器の分類作業も含めて、前田遺跡編年との対比のなかで位置付けを検討することにしたい。

(1)　土器の分類

本遺跡出土の土器は、土師器と須恵器の２種である。器種としては、土師器が坏・皿・鉢・甕の４器種、須恵器が坏・高台付坏・蓋・皿・壺・甕の６器種にそれぞれ分かれる。これらはさらに器形から以下のように細分できる。なお、この器形分類を前田遺跡編年に従ったものであり、詳細は同報告書を参照されたい。(宇都宮市埋蔵文化財調査報告　第29集『前田遺跡』1991．宇都宮市教育委員会)

〔土師器〕

坏

Ａ　丸底で、体部外面に稜を有し、口縁部が外反するもの。

Ｃ　丸底で、体部外面に稜を有し、口縁部が直立するもの。

Ｄ　丸底で、体部外面に稜を有し、口縁部が内傾するもの。

Ｅ　丸底で、口縁部が短く立つもの。

Ｆ１　丸底で、体部外面に稜を有し、口縁部が内湾気味に開くもので、体部内面にもしばしば段ができるもの。この内、体部に深みがあり、体部の器高が全体の1/2に近いもの。

Ｆ２　同上で、全体的に偏平化し、体部の器高が全体の1/3以下のもの。

Ｇ　丸底から、そのまま口縁部に至る半球形状のもの。

Ｈ　丸底で、体部外面に明瞭な稜を持たず、口縁部が外反するもの。

Ｊ１　平底から、体部が直線的もしくは外反気味に開くもので、ロクロ成形されたもの。この内法量比（底径／口径）が0.7～0.65のもの。

皿

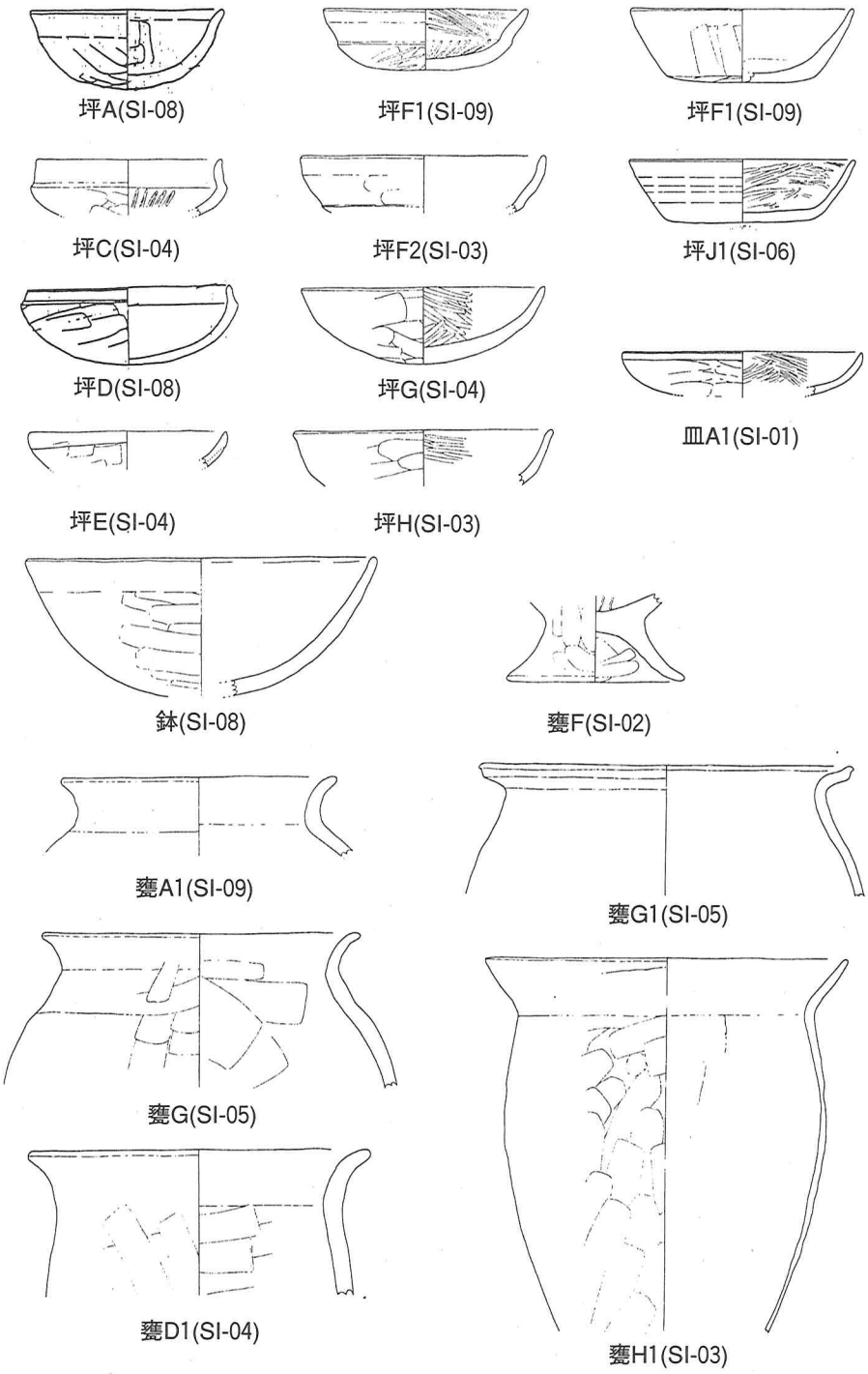
Ａ１　丸底で、体部外面に稜を有し、口縁部が外傾するもの。この内、口径16㎝前後、器高2.5～３6㎝のもの。

鉢

Ｇ　丸底から、そのまま口縁部に至る半球形状のもの。前田遺跡編年の分類にはみられなかったため追加した。

甕

Ａ１　胴部中位に最大径を有し、やや長めの球形を呈するもの。頚部に稜を持ち、口縁部が外反あるいは外傾するもの。この内、器高が256㎝以上の大形のもの。



第37図　下原遺跡出土土師器の器種と器形

C　長胴で、胴部中位に最大径をもち、口縁部が「く」の字に外反するもの。

D１　長胴で、口縁部に最大径をもち、胴部があまり張らずに軽く内湾し、底部に至るもの。この内、器高が30cm以上の大形のもの。

F　「ハ」の字に開く台を付けたもの。口縁部は短く外反する。

G１　「下野型」や「常総型」と呼ばれるもの。この内、頸部から口縁部の器肉が厚く、頸部は短く強く外反し、口唇部が凸帯状の面を形成するもの。

H１　「武蔵型」と呼ばれるもの。この内、口縁部が「く」の字状を呈するもの。

〔須恵器〕

坏

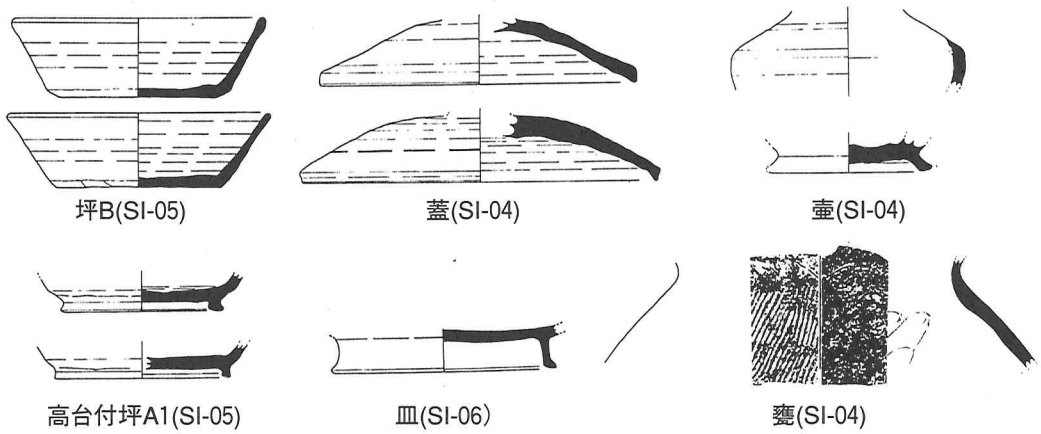
B　平底で、体部が直線的に開くもの。法量比（底径／口径）が0.7～0.65。

高台付坏

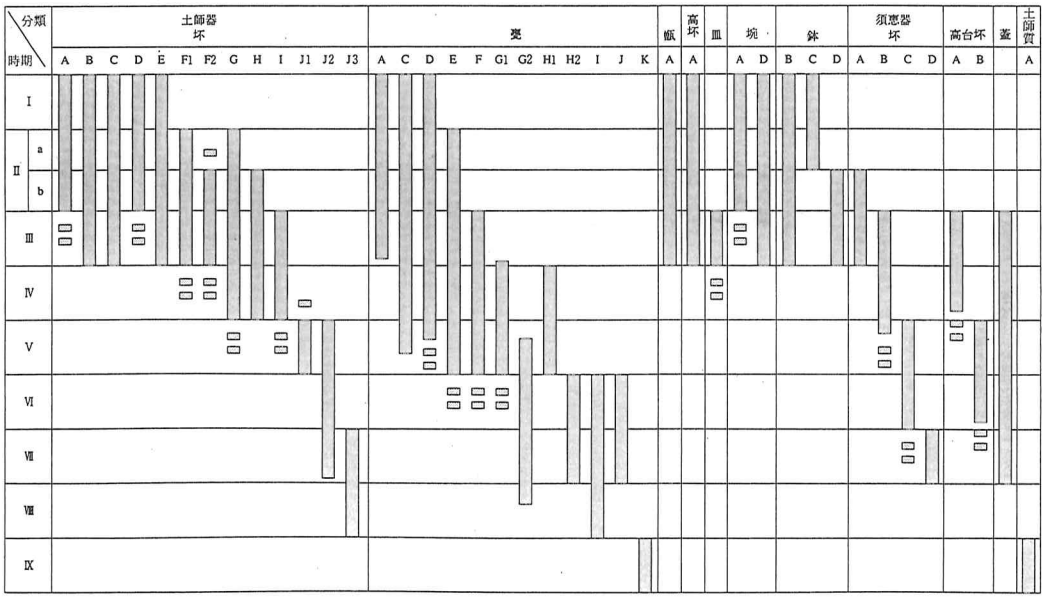
A１　低い高台部を付すもの。高台には先端が丸くおさまるものと、断面台形のものがある。この内、高台径８～10cm、口径13～14cm、器高5.5cm前後のもの。

蓋・皿・壺・甕

いずれも破片資料のため、前田遺跡編年の分類に照合することができない。



第38図　下原遺跡出土須恵器の器種と器形



第39図　前田遺跡出土土器の消長（報告書より）

(2)　土器の編年的な位置付け

前田遺跡では、およそ７世紀中葉から11世紀までの出土土器を９期10段階に編年している。これらの各器種・器形の消長を示したものが第39図であるが、前項で分類した本遺跡出土土器もこの消長の中に位置付けることが可能である。

さて、本遺跡出土土器はその出土状況や組み合わせ等から、大きく２群に分けることができる。以下、それぞれの土器様相及び編年的な位置付けをまとめると次のようになる。

下原遺跡第Ⅰ群土器

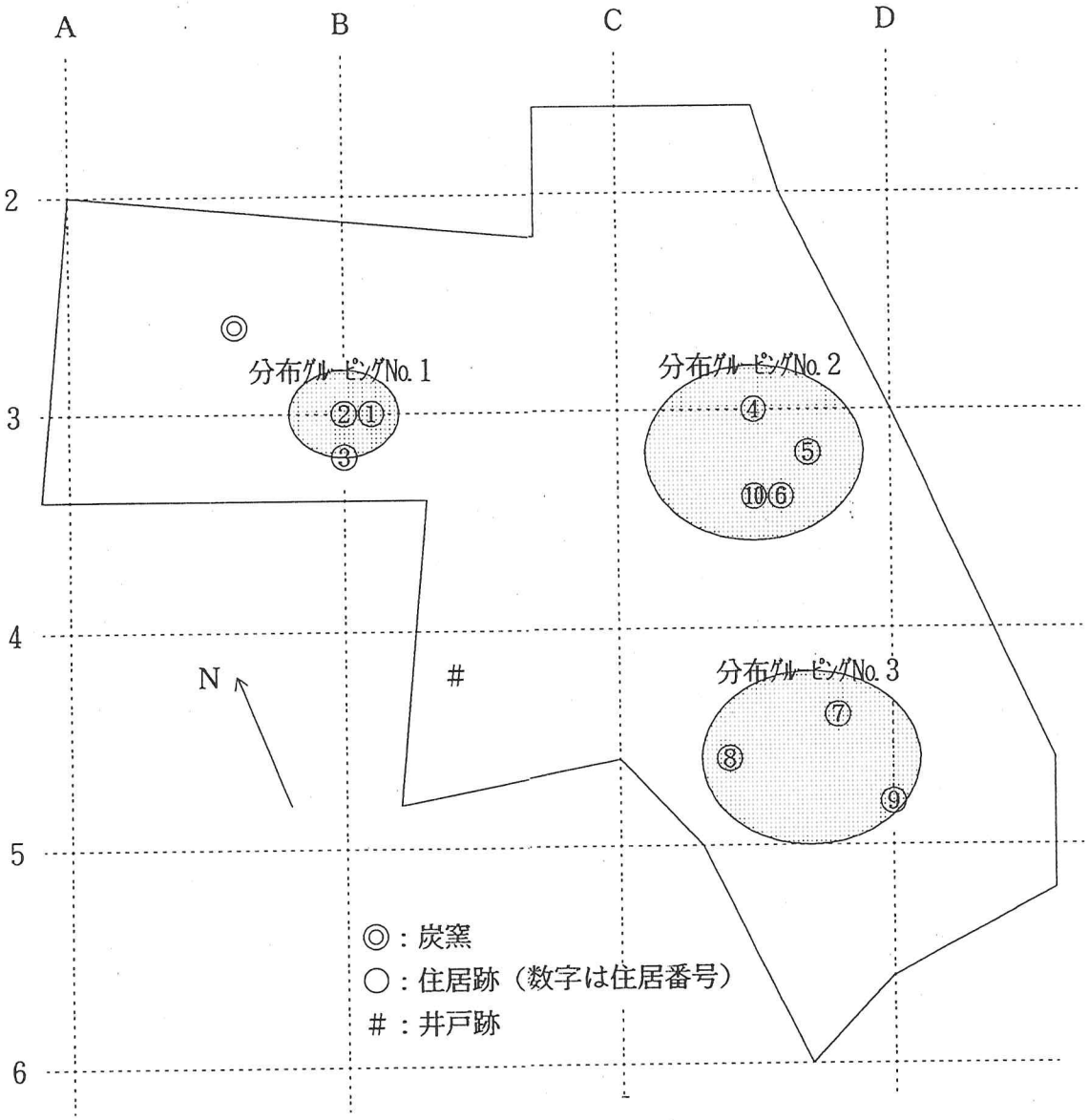
SIO7・SIO8・SIO9出土土器群。土師器坏Ａ・Ｄ・Ｆ１、土師器甕Ａ１、鉢等で構成され、須恵器がみられず、まだ古墳時代の様相を残す土器群と言える。前田遺跡編年に照合すると、坏Ｆ１が主体となっていることに対し坏Ｆ２や坏Ｈが存在しないことから、第Ⅱａ期に含まれるものと考えられる。年代的には７世紀後葉とされている。

下原遺跡第Ⅱ群土器

SIO1・SIO2・SIO3・SIO4・SIO5・SIO6出土土器群。土師器坏Ｃ・Ｅ・Ｆ２・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ１、土師器皿Ａ１、土師器甕Ｃ・Ｄ１・Ｆ・Ｇ１・Ｈ１、須恵器坏Ｂ、須恵器高台付坏Ａ１及び須恵器蓋・皿・壺・甕等で構成される、土器組成に須恵器が主体的に入ってくる段階である。前田遺跡編年に照合すると、土師器坏Ｃ・Ｅなど古墳時代からの流れのものも一部みられるものの、土師器甕Ｇ１・Ｈ１が存在することから、第Ⅳ期に含まれるものと考えられる。年代的には８世紀中葉とされている。

2　遺構について

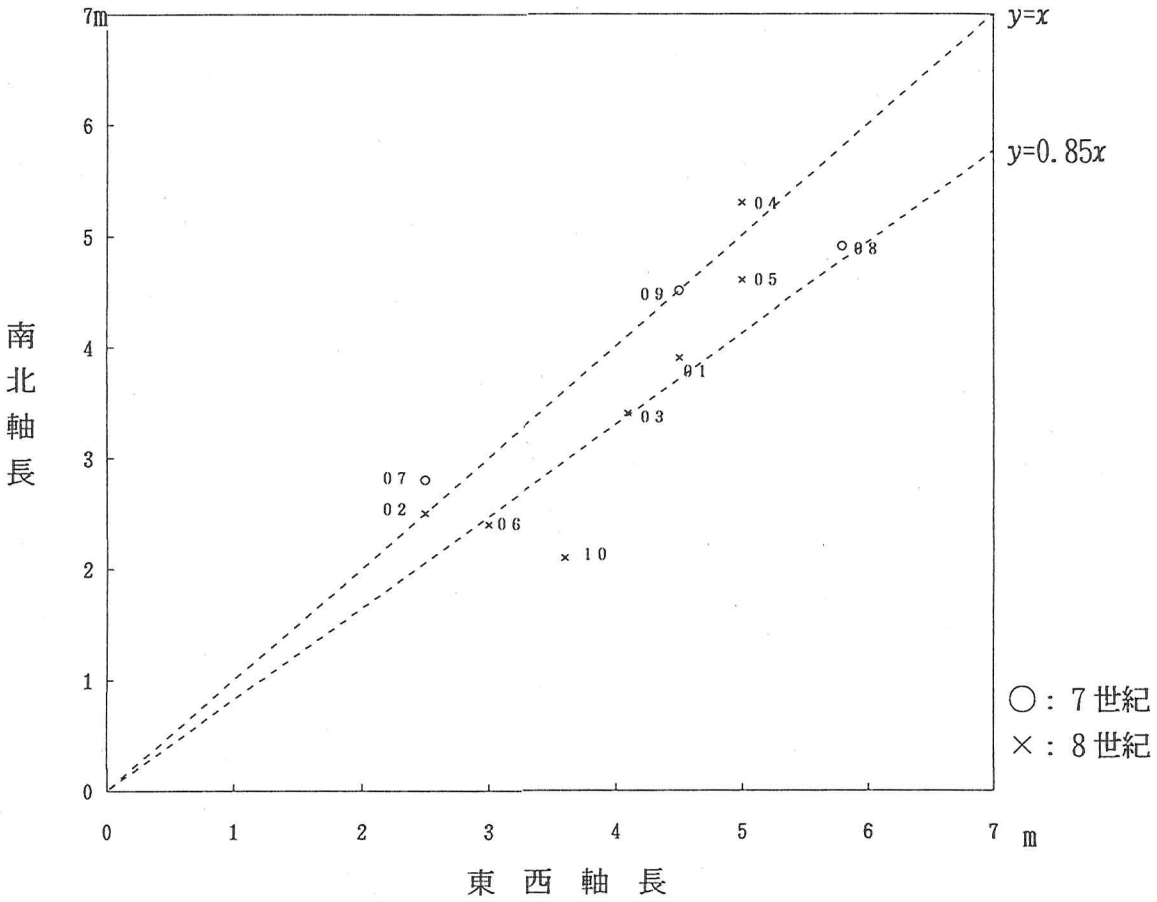
確認された10軒の住居跡の配置模式図を以下第40図に示す。住居跡群は、井戸を中心にしてそれぞれほぼ等距離で３グループに分類することができる。出土遺物から検討した結果でも、それぞれの住居跡の時期は同じ３グループに分類される。それぞれのグループの時期は分布グルーピングNo.３は７世紀後葉、分布グルーピングNo.１とNo.２については８世紀中葉にそれぞれ比定される。



第40図　　遺構配置模式図

(1) 竪穴住居跡の平面規格について

調査により確認された10軒の竪穴住居跡を第41図のように示す。この図は縦軸に南北長、横軸に東西長をとったもので、縦横比が1：1すなわち正方形の住居跡は傾き45°の点線上に載る。したがって南北に長い住居跡は傾き45°より上方、東西に長い住居跡は傾き45°より下方に分布することになる。これからすると南北に長い住居跡は2軒、正方形の住居跡も2軒、そして東西に長い住居跡は6軒となる。その中でもy=0.85xという傾きに載る住居跡が4軒（SI01,03,06, 08）で多い比率を示しており、縦横比が6：7という東西の長方形を意識している印象がある。このように集落のほとんどの住居跡が、正方形から6：7の長方形の規格に収まるという構成を示すが、縦横比と住居跡の時期にはこの図から見ると特に相関関係があるわけでなく、平面規格はふたつの傾きの間にほぼ収まるように散布している。



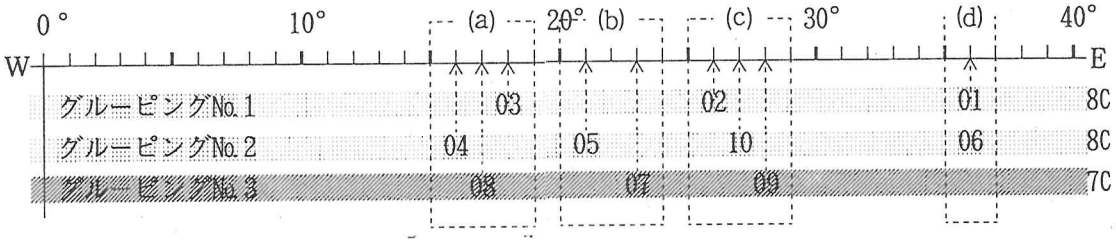
第41図　竪穴住居跡縦横比一覧

次の第16表では検出した10軒の住居跡について、遺構で分類可能と思われる特徴的な項目について一覧表にまとめたものである。第40図で分類できた３地区のグルーピングと、遺物の検討から分類された２時期のグルーピングはこの第16表ではその傾向をとらえることはできない。またこの表で抽出した住居跡の形態的な項目ごとに分類作業を行っても、３地区、２時期に分類できることはできない。なお第16表の網がかかった３軒の住居跡は７世紀に比定されることを示す。

項目／住居跡	平面形	規模（m）南北×東西	主軸方向	壁周溝	主柱穴	壁柱穴	貯蔵穴	カマド	床下掘り込み	出入り口ピット	備考
ＳＩ０１	長方形	3.9 ×4.5	N-36° -E	×	×	×	－	－	○	×	攪乱著しい
ＳＩ０２	正方形	2.5 ×2.5	N-26° -E	×	×	×	×	E	×	×	カマド補修
ＳＩ０３	長方形	3.4 ×4.1	N-18° -E	○	×	×	×	N	○	○	カマド補修
ＳＩ０４	長方形	5.3 ×5.0	N-16° -E	○	4	○	×	N	○	×	建て替え
ＳＩ０５	長方形	4.6 ×5.0	N-21° -E	○	4	○	×	N	○	○	
ＳＩ０６	長方形	2.4 ×3.0	N-36° -E	○	×	○	×	SE	○	○	壁柱穴東西軸
ＳＩ０７	長方形	2.8 ×2.5	N-23° -E	×	×	×	×	N	○	○	７Ｃ
ＳＩ０８	長方形	4.9 ×5.8	N-17° -E	○	4	×	×	N	○	×	７Ｃ
ＳＩ０９	正方形	4.5 ×4.5	N-28° -E	×	○	×	○	N	○	○	間仕切り溝７Ｃ
ＳＩ１０	長方形	2.1?×3.6?	N-27° -E	×	×	○	○	N	○	×	壁柱穴東西軸

第16表　住居跡比較一覧　　凡例　○：有り　×：無し　－：不明　Ｎ：北　Ｅ：東　ＳＥ：南東

第42図は住居跡の真北に対する住居跡主軸の傾きの傾向を示したものである。これは第16表の項目「主軸方向」から抽出して作成したものであるが、やはり３地区、２時期の傾向を反映していない。ただし別の観点から見ると、あるグルーピングが可能になる様相を呈している。

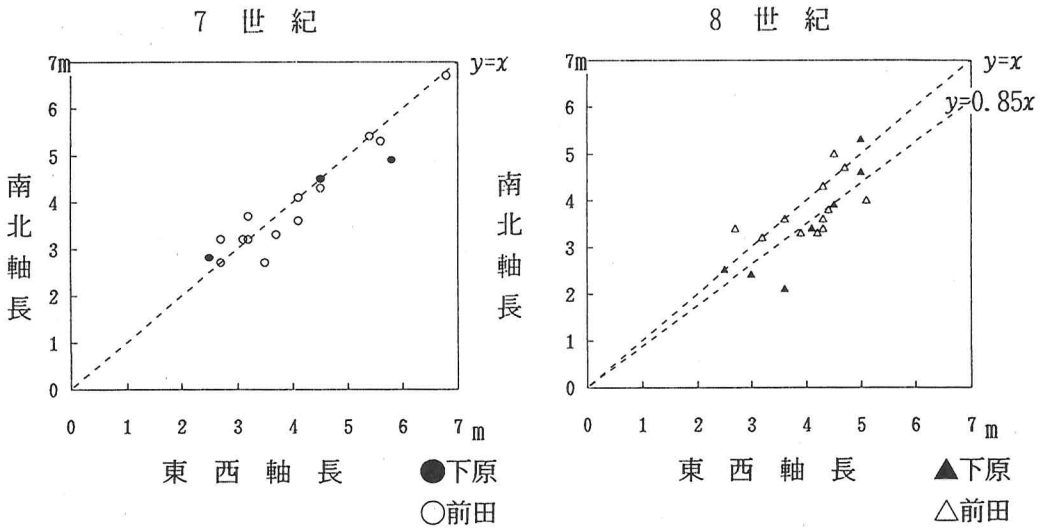


第42図　住居跡主軸方位分布一覧

このようなことから本遺跡では住居跡の比較形態的な分類では、住居が機能している時代を決定づけられるような特徴や、３地区に集中するという傾向を求めることはできないといえる。ただしこれは検出住居跡10軒での比較作業であり、さらにサンプル数が多ければ第16表の結果とリンクできるような内容を見出せるかもしれない。

(2) 他遺跡との比較について

次に本遺跡は他の同時期の遺跡の住居跡と比較してどのような特徴があるのか比較を試みる。同時期の集落としてサンプル数も多く、筆者も調査に参加した、宇都宮市上戸祭町の前田遺跡 （宇都宮市埋蔵文化財調査報告 第29集 1991. 宇都宮市教育委員会）を挙げる。



第43図 前田遺跡との住居跡比較

7世紀の住居跡については前田遺跡の7世紀後半のサンプル数14を抽出し、本遺跡3軒と比較を行った（第43図左）。特徴は一辺が2.7～4.5m付近の住居跡が多く、特に一辺が3m付近の住居跡において南北、東西比率が7：6～6：7の間で南北長方形住居跡と東西長方形住居跡が存在する。そし一辺が6m付近の住居跡に小集団があり、一辺が7m付近の住居跡が1軒存在する。すなわち一辺が3mくらいの住居跡を中心に 2.7～4.5mの範囲内に一定の比率に基づく規格で一集団がありさらに6m付近に第2集団、7m付近に第3集団とあるようである。本遺跡の住居跡（●）を重ねてみると、第1集団の最小に1軒、同じく第1集団の最大に1軒、第2集団に1軒入っている。これらから前田遺跡の同時代の住居跡平面規格に極めて近似しているといえよう。 次に8世紀の住居跡については前田遺跡の8世紀中葉のサンプル数13を抽出し、本遺跡7軒と比較を行った（第43図右）。特徴は一辺が3～5m内に住居跡がかたまり、7世紀に見られた6m以上の大きな住居跡は見られなくなってくる。さらに傾きが =0.85 付近、すなわち南北、東比率が6：7の間で東西長方形住居跡がほとんどとなってくる。本遺跡の住居跡（▲）を重ねてみるとこの集団から下方に離れて1集団を形成する、いわゆる小規模な住居跡群（SI02,06,10）と、前田遺跡の集団と重なる住居跡があり、明確に2つの集団を形成することが判る。

(3) 下原遺跡の住居跡について

SI07,08,09の３軒の住居跡は遺物から７世紀代に比定され、また平面配置的にも集合が見られ、住居跡分布グルーピングNo.３を構成している。しかし、これらの３軒はそれぞれ規模も異なるし、共通するような形態的特徴は見い出すことはできない。

またSI01,02,03の３軒の住居跡とSI04,05,06,10 の４軒の住居跡は遺物から共に８世紀代に比定され、それぞれ平面的配置から分布グルーピングNo.１とNo.２を構成している。しかし、やはりこの時代に分類できるような形態的特徴は見い出すことはできない。すなわち、遺構の形態的特徴から住居跡の時期的分類を行うことは不可能であるとういことがいえる。しかし同時代の前田遺跡の住居跡と比較すると、時代別の特徴があらわれてくる。

７世紀代の住居跡は中規模（一辺が2.7 ～4.5m)、大規模（6.0m)、そして特大規模（7.0m）に分類できる傾向にあるといえる。その中で本遺跡の住居跡は中規模の最小と最大に１軒ずつ、大規模に１軒という分布パターンをみせる。これは同時期の別の遺跡と比較して特に変わったところはなく、一般的な集落といえる。

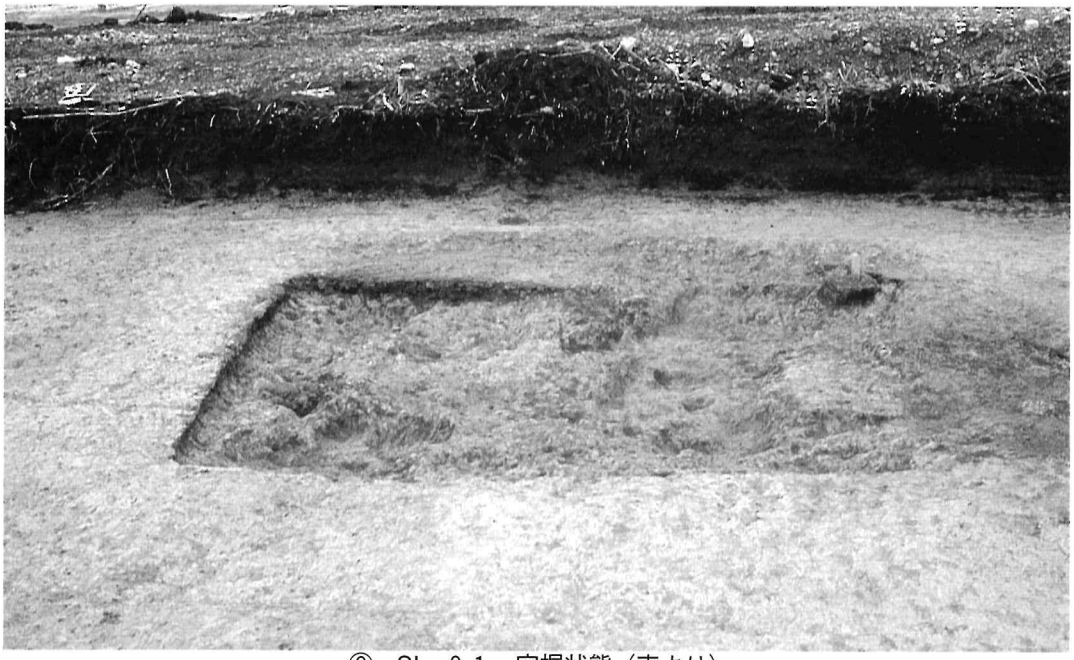
しかし８世紀代の住居跡の規模は６ｍをこえる特大規模の住居跡が消滅するので、一般に小型化するように感じられるがほとんどは一辺が３～５ｍに住居跡であり、７世紀代の住居跡からするとやや大きくなることが分かる。また南北長方形の住居跡が減り、東西長方形の住居跡が増えてくる。その中で本遺跡の住居跡もほとんどはこの集団に属するが、前田遺跡と比較して異なる点は小規模な住居跡群があることである。この小規模な住居跡（SI02,06,10）の３軒はそれぞれ２つのグループに属している。(SI02はNo.１グループ、 SI06,10はNo.２グループ）このように本遺跡では住居跡の配置分布グルーピングと、時期のグルーピングが一致するわけで、複数の小規模な住居跡群（グルーピング）が井戸を中心に集落を構成していた可能性がある。(しかし現在では井戸の時期は不明である。）そしてこの小さな住居跡群はさまざまな規模の住居によって構成されているといえる。また第　図の真北に対する住居跡の主軸の傾きからみると特に配置分布グループごとに傾きがかたまる傾向はなく、逆に(a), (b), (c), (d)という独特な分布パターンをみせる。この分布パターンの特徴は１グループ（例えば(a)グループ）内には同じ配置分布グループ（時期、平面配置ごとに分類した３グループ、例えばグルーピングNo.1)が存在しないということである。言い換えると住居跡の主軸は特に多く集中する傾き（東偏χ°）は存在しなく、逆に同時期の同配置分布グループにかたまらないように、分散されているといったような印象さえ与える。このように本遺跡を集落の変遷という視点から見たとき、小規模な住居群（規模が異なる数軒の住居の集合）が例えば井戸など中心にして複数集合して構成される、小規模集散型の集落といえる。そして小規模な住居群内における規模や主軸の傾き等の均一したばらつき（散布）は、それぞれの住居跡や建物がそれぞれ担任している機能の差から顕れているという可能性はないのだろうか。しかし本遺跡においては調査区の関係で10軒、３グループしか確認できなかったが、今後同様でかつ大規模な遺跡においてこのような検討がなされた場合、より明確な答えがでると思う。

図　　版

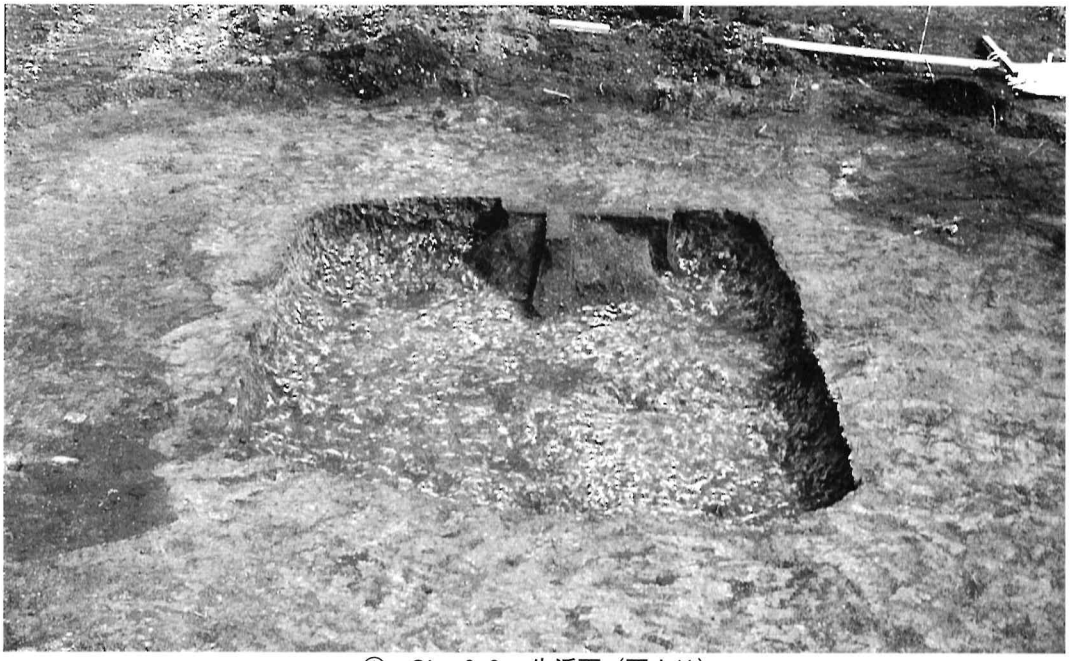
① 確認調査風景（東より）

② 確認調査風景（東より）

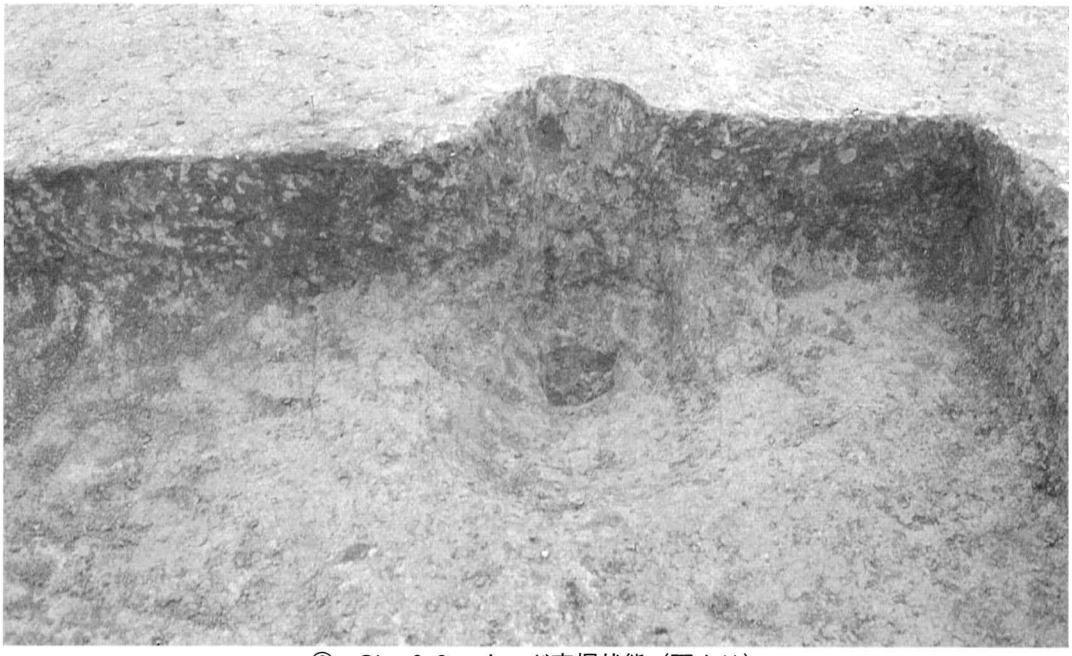
① SI－０１　作業風景（東より）



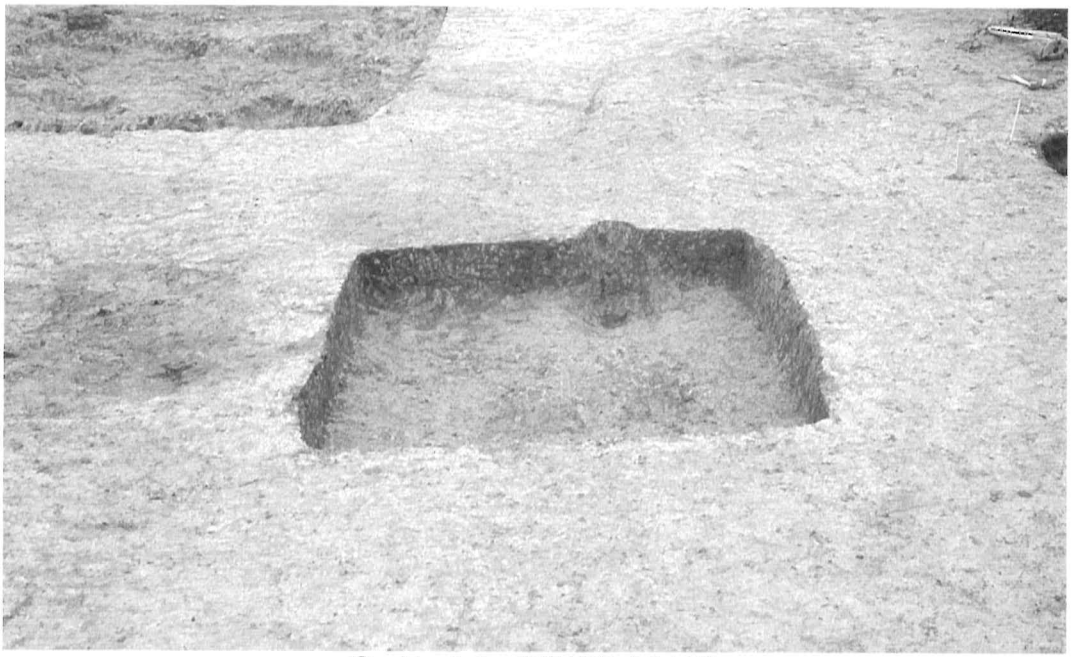
② SI－０１　完掘状態（南より）



① SI－０２　生活面（西より）



② SI－０２　カマド完掘状態（西より）

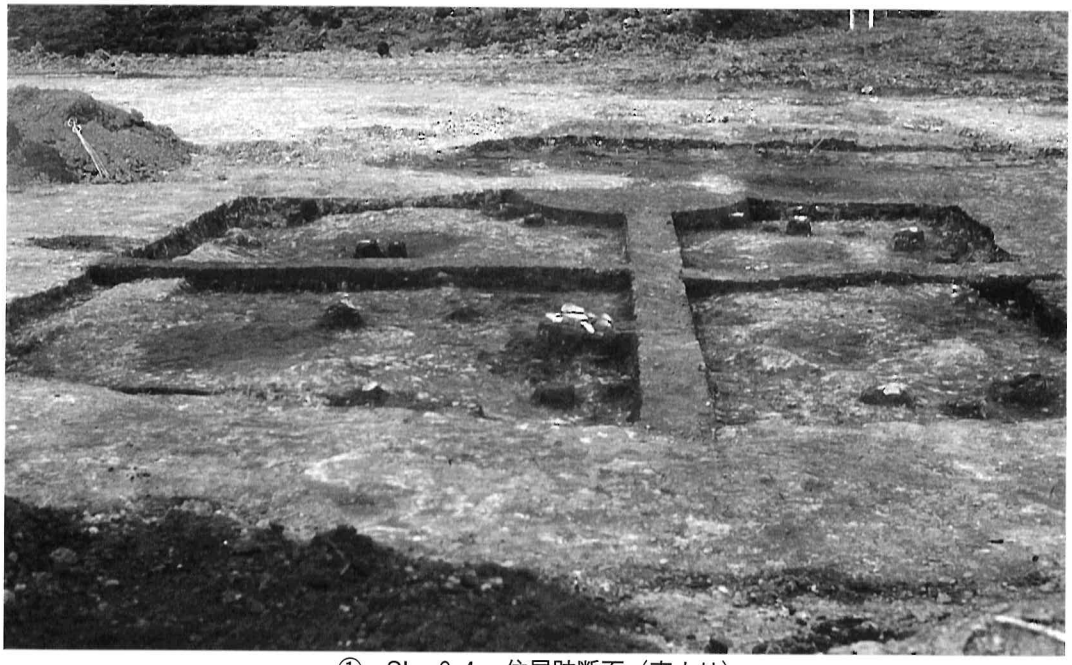


① SI－０２　完掘状態（西より）

② SI－０３　遺物出土状況（南より）

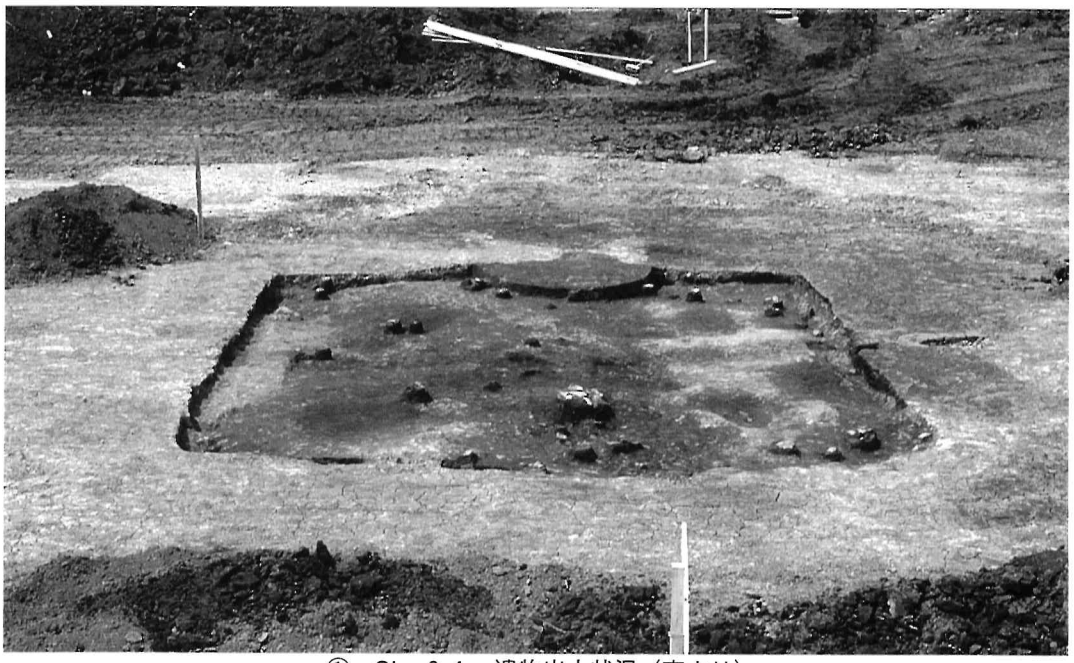
① SI－０３　遺物出土状況（南西より）

② SI－０３　カマド（南より）



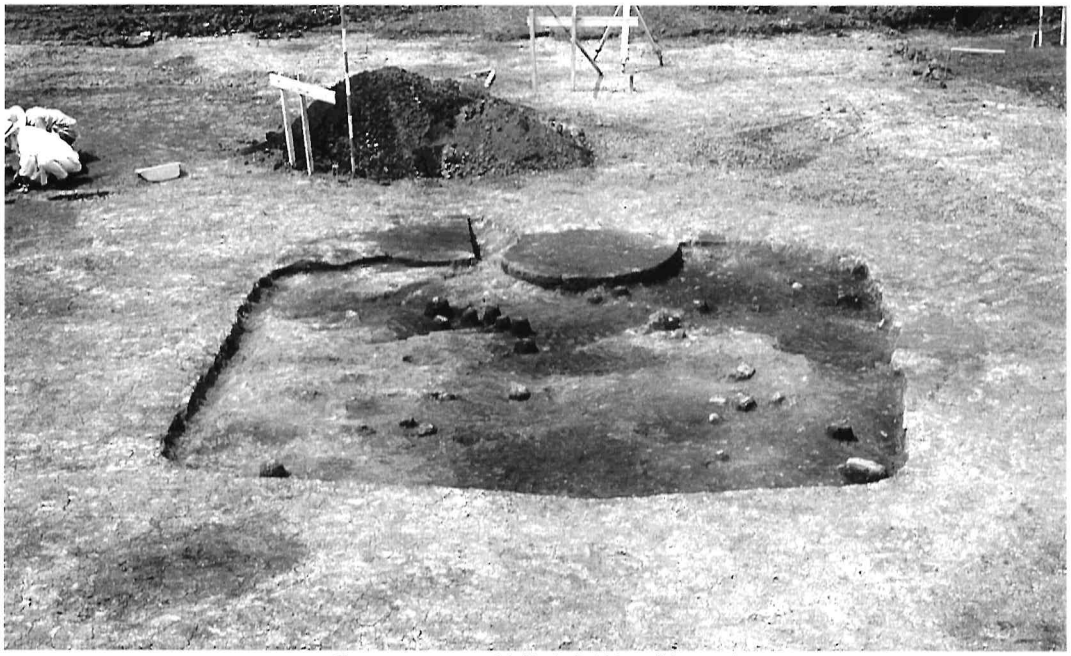
① SI－０４　住居跡断面（南より）

② SI－０４　カマド断面



① SI－０４　遺物出土状況（南より）

② SI－０４　遺物出土状況（南東より）

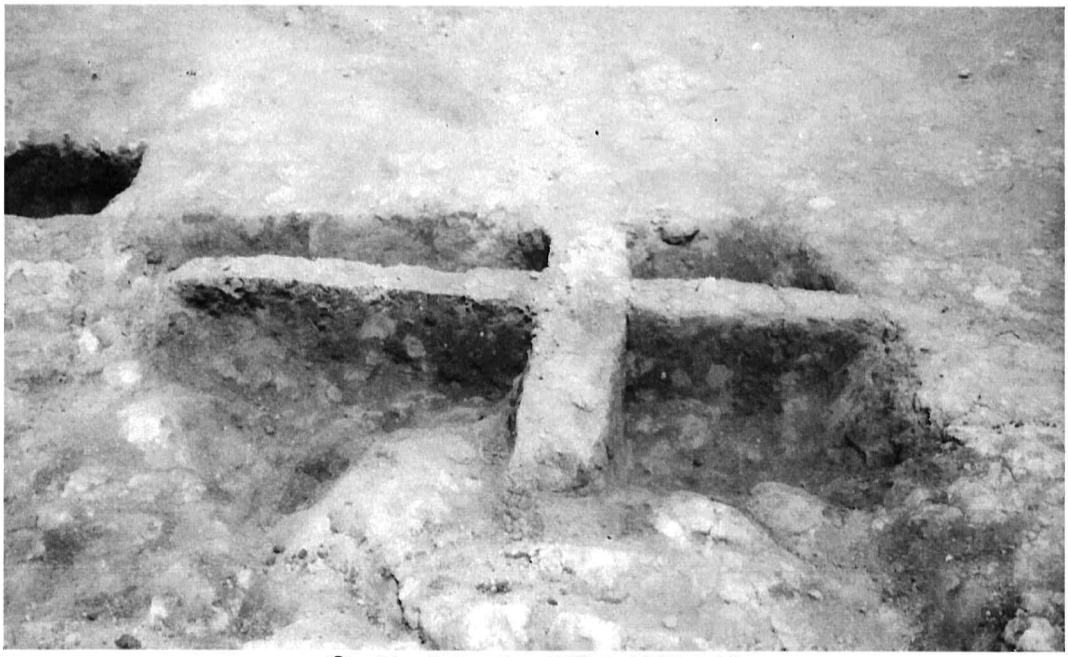


① SI－０５　遺物出土状況（南より）

② SI－０５　遺物出土状況（南より）

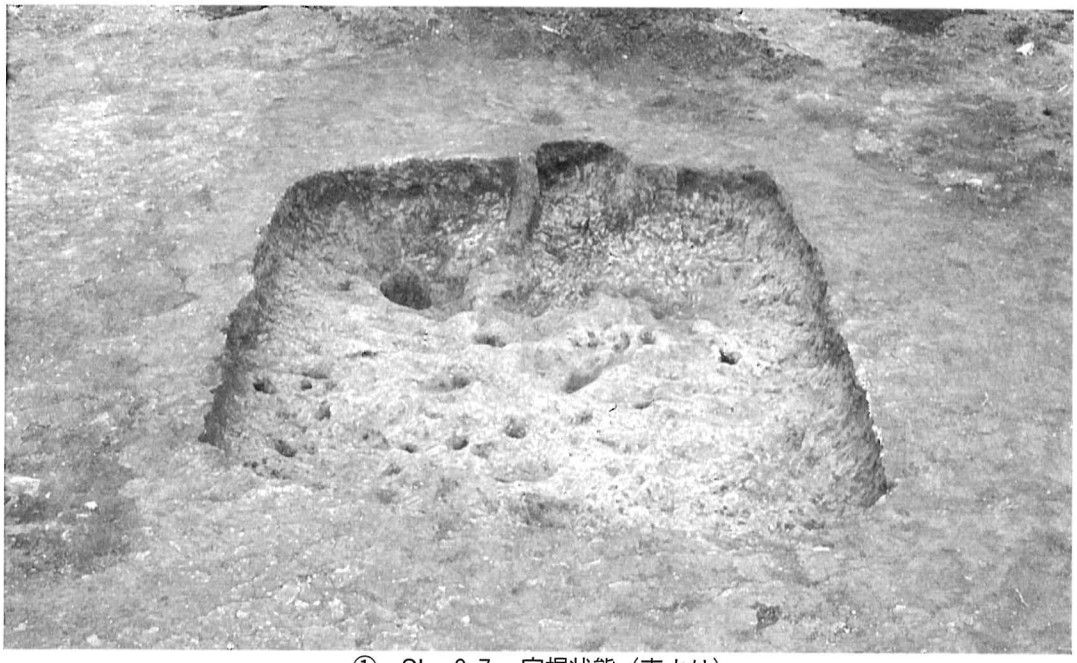
① SI－０５　完掘状態（南より）

② SI－０６　完掘状態（南より）



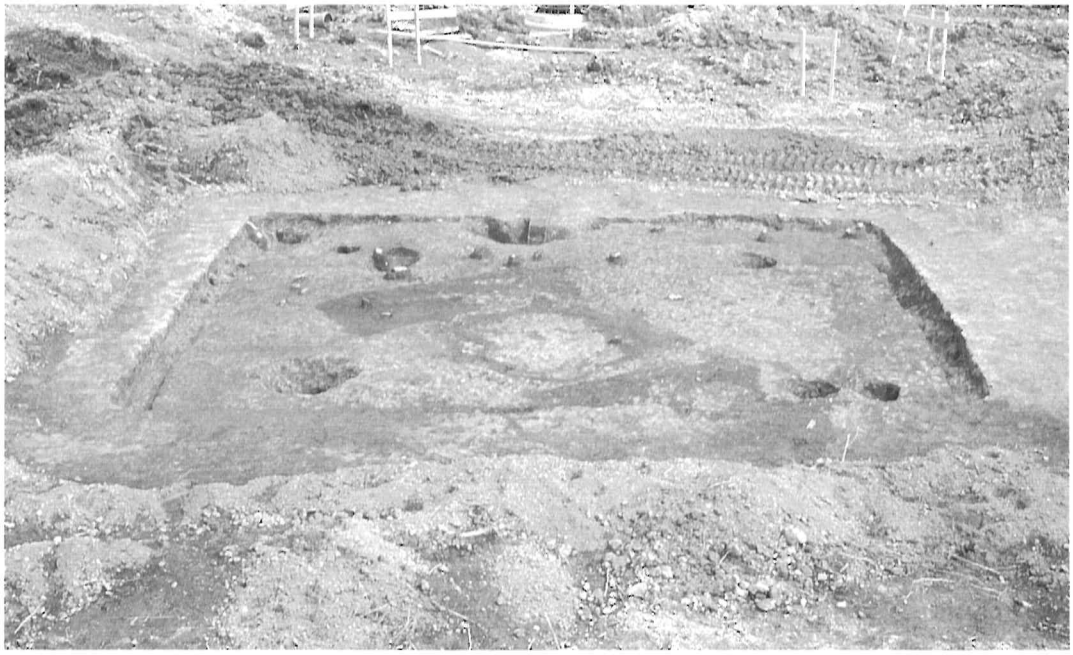
① SI－０６　カマド断面（北西から）

② SI－０６　遺物出土状況（東から）



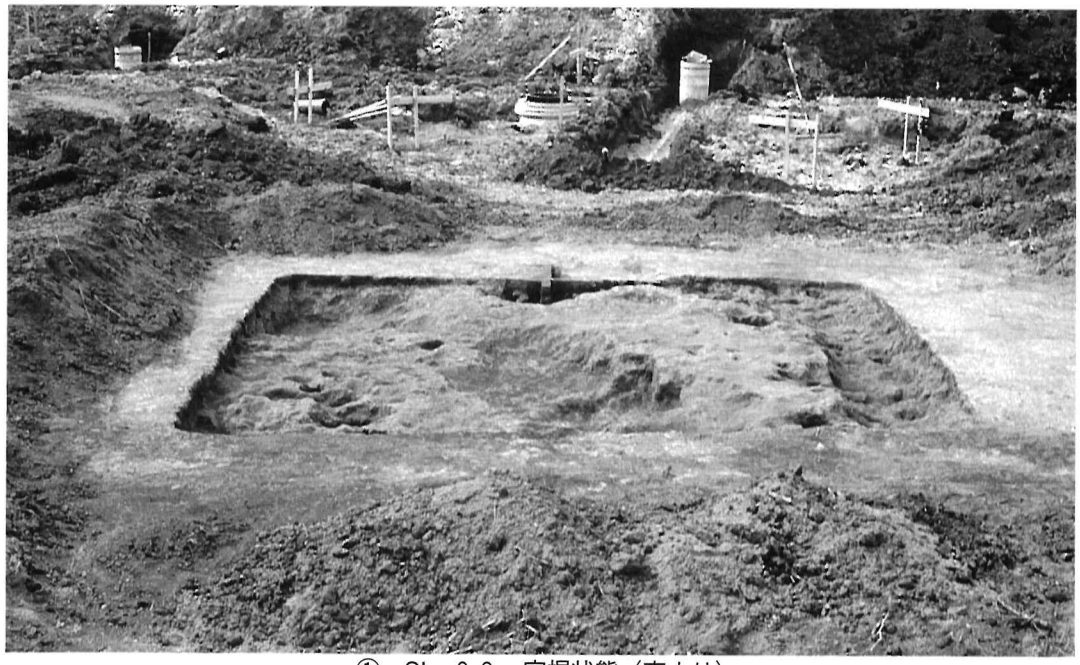
① SI－０７　完掘状態（南より）

② SI－０８　カマド断面



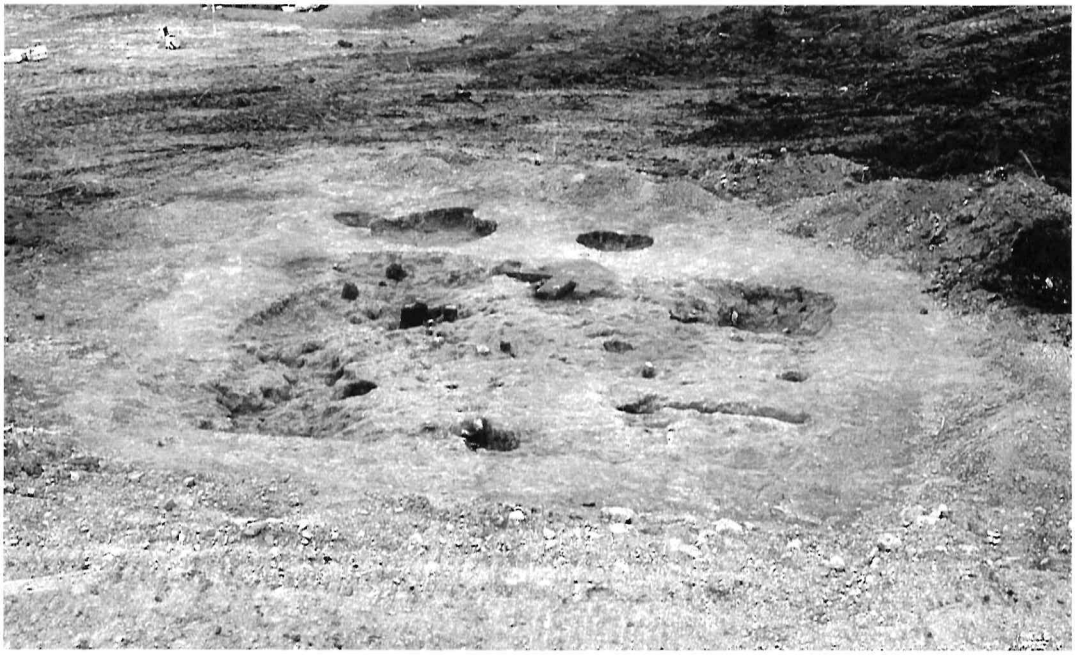
① SI－０８　生活面（南より）

② SI－０８　カマド断面（南西より）

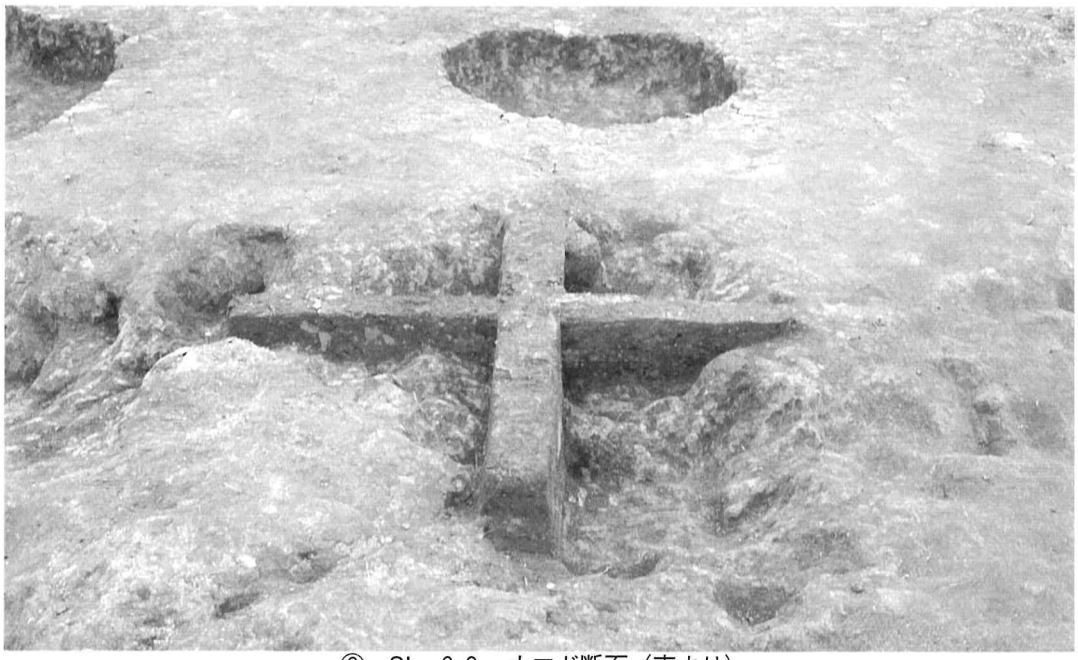


① SI－０８　完掘状態（南より）

② SI－０８　カマド完掘状態（南東より）



① SI－０９　遺物出土状況（南より）



② SI－０９　カマド断面（南より）

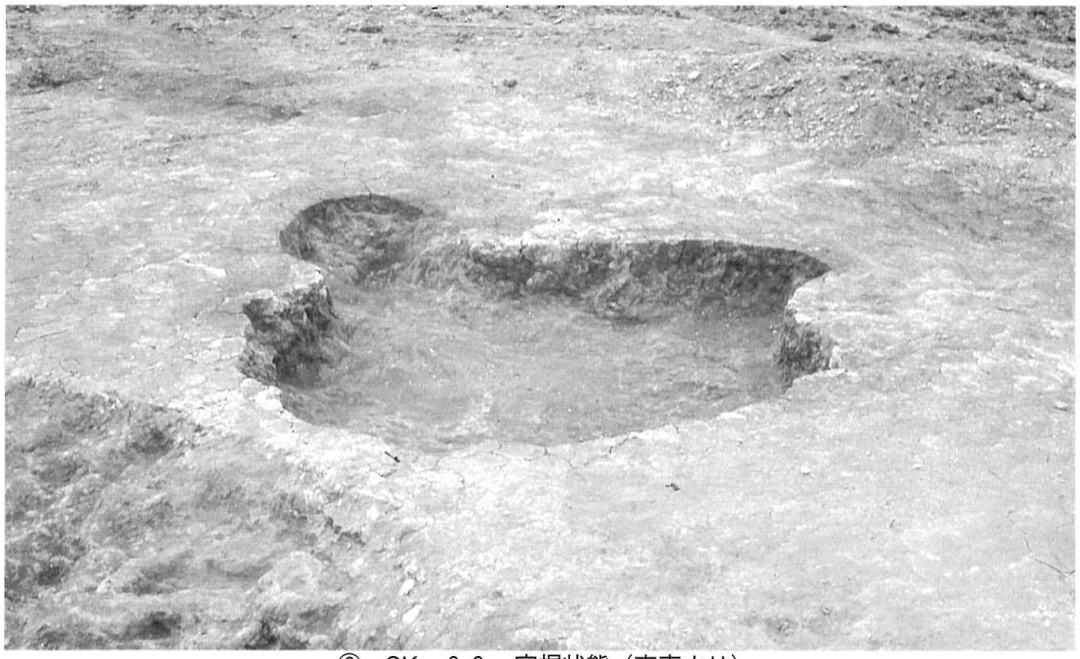
① SI－０９　カマド完掘状態（南より）

② SI－０９　完掘状態（南より）

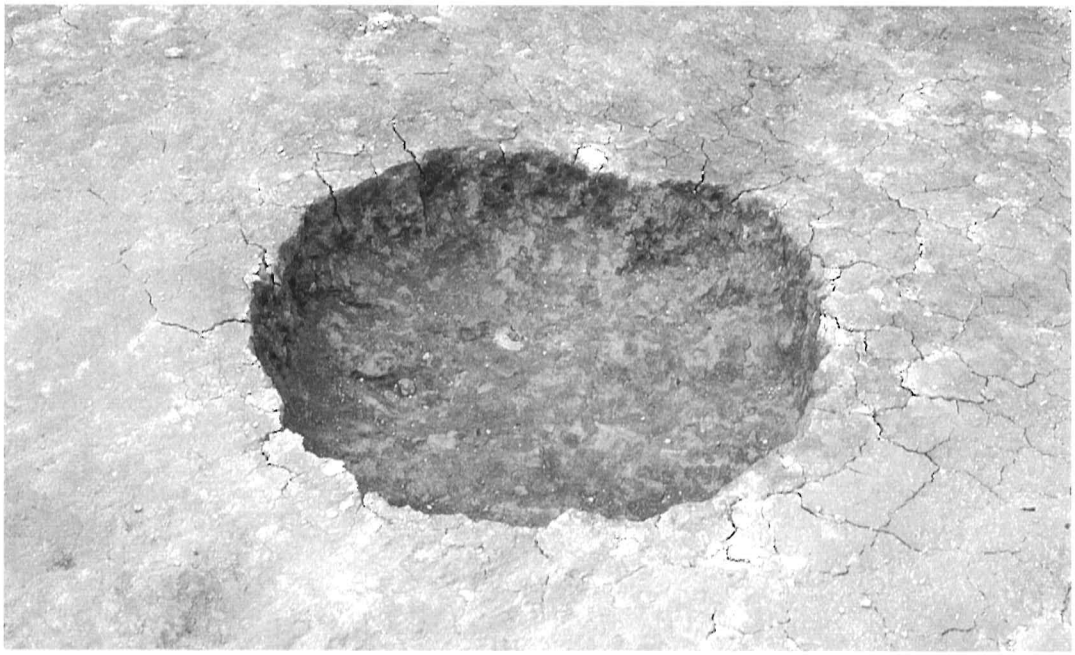
① SI－１０　完掘状態（南より）

② SI－１０　遺物出土状況（南より）

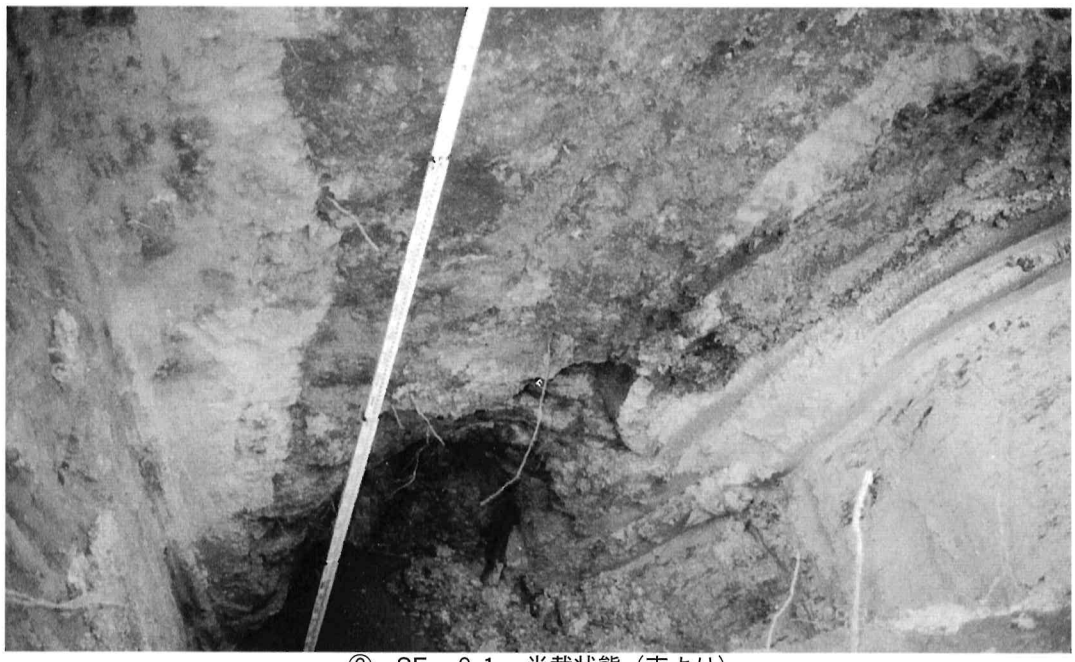
① SK－０１　完掘状態（南西より）



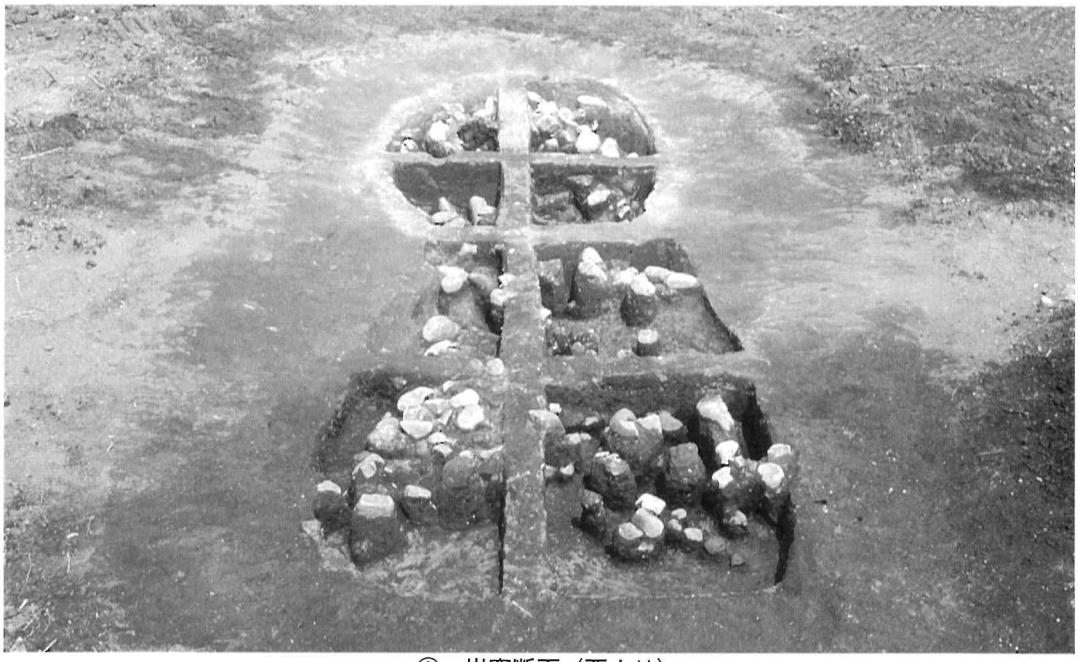
② SK－０２　完掘状態（南東より）



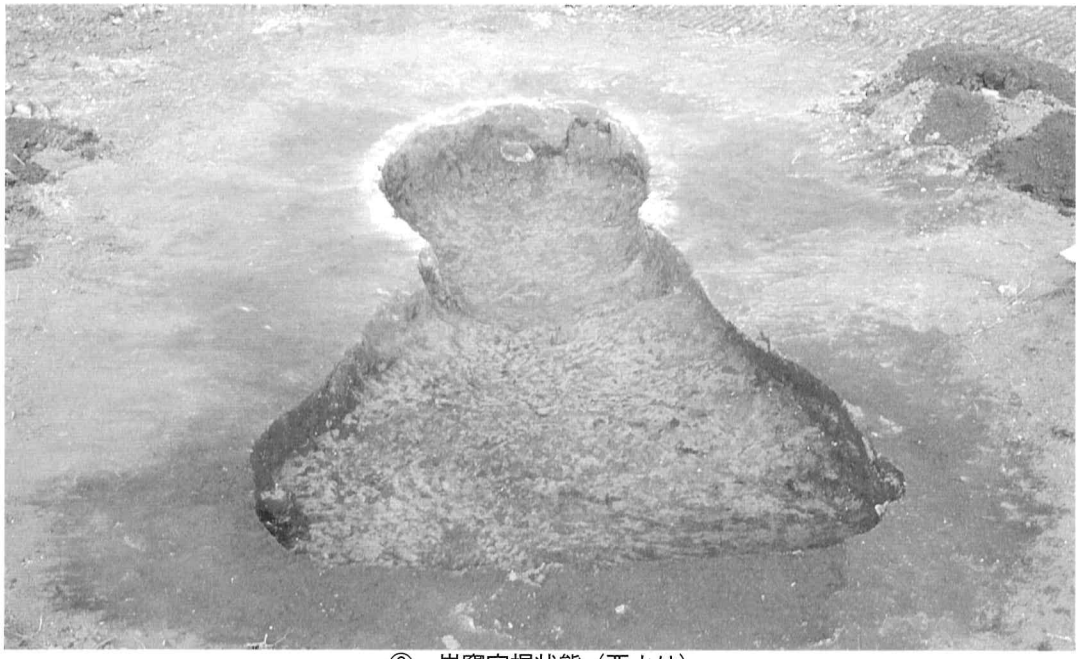
① SK－０３　完掘状態（南より）



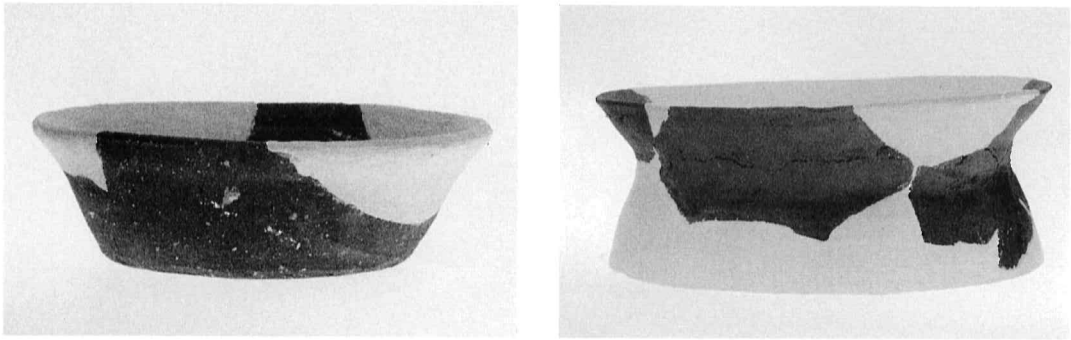
② SE－０１　半裁状態（南より）



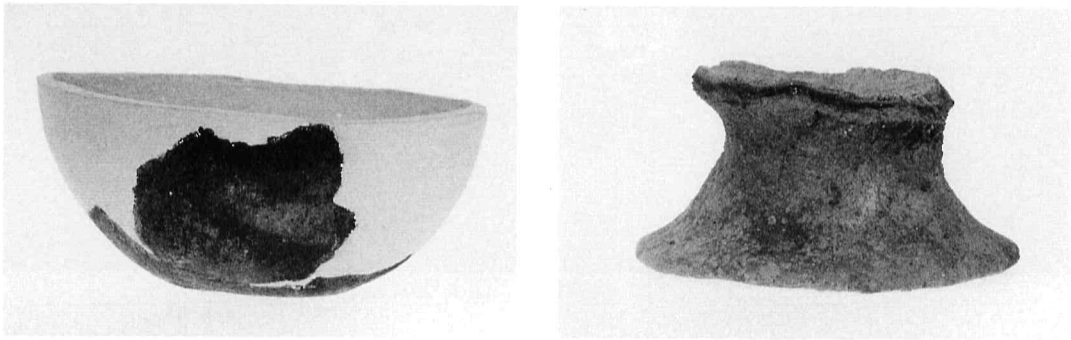
① 炭窯断面（西より）



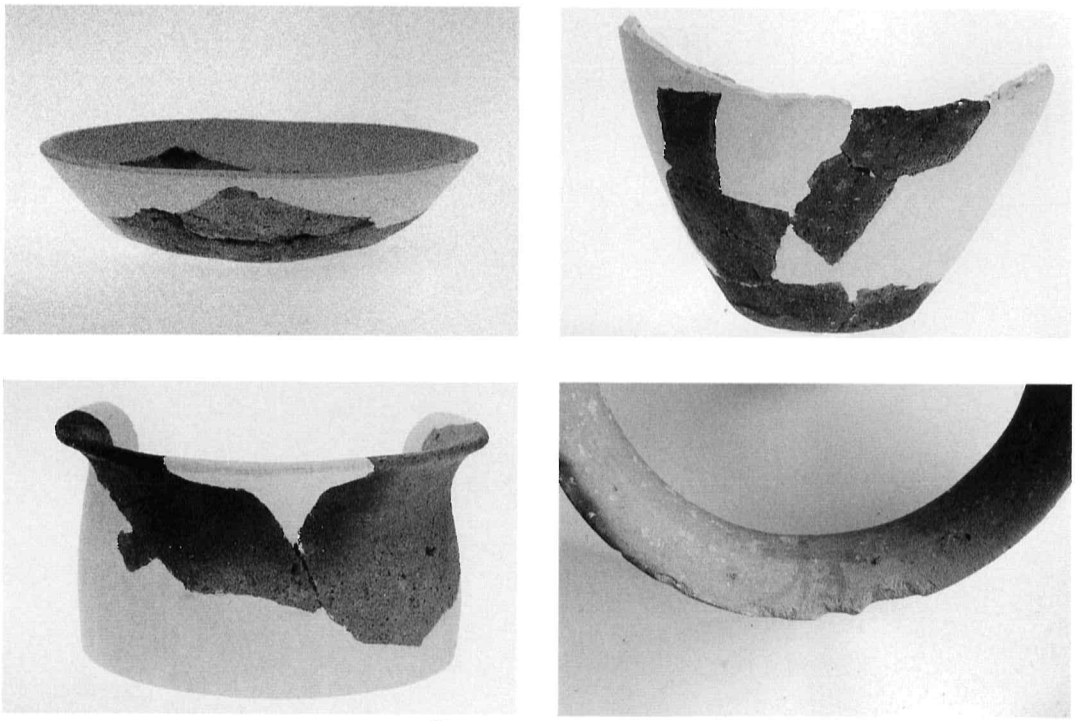
② 炭窯完掘状態（西より）



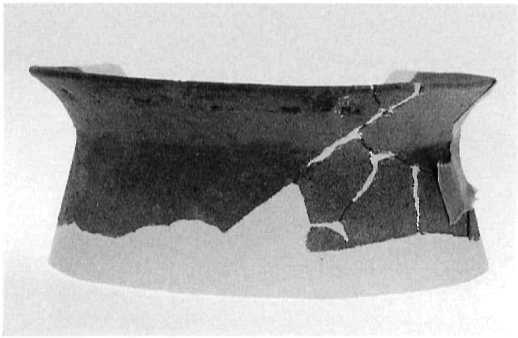
①SI-01出土遺物



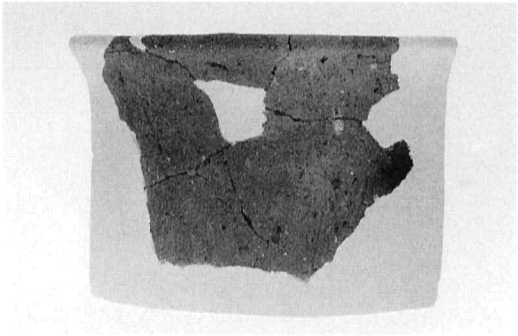
②SI-02出土遺物

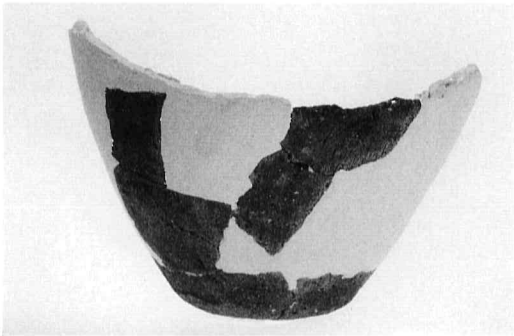


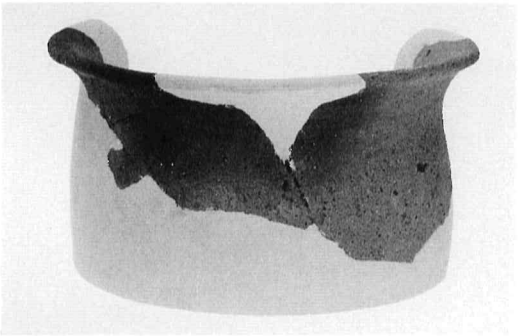
③SI-03出土遺物（1）

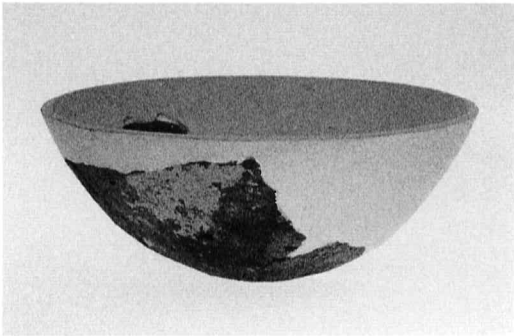


①SI-03出土遺物（2）

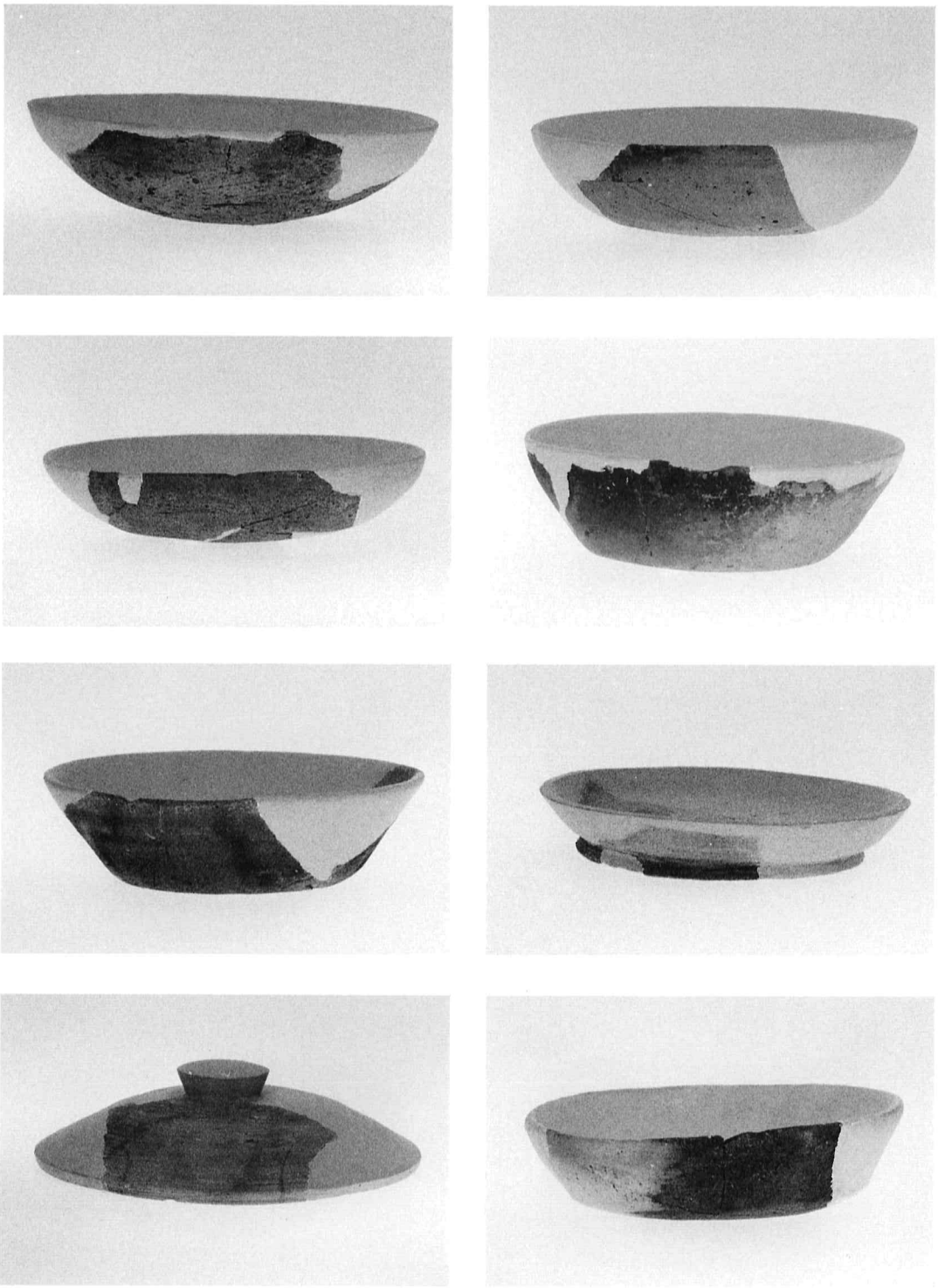




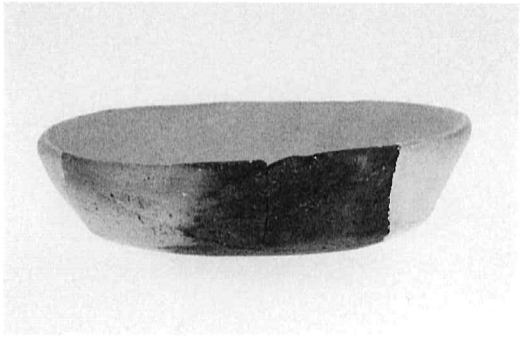
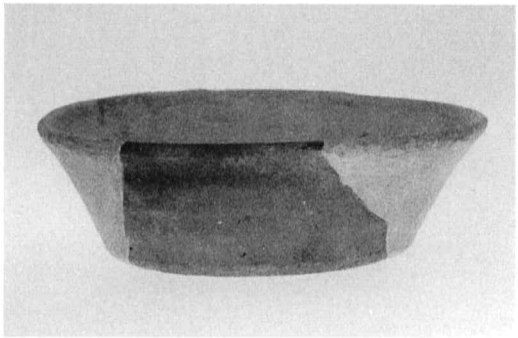
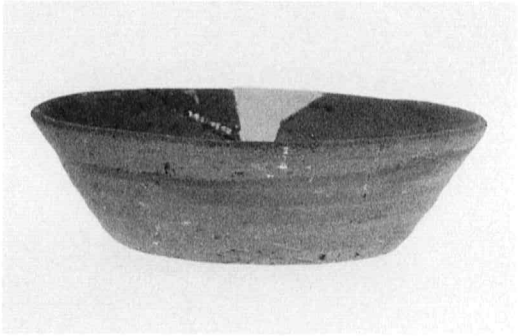
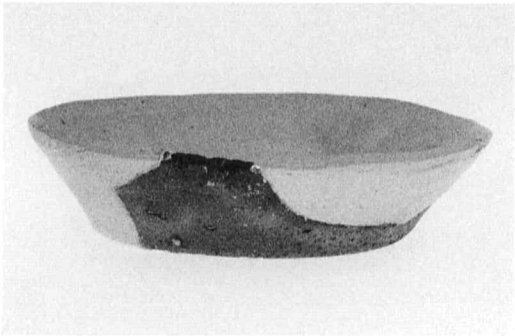
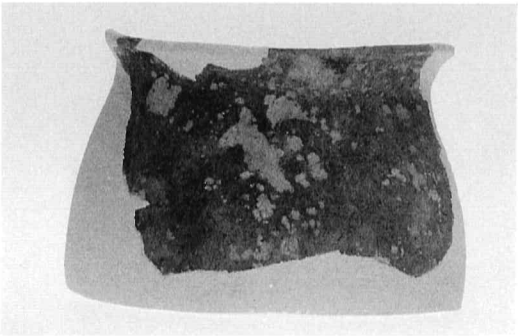
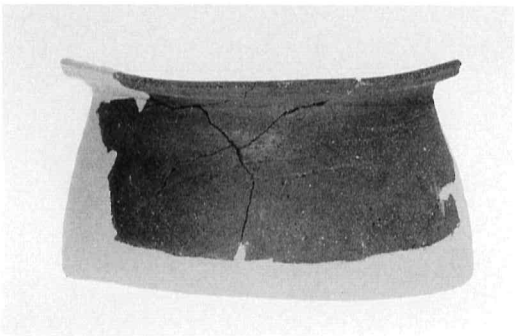
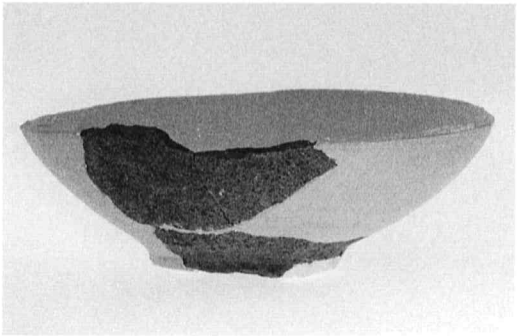




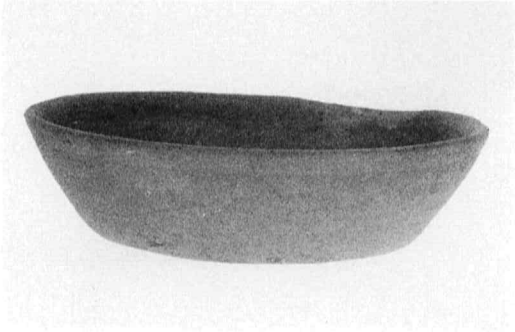
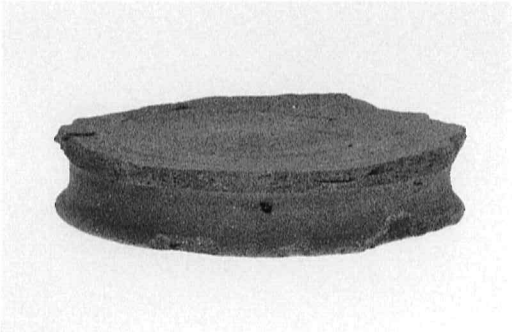
②SI-04出土遺物（1）



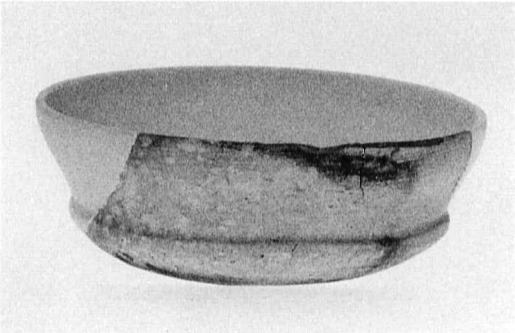
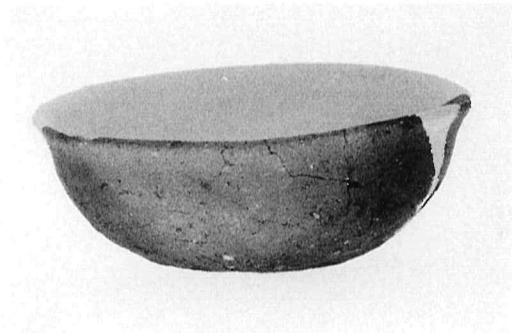
①SI-04出土遺物（2）

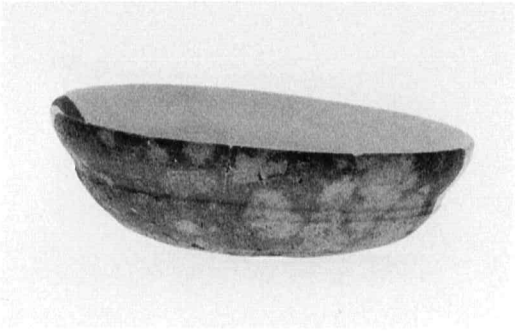
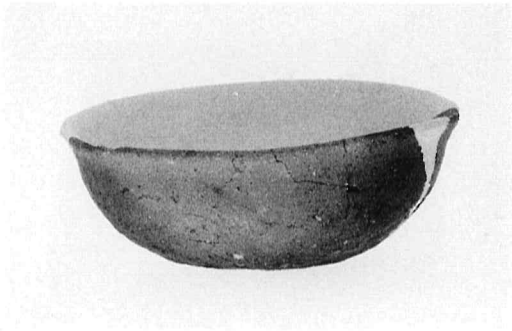
①SI-05出土遺物

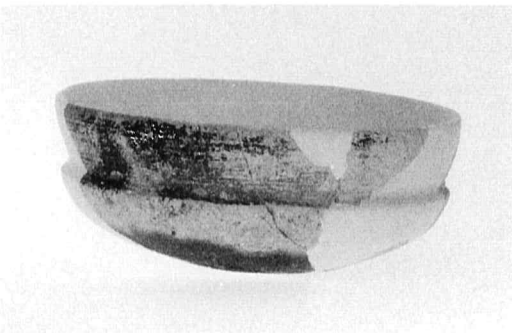



①SI-06出土遺物

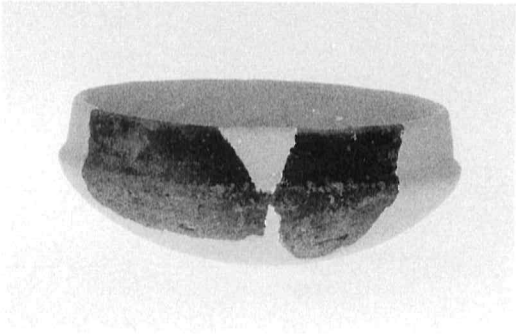
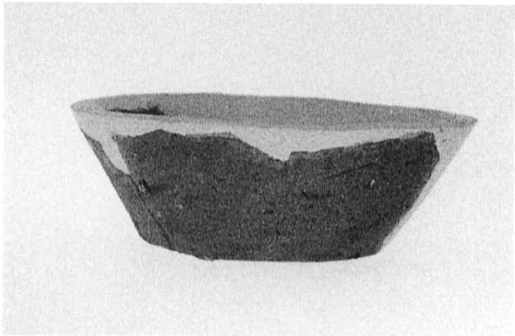



②SI-07出土遺物

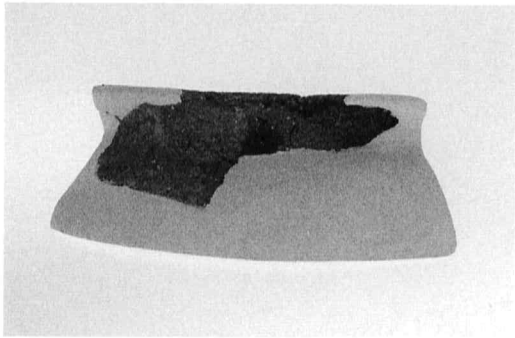





③SI-08出土遺物（1）

①SI-08出土遺物（2）



②SI-09出土遺物

③SI-10出土遺物

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第33集
下　原　遺　跡

平成５年８月発行

発行　宇都宮市教育委員会文化課
（宇都宮市旭1-1-5）
TEL　(0286)32-2764

印刷　㈱松井ピ・テ・オ印刷
（宇都宮市平出町4287-7）
TEL　(0286)62-2511